
君がいることの全て

桜羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君がいることの全て

【Nコード】

N9447G

【作者名】

桜羽

【あらすじ】

転校先である男の子に恋をした、桜羽^{さくら}。そこにまちつけるのは辛く、苦しい現実。元カノが忘れられない、彼に精一杯に恋をした

第一話・出会い

すがすがしい朝。

もっと寝てたい……………

も少し、あと…10分…

そして

「ツのわあ つ！！！！9時じゃんつ！！！」

転校初日に、遅刻した。

「何してたんだ」

怖そうな先生に絡まれた

「えとお ……寝坊です」「こういうのは正直が一番！！」

あだし偉いつ……………！！

「はあ ……まあいい。さ、3組に行つて」

「はあ いつつ」

ちよろいちよろい

私^{あやの}綾野^{さわ}桜羽は親の都合で引越しをしてきた。

別に寂しいとかは思わない。

新しい出会いを求めて、いざ出陣ッ！！

「…ふっ！！我ながらハンパない方向音痴ぶり…」さっそく道に迷

った。

「あつれ ？？」

曲がり角を曲がったらあるはず…

私は曲がり角まで早歩きをした。

あ。

『二年三組』

あれかな？

見つけた！！！！急げっ！！

ガラッ！！！！

「綾野桜羽ですっ…！！遅れてすみませ……………」

教室に入ってすぐ目があった男子…………。

私の方を向いて、笑った。

ドキンッ…………

わっ…………

不覚にもドキドキしてしまった…

「みんな、転校生の子だ！！仲良くするように」

先生の声にみんながちらほら返事をしていた。

「あそこの空いてる席に座って」

「あ。はい」

って……

あの男の子じゃん!!

私はとりあえず普通に席に座った。

「桜羽…珍しい名前　!!」

男の子はいきなり声をかけてきた。

「えっ…ああ、よく言われる…」

なんだ？

「俺、たにおか なおと谷岡那音よろしく」

「うん…」

那音の

第一印象は馴れ馴れしい
だったね。

今思えば

私が那音のこと好きだったのは
この時からだったのかもしれないね。

私から。

始まりは

ね、

第二話・初恋

「桜羽ー！」

「ん？なにー？那音」

あの日から那音とよく話すようになった。

「宿題見せてっ！！！！」

また、こんなことが：

「自分でやんなさいっ」私は那音に言葉のムチを入れる。

「ケチー！！他に頼むしっ！！もう頼んねー」

「ケチでけっこうです！！！」

深く関わって気づいた事…それは……

「ねー愛美！宿題みしてっ！！お願い〜」

「はあ〜？しっかりしなよー！！バカだね〜っ」

かなりの、女好き…ってこと。

正直女好きって苦手なタイプなんだけど、那音はそこまで嫌いな訳じゃない。むしろいい友達。

「桜羽〜！！移動教室だよ。一緒にこっ」

「あっ…うんっ！！！」

この学校の初女友達はこの、かんざきりつ神崎律

背が高くお姉さんタイプの頼りになる、いい子。私はこの子を《りっちゃん》と呼んでいる。

「ねえ桜羽つてさ、好きな人いる？」
「え〜…いないよ。残念ながらっ」

好きな人、かあ…。

私は今まで好きな人ができたことがない。

……ていうか

男の子はあまり好きじゃない。

理由は特にないけど…。

「…那音は？」

「はあ〜?!」

なに言ってるの!!

りっちゃんっ!!

「那音が一番仲良くしてる女子、桜羽じゃん？」

「いやっ…からかわれてるだけだよっ！」

「そうかなあ〜？」

「そうっそう!!!!」

私は思わず必死になる。変な誤解されたくないしっ…!!

「ムキになるなっ〜! まあいつでも相談のるよっ…!!」

逆効果だったらしい…。

「違っつてば〜…」

『好き』なんて感情

那音に生まれるわけがない。私のタイプは一途な人だし…。那音み
たいな女好きとつきあったら絶対痛い目に遭うだろうし。

恋になんてならない。

……ハズだったのに…

「……………桜羽…さ…わ」

那音が寝言で

私の名前を呼んでいた。

……………微笑みながら。

そんな事だけで

ときどきしちやって

顔がすごく熱くて。

那音が好きになった。

「さあ わっ！！」

「…つぶ！！！！」

りっちゃんが後ろから口を塞いできた。

「はひふんほっ…」

「聞き取れないしっ！！」なにすんの…

って言いたいの。

「桜羽、あのさ……………」

「桜羽 ！！」

りっちゃんという言葉と那音の言葉が重なった。

「アドレス教えて！！あと番号」

そっいいながら那音は駆け寄ってきた。

「え……………」

こんな反応だけど実はやっぱりすごく嬉しい。

「いや？」
「…悪用されそう……」
「ひどっ！…しねえよ！…」
「そういつと那音は私の髪をくしゃくしゃ
やってした」

ドキン…

「っ…冗談だよ…!!」
「だろうな。ほらっ携帯貸して！」

「…」

私はポケットから携帯を出した。
那音はそれを受け取り、慣れた手付きで素早く赤外線私のアドレスを那音の携帯に送った。

「さんきゅっ」
「いえいえ…」

私に携帯を返すと那音は自分の席に戻っていった

「那音って…」

「ん？」

「うっん！！なんでもないよ？」

「……………」

今、りっちゃんすごく寂しそうな顔…してた。

なんだろう……………？

「…てか、なんか私に用事あったんじゃないの？」
「えっ…あゝ忘れちゃった」
りっちゃんは舌を出して笑った。

…可愛い。

モテるんだろうなあ…。

「ねえ…りっちゃんってさ、彼氏いないの？」

「え……………」

……………一瞬

りっちゃんの顔が真顔になったのを私は見逃さなかった。

…なに？

「りっちゃん…私に何か隠してる？」

「なんもないよ！！…彼氏とかいないし……………」

りっちゃんはいつもと同じ可愛い笑顔でそう言った。

「……………そか……………」

勘違い？

りっちゃんのこと疑いたくない……………。

……………信じよう。

りっちゃんのこと……………。

りっちゃん……………

ごめんね

大事な大事な

りっちゃんだったのに

私、何も気づいてあげられなかったね……。

「ねえ桜羽ってさあ、那音が好きでしょっ!!」

「…んぐッ!!…!!なっ…なに…言ってるのっ!!」

突然の、りっちゃんからの質問だった。

私は思わず飲んでいたお茶を吹き出しそうになった。

「…好きでしょ?」

「……………」

りっちゃんになら言ってもいいかな?

「実は…好き…です」

顔がすごく熱い!!…!絶対赤いよ!私!!//

りっちゃんはそんな私を見てクスツと笑った。

「可愛いなあ。頑張れよっ!!応援するから!!」

「うっ…うん。ありがとう」

良かった…。

いい反応してくれて…。

好きな人できたのなんて初めてだ…

つまり人に言うのも初めてだった。

「那音に告白しないの?」

突然りっちゃんが言い出した。

こっ…告白?!?!

考えもしなかった！！／＼／

「っ無理！！フラれんの怖いし……」

いきなり告白したって絶対…フラれるでしょ。

そんなことを考えていたら顔に出ていたのか、りっちゃんが優しく微笑んで私に呟いた。

「大丈夫。フラれること恐れてたら誰も前になんて進めないよ…ねっ！！気持ちが悪く落ち着いたらまた相談して？いつでも聞くからさ！！」

「っ……りっちゃん……だいすきいつ！！」

私はりっちゃんに飛びついた。

「のわっ！！あははっ！！あたしも大好きだよ…」

りっちゃん

りっちゃん…

……ありがとう……

私、精一杯頑張るね。

こうして

私の

長い…長い

初恋が 始まりました。

私の、精一杯の恋でした

第三話・メール

りっちゃんに那音のことを話してから私は余計に那音のことを意識するようになった。

りっちゃんはこれでもかってほどに協力してくれた。

…だから

あんなこと隠してたなんて思いもしなかったんだ

）
）

「っわー!!」

いきなり鳴り始めた携帯にびくっと肩が上がった。時計を見るともう夜中の11時を回っていた。

こんな時間に誰だろ??

ゆっくりと携帯を開けると、携帯の画面に映ってた名前に私は固まった。

「な…那音…??」予想もしなかった、那音からのメール。
初めての那音からのメール。

何の用事だろう???

いろいろな疑問を抱きながらもメールを開いた。

【やほ！！メールしてみた　メールワクかな？】

う……わぁ……！！

好きな人からの

初めてのメール。

すごい嬉しい……

【やほ　メールワクじゃないよ〜　^　^　】

こ……こんなんでもいいのかなっ！？

冷たい？？

大丈夫かなぁ……？？

ていうか、なんでメールごときに私はこんなに悩んでいるんだっ……！！！！

「あ……もう……」

これが……恋……

なんかすごい新鮮だ。

変な感じ……

メール見ただけです……すごい会いたくなる。

顔、見たくなる……。

く
く

返信早いッ!!

嬉しいな…。

【よかった〜f^_^ ;

つかさ、明日暇??

桜羽の転入祝いつてか はじめまして会???みんな ながしたいらしいよ】

…転入祝い…???

クラスのみんなが…??

うそお…

すごい…嬉しいよ…。

【もちろん すごい嬉しい。ありがとう】

心からの私の本音だった。みんながそんなこと考えてくれてたなんて…

く
く

【よし じゃあ明日の夕方6時からな

学校前集合だつて】

【了解 じゃあまた

明日ね〜】

パタン

ゆったりと携帯を閉めた。
那音に…会いたいなあ…

「うつかり…好きって言っちゃいそいだよ………」

那音…

私が那音のこと好きって言ったら那音はどんな顔するかな…??
やっぱり…
困るんだろつなあ……

……ねえ、那音…。

チチチ…

「…ん………」

あれ???

あ…私あのとすぐ気づかない内に寝ちゃったんだ…。

くくく

いきなり携帯が鳴った。電話だ。

「もしもし???」

『もしい 律だよ』

電話の相手はりっちゃんだった。

「どうしたの???」

『今日一緒行かない???』

「ん…??あ、うん」

一瞬なんのことだかわかんなくなってた。

寝起きでまだ頭が起きてないよー…

『じゃあ5時に桜羽んち行くね』

「うん。ばいばい」

『ばいばい』

ブツツ … ツーツー…

私は電話がキレたのを確認してから携帯を閉めた

5時

「桜羽っ…可愛い!!!!」

「えっ…!!ありがとう」「私は白中心のワンピースを着た。りつちやんは短パンにカットソーを着ている。

スタイルいいからすごい似合っくて可愛い。

「さ、行こっか」

「うんっ!!」

学校に着くともうみんなが着いていた。

「え…まだ、5時半…」

「「桜羽ちゃん」

「「綾野っ」

「「ようこそ2年3組へ」

「」

みんなが声をあわせて言う。

……なに…これ…??

「桜羽、びっくりしたっ??」

「……………」

「な…那音!!ほら桜羽ちゃん引いてるじゃん!!ばかっ!!那音の考え古いよっ!!」

え…???

那音が…考えたの??

「ありがとう…」

「桜羽ちゃんよろしくね」

「仲良くしてね」

みんなありがとう…

那音ありがとう…

私この学校にきてよかったよ。

「ハニーフラッシュ」
「」

只今カラオケ中でございます。みんなのテンションはMAX

私は歌わずにタンバリン係り。

……………ん？

そういえば那音がない。

不思議に思っておりっちゃんに聞いてみるとトイレに行ったらしい。

ブー…ブー…

「？」

携帯が鳴ってる。

お母さんとかかな？

私は急いでカラオケボックスをでた。

「もしもし？」

『…もしもし？俺』

え…？

「な……………那音？」

『うん。俺。今どこ？』

「ん？えと…カラオケの近くの公園だよ」

ドキン…ドキン…

心臓がすごくドキドキしてる。

『わかった。じゃあな』

「?…うん。はいはい」

ブツッ…

ツ…ツ…

……………?

なんだろう?

ドンツッ!…!…!…!

「桜羽っ…!…!」

「っわぁ?!」

後ろから那音が背中を押してきた。

ま…まじびつくりした…!

「な…なにっ?…どうしたのっ…?」

二人きりだ…

すごいドキドキする…。

「…や、上見ても?」

…上???

私はふっ、と上を見た。

「…う…わぁ……………」

見上げた、夜空には
数え切れないほどのたくさんの、星……。

「キレイっしょ！！今日すんげえ晴れてたから星も綺麗だろうなって思っ…なんか桜羽に見せたくなくなっちゃってさ」

「…………あた…しに？」

「おう。今日だけ特別」
そう言っ…て那音は私に笑ってくれた。

嬉しいよ…

好きな人からこんなことしてもらったら

涙でできちゃっ…じゅん…

「…ありがとう」

「うん…」

そっ返事をする…と那音は力なく微笑んだ。

「……………那音？」

「えっ？あ…なに？」

「…どうかした？」

「……いや、なんもね よ！ー！気にすんな？」

「…うん？」

さっきの顔が頭から離れない…。

モヤモヤするなあ…。

でも気にすんなって言ってるし…

あんま気にしすぎもいけないかも知れない。

「お前、可愛いなあ」

「っえ?!?!」

いきなり那音が口にした言葉。

「や、なあんかね じゃあな！ー！俺帰るわ！ー！」

「えっ…!?!?ちよ…」

那音は走って行ってしまった。

“可愛いなあ”

……なによ、それ…

バカ…

心臓おかしくなるでしよっ…?!

…ガチャ

「あー!!桜羽どこ行ってたんだよっ!!心配したじゃんっ」

「あっ…ごめんね ー!!」

カラオケボックスに戻るとみんなに心配された。

結局10時まで歌って解散になった。

「バイバーイ」

「またね」

「はあ……疲れた」

私は携帯を開いてみた。“新着メール一件”

誰かからメールが来てた。りっちゃんかな？

【俺のサプライズパーティーすごかったっしょ】

「な…那音だっ!!」

実は少しは那音かも、なんて心の端っこで思ってたりもした。私は返事を考えた。

【…好き】

…なんて。送れたらいいのになあ…。

今の私には勇気がないから…。

「…アホらしい…消そ」
「バンツツ…!!!」

「ツお姉ちゃんっ…!!!」

「ひぎゃあっ…!!!」

ポチツ

「あつあんた…!!!いきなり入ってこないでよっ…!!!…っ…ん
?ポチツ…?」

“送信しました”

“送信しました”

“……………送信しました”

送信……

【…好き】

“送信しました”

「ぎよわああああ
「なっなにっ…?!」

「!?!?!?!?!?!」

送った?!?!?
好きって???????

うそお つ!!!!!!

アホだ!!
バカだ!!

冗談でも打たなきゃよかった!!!!!!

ていうかつ!!!!

「元はといえば…美羽がいけない…」
そう言って私は1つ年の離れた妹の美羽みうを睨みつける。
「はあっ!?!お姉ちゃんが勝手に美羽の携帯の充電器取って使うからでしょっ?!」

んな話あとでええわ つ!!!!!!

「あー…最悪…」

くく

メールの着信音が部屋に響き渡る。

ドクン…

「…はあっ…！あとですぐ返しにきてよっ…！」
そう言っつて美羽は部屋を出て行った。

「……………」

開きたくない。

怖い……。

だけど…しょうがない。現実と向き合わなきゃ…

…ポチ……

そこには

思いもしなかったことが書かれていた。

ドクン…ドクン…

嘘でしょう……？

ねえだれか…嘘…って

誰か嘘つて言っつてよ…。

【律から聞いてない？俺 律と付き合っつてるんだ けど…しめんな。
あり がとつ】

……信じてたのに

りっちゃんのこと

信じてたのに

第三話・メール（後書き）

そんなこんなで
頑張って書きます。

ご覧になられた方、
ありがとうございます。
嬉しいです（）、、

第四話・すれ違い

「どういつ時どいつすればいいのかわからないのか、恋愛初心者の私にはまったくわからなかった。

……どつしどつ。

りっちゃん……

那音……

……私、どうすればいい……？

重たい気持ちのまま私は学校に向かった。

ガラッ……

「おはよー……」

誰にするわけでもなくあいさつをしながら教室に入った。

ていうか、教室には誰も居ないし……。

みんな、部活の朝練。

私は転入してきたばかりだから部活には入っていない。前の学校でも何もせず、帰宅部だった。

もちろんこの学校でも入る気はない。

ていうか、今はそういうことを考えられるような余裕がない。

私は時計を見た。

「…あと、10分…」

あと10分で部活が終わってみんな帰ってくる。

那音に会いたくないな…

ううん。

それ以上にりっちゃんに会いたくない…。

「おはよ 桜羽」

ビクッ…と体が一瞬跳ねた。声のする方を見ると……

「……りっ…ちゃん…」

「ん？どうした？」

いつもと変わらない顔と態度で私に接してくるりっちゃんに私は奇立ちを覚えた。

「…なんでもないよ」

そう言っ私は顔をそむけた。

笑顔作ってるつもりなのに…自分でも笑顔が引きつっているのがわかる。

そんなことを何も知らずにりっちゃんは私にしつこく話をかけてくる。

「嘘だあ　なんかあったんでしょ？　那音のこと？　進展あったかあ？」

ピクッ…

『進展あったかあ？』

なに……？

なんで…りっちゃん那音とつきあってるじゃん…そんなに余裕かましてられるんだ…？

私のこと心の中で

……笑ってるんでしょ？

「…桜羽？」

その時、私の中で何かが壊れた。

「…け………ないで」

「…え？　聞こえな…」

「ふざけないでよっ…！」

私は腹の底から声をだした。

自分でもびっくりするほどでかい声だった。

りっちゃんもそうとうびっくりしている。

でも今の私にはそんな事を考えている余地はなかった。

「な…ちよ、桜羽…？」

「りっちゃん、那音とつきあってるんでしょ？」
「…っ…………え…？」

明らかに動揺している。

「最低ッ…今までずっと協力するフリして私のこと心の中で笑ってたんでしょ?!」

止まらない。

勝手に言葉が出てくる。

「そんな子だと思わなかった! !見損なつたよ! !りっちゃんのこと…友達だと思ってたのにっ…! !」
涙が出てくる。

…なんだ?この感情。

「さ…桜羽っ…」

「もう二度と名前呼ばないでっ…! !りっちゃんなんて…大嫌い…りっちゃんなんて」

信じなきゃよかった…」

「……………ッ! !さ…わ」

「…最低だよ…」

そう言い残して私は教室を出た。

りっちゃん……

…信じてたのに…

全部全部嘘だったんだ。
あの笑顔も、言葉も。

信じなきゃよかったよ。

「ッ……りっちゃん……」

今のりっちゃんのそばに、私はいちゃいけない。

りっちゃんの幸せと

那音の幸せを

私は願わなくちゃ。

それが私にできる唯一のことだ。

きれいな事かもしれないけど、ちゃんと心にはそついつ気持ちはあるか
ら……。

私はどちらからも

……身を引くよ。

13歳、中学2年。

“君”から、さよなら。

第五話・本音

あの日からもう何日たっただろう。

ざっと……3カ月りっちゃんと那音と話をしていない。
りっちゃんは

「ごめん」というメールを何回も送ってきてくれた。

だけど返信はしなかった。

那音は話をかけてきたりしてくれたけど、全部無視してしまっている。

これでいい。

私が2人の前からいなくなってしまうえば2人は私のこと気にしないで付き合ってもらえる。

……これでいいんだ。

「さっち」

「あ。光奈……」

この元気いい子は金本 光奈

私とりっちゃんとのことを知りつつ私と一緒にいてくれる。

ちなみに光奈は彼氏持ち

「大丈夫？つらかったら光奈に言うんだよ？」

……………光奈……………

「うん…ありがとう」

私はどれだけ光奈に救われただろう。

光奈…ありがとう。

「つかさぁ…律も律だよねー。最初から言えばよかったのにね。なんで隠してたんだろっねー」

そう言っつて光奈は腕を組みながら首を傾げた。

“なんで”っつて……………

考えた事もなかった。

なんで…言ってくれなかったのかな…？

私のこと、気遣ってくれてた？

だけでもしそっつたとしても“応援する”は言わないと思っつ。

りっちゃんの謎は深まるばかり…。

「……はあ……」

家に帰ってきてから溜め息しかでてこない。

……那音と、話したいなあ……。

……顔みたいよ……。

「……好き……」

恋ってこんなに苦しいんだ。

恋ってこんなに辛いんだ。

恋ってこんなに……

……寂しいんだ。

知らなかった。

こんな気持ちになるなら

恋なんて ……

〈 …… 〉

「……あ、電話……」

私はゆつくりと携帯に手を伸ばして画面を見た。公衆電話からだ。

……誰？

「もしもし……？」

あきららかに……自分でも分かるほどに声が低い私。相手の気分も悪くなるだろう。

『……………』

……………???

相手は、何もしゃべらない。

なに？イタ電？

私はイラついて相手につつかかるような声でまた聞き直した。

「あのっ…誰スか？用ないなら切りますけど…」 『あっ！！待った！！俺っ、那音…です』

……………え？

「…は…？」

なんで…那音が、私に電話なんか…。

私は理解ができなくて黙り込んでしまった。

『ごめん…急に。桜羽、話しかけても逃げるから、電話した。携帯からだとでてくれないかなって…だから公衆電話』

心臓が、徐々に速さを変えていく。

速く、速く……………。

「…だって…しょうがないじゃん。フられたんだし…喋りたくない…」

『そんな理由じゃないだろ？』

ドクン……………

私の言葉を遮るように那音が言葉をかぶせてきた。

「……………」

だって、言えないよ。

“ りっちゃんと那音のため
だなんて。”

絶対いい子ぶってるとか思われる。

『…………話しかけてよ』

そう小さな声で那音が呟いた。

なんで…

そんな寂しそうな声だすの？

「那音には…………りっちゃんが、いるじゃん…………」

なんで…………

『…………律とはもう2週間くらい喋ってない。メールしてもブチられるし…………俺、桜羽に嫌われたくねえんだよ…………』

小さな、小さな声で

振り絞るような声で…………

好きな人にそんな事言われたら、何も言えないに決まってる。

那音は、女好きだから
ただ女友達が減るのが嫌なだけなのかも知れない。

でも…
やっぱり……

「…うん…今まで、無視してごめんね。でもさ、中途半端な優しさ…ツラいんだよ…？那音の…事、本当に好きだから…」
気づかないうちに
私の目からは涙が溢れていた。

本当に、本当に…
那音が好きだから、

涙が出るんだろうなあ…
『…ありがとう。つか中途半端に優しくしてるつもりないから…桜羽だけ』
きゆう…

って、
胸が苦しくなった。なんでそんな事言うんだよ。
那音にはりっちゃんがいるじゃん。りっちゃんが好きなんですよ…？

「っ…ばか…あ………」

なんで…

なんで……

那音は

何、考えてるの？

『ごめん…だけど…』

なになが、ごめんなの？

「っ…ごめんの意味わかんないっ…」
涙で、視界が歪む。

『俺、自分の気持ちわかんねえの…律が好きなのか桜羽が好きなのか…わかんねえんだよ…』

「……………え…？」

……………な…おと…？

『俺、桜羽に告られた時は正直心揺れなかった。だけど、話しかけても無視されるし…なんかすごい寂しくて、ズキズキした…』

「……………っ、そ…お…」

私の目から余計に涙が溢れ出てくる。

『だから…気づいたら桜羽のことばっか気にしてて…好きなのかも、っ…』

「っ…う……………ひっく…」

言葉がでない。

私が黙り込んでいると那音は、ふう、と溜め息をついてからしゃべりだした。

『……だから待っていてくれる？俺の答えがでるまで……』

そんなの、決まってる。

「……うん……」

……りっちゃん

ごめんなさい。

那音……

ごめんなさい。

二人の幸せ壊しちゃって
本当にごめんなさい……

だけど

私はやっぱり那音が好きです。

側にいたいです。

離れようとしても無理だった。
諦めかけてた、恋。

もしかしたら

那音は私をみてくれるかもしれない。

3カ月

那音から離れた。

だけど3カ月の間

ずっと那音のこと考えてた…。

那音、那音……

ちゃんと待ってるから

那音の答えがでるまで。

………待ってるからね。

第六話・答え

「えーっ！！！！！」

「ちよっ…光奈！！声大きいよっ！！」

今さっき光奈に全てを話した。

光奈はいろいろ表情を変えて、話を聞いてくれた。

「ごめん、ごめん。…でもさ、もし那音が律と別れて桜羽を選んだら、すぐに律に情報行くんじゃない？」

「うん…そだよね…」

りっちゃんはきつと泣いちゃうんだろうな…。

私のこと…恨むんだろうな…。

「……だあいじよぶっ！！光奈は桜羽の恋応援するよ」

私が心配しているのが顔に出ていたのか、光奈は私の背中を軽くたたいて笑ってくれた。

「うん…ありがとう」

光奈は本当に優しい。

いつも光奈の優しさに助けられている。

本当に、感謝です。

「とりあえず今は自分の恋頑張ってみな？」

「…うん。頑張る…」

まだやっぱりりっちゃんのことを気にしちゃうけど今はとりあえず頑張ってみよう。

那音に精一杯、恋しよう……。

私は家に帰ってきて携帯を眺めていた。

……那音からメールこないかなあ……
なんて。

付き合ってるわけじゃやいののに、バカみたい…。

でも

もしかしたら……

那音と付き合えるかも知れないんだよね…。

そう思うとなんかすごく不思議な気持ちになった。

もしかしたら……

…もしか…したら……

くくく

「ん……？」

あれ…気づかないうちに私寝てたんだ…

ていうか…!

携帯なってるしっ…!

ヤバイヤバイ…!!

私は急いで電話にでた。

「も…もしもし…?」

誰だろう…

なんて、思う前にわかった。

『…俺…です…』

…やっぱり、那音だ…

「……………」

何を話せばいいかわからない。

ドキドキしすぎて心臓が壊れそう…

『……………別れた』

「え…?」

ドキン…ドキン…

心臓が速くなっていく。

『…なんかね、桜羽が好き……………』

「…りっちゃん…大丈夫だった…………?」

…無意識に言葉がでていた……

私、なんでりつちゃんのこと気にしてんだ…？

ひどいことされたのに…

ひどいこと…されたけど

だけど……だけど…

まだ友達のいなかった私に女の子で、一番に声をかけてきてくれた…。

りつちゃんは…

私のこと好きだったかな…？今はもう、私のことなんて嫌いになっ
たかな……？？

『…泣いちゃった…けど、大丈夫だと思う…』

“泣いちゃった”

「……そっか…」

…私が、りつちゃんを泣かせちゃったんだ…。

私が、

那音を…好きになったから…。

『気にすんなよ？律は強いからさ…きつと大丈夫。すぐに新しく好きな人できるよ…』

そう、小さな声で那音は言った。

「……………うん……………」

私は、なんて言ったらいいかわからなかった。

一呼吸おいて那音は真剣な声で……………

『……………桜羽……………俺と付き合って……………?』

って言った。

私の返事なんて決まっている。

「っ……………はい……………」

気づけば

私の目からは

涙が溢れ出ていた。

ずっと

ずっと

側にいてくれますか？

那音

私は那音に

…何か残せましたか？

「側にいる」

そう言ってくれたね

那音

私は、本当に本当に

…幸せでした…

第六話・答え（後書き）

展開はやくてすみません・・・（――；）
これからが長いです。

たぶん

・・・たぶん！！笑

第七話・打ち明け（前書き）

第六話に文字間違いがありました。

気づいた方、すみませんですm（| |）m

これからは気をつけます（）、、；

第七話・打ち明け

私、
那音の彼女になったんだ……。

まったく
言っていていいほど実感が湧かない。

どんな顔して会おう。
ドキドキしてきた……。

「桜羽！おはよあ……！」
この声は……光奈……！
「おおおお……おはよっ……！」

うわっ……！
なんか声裏がえった……！

「どうしたんですか……桜羽さん……ぶくくっ……」
光奈はツボに入ったらしく、腹を抱えて笑っている。

ひどっ……！
そこまで笑わなくても……（泣

「笑いすぎっ……！なんでもないよっ……」

なんか、言にくい！！

言いたいけど恥ずかしいな……。
なんて言えばいいかな？
とりあえず

光奈は協力してくれたんだし、ちゃんと唐突に
「付き合うことになった」って、言おう！！

「あのさ、み……」

「おめでとー！！さっち」

えっ……？

「……………へ？」

予想もしなかった光奈からの言葉。

“おめでとー”
って……………

那音から聞いたのかな？

「だ…誰から聞いたの？」

一応、確認のため、聞いてみた。

「んなの、決まってんじゃない 那音だよ！！」

光奈は即答だった。

光奈がいうには那音からメールで聞いたらしい。

「ホント、嬉しいよ！！さっちが那音とくつついて」

あ

久々に“さっち”って呼ばれた。

光奈は、テンション上がってるときはいつも“さっち”と呼んでくる。

たぶん光奈自身はこのことに気づいていない。
私だけが知ってる光奈のクセ。

「つかさ、光奈はどうなのっ？彼氏……」

ふと気になった。

光奈は私のことにかまってばかりで、光奈から光奈自身の話を聞いたことがあまりない。

「ん？らぶらぶだよ」そう、頬を赤らめてハニカんだ光奈はすごく可愛いかった。

そんな光奈を見てるとこっちまで笑顔になる。

「いいなあ……つか誰よ？私聞いてないよね？」

同じクラスって言ってたのは知ってる。

……このクラスに

光奈の彼氏がっ……！！

「あれ？言わなかったっけー？バスケ部部长だよ」

「バスケ部……部長……」

思い出せ…

部長……

部長……

「あつー!!」

思い出したー!!

確か麻樹 まき あやと
 絢斗だ。

めずらしい名前だなんてすぐに目に付いた名前の人だ。

「そうそう」

「へえー…今何ヶ月？」

麻樹は、背が高く、顔立ちが整っている。

目が大きくて、鼻が高い。いわゆる世間一般で言う、イケメンだ。みんなに優しくいい人

そんな人と付き合えるなんて光奈、すごいなあ。

「んー…半年ちょい」

なっ……長いですー!!

「…すごいねー!!」

それしか言うことありませんっ……!!

「あ……あのさっ……」

そしてそして……

気になることがもう一つ

「ん？なに？」

「ぶっちゃけ……」

麻樹……と、どこまでっ………???

真剣な表情で聞いた。
光奈は固まっている。

でもでもでも!!!

やっぱり、気になります

「どこまで……うーん……キスまでですよ？」

……!!!

よかつ……

「うそつくなよ」光奈

「うわ!!!ちよ……絢斗!!!」

麻樹が私たちの会話の中に入ってきた。

てか

“うそつくなよ”
つて……

「……ッ……え……ええええええ……?!!?!!?!!」

私は今まで生きてた中で出したことのない声を出した。

「そそそそつ……!!!そんなっ!!!まだ中2つ……!!!」
「ぶつ……」

んっ？

「ぷ」???

今、二人笑って……………？

「あははっ！！さっち純粹！！可愛すぎっ……………！！」

「俺久々にこんな純粹な子みたわ！！超貴重……………！！」
二人は腹を抱えて笑っている。

き……………貴重って……………！！
ひどいなっ！！

「あゝかわいい…ぶっ」

笑ってますよ。

光奈さんっ……………！！！！

「大丈夫大丈夫！！俺まだ手出してないよ。冗談だから。さっきの」

「じ……………冗談……………」

私一人でバカみたいに騒いで……………

マジバカですね……………。

「まあまあ！！さっちも那音となんかあったら報告ね」

なんかっ……………

何スか……………

「了解です!!」
とりあえず、指示に従う私だった。

キーンコーンカーンコーン……

「桜羽」

「!!」

私の大好きな声が私の名前を呼んだ。

「……一緒に帰る？」

そう言って笑った。

「う……うんっ」

嬉しい……

まさか一緒に帰れるなんて思いもしなかった。

「……久しぶりだなあ。電話以外で話するの」

「……そうだね……」

ああ……

私重症だなあ。

声聞いただけで心臓が壊れそうなくらい脈打ってる……。

「…まじ、無視されて悲しかったし…」

那音は下を向いて口を尖らせている。

可愛い…

「うんー…ごめんね？」

ちよつと笑いながら那音に謝った。

「……明日、デートしてくれたら許したげる」

「え……………」

…デートのお誘い?!?!

「じゃなきゃ許してあげないもーん」

子供かよ!!!

つてツッコミ入れたかったけど…

「わかりましたよ。明日ね。どこ行くの？」

「ん〜…水族館…とか?ありきたりすぎ?」

確かにありきたり。

だけど…

「那音と一緒にならどこでもいいよ」

私の、心からの言葉。

那音がいれば

那音が笑ってられるなら

私はそれ以上望まない。

本当に本当に

心からそう思えた

恋だった。

第八話・初めての。(前書き)

えろいとかそういう“初めて”じゃありません…笑

第八話・初めての。

時計を見れば

もう8時40分だった。

あと……

20分……

【明日9時に駅前の公園に集合ねー。ちゃんと来いよっ？】

「うっ……緊張してきた」

初めての彼氏と、初めてのデート。

そりゃ緊張もしますよー！時間が近づくとつれ私の心臓は速くなつていく。

ふと時間を確認すると、もうあと10分になっていた。

ていうか……

この格好で大丈夫かなあ？

私は薄いピンクのワンピースに、軽く白いパーカーを羽織った。そ

「っ……！！ごめんっ」

謝ることしかできませんっっ！！！！！！！！

「……アホか。嬉しいに決まってんだろ……」

「えっ……」

う……わあ……

那音は真っ赤だった。

初めて…こんな那音見た

「お前だつて可愛いよ。ほらっ！！手！！」

そう言つて那音は私に手をさしのべる。

「は……はい……」

なぜかわからないけど小さく返事をしてゆっくりと那音の手に私の手を重ねた。

那音は私の手が重なるとすぐに力を強くした。

那音の手は私が想像してたよりも大きくて、温かかった。

なんでこんなに

安心できるんだらうなあ

「すげえ！！見てっ桜羽！！サメく！！」

目をキラキラと輝かせて私に感動を伝えてくる那音。

意外な一面を知れたっ

「那音、小さい子たちの中に混ざっても自然……」

「うっせー！！……あっ！！ほらほらっ！！エイ！！」

可愛すぎ……

那音、すごい笑顔。（笑

思わずクスクスと笑ってしまう。

きゅるる……

「……ぶっ……！！」

しまった！！

気を抜いたらお腹なっちゃったよ！！！！

はずかしいっ……！！

「ちょ……笑わな……」

……

え……

な……

なんか今…口に入っ…

「今はコレで我慢しなねー あーウケたっ」

口に……

ハッ……！！

「っ…き、す………」

那音は私の口の中に一瞬の間にイチゴ味のアメを入れてきた。

あた……あたし……

あたしのファーストキス……！！

なんて軽いキスなんだっ……！！

もっところ、ロマンチックな…

「俺さ」

「えっ？」

いきなり那音が口を開いた。

そして振り向いて私の方を見た。

な……なんだろ……

「俺今の初キスだから」

「…っつそおお……！！」

「おいコラ……」

あ。

失礼だったかな。

だって……!!

女好きの那音が……!!

女好きの那音が……?!

私が初キスですと!?

「な……んだよ……変か?!」

「ちっ……違う……!!嬉しいよっ……!!」

……あ

つい勢いのあまり……

本音が……!!

「可愛すぎ……まじ……」

那音は耳まで真っ赤になっていた。

「真っ赤……ですよ?」

「ッ……!うるさいっ……!!昼飯行くぞ」

そう言つと那音は私の手をひきながら歩き出した。

「何食べたい?」

「うーん……なんでもいいよ?」

コレと言って食べたいものはなかった。

結構迷いに迷ってうどんになった（笑）

そのあとも那音の子供のような顔で私は癒されていた。

そしていろんなところを見回った。

定番のイルカのショーで那音のテンションは急上昇だった。

その子供のような笑顔

ずっと

ずっと

そばで

見てたいな

那音の隣で…

ずっと……

ずっと

ガタン…ゴトン…

「桜羽っ」

「……ん…?」

気がつけば電車の中。

隣には那音がいた。

「疲れたか？大丈夫？」

「ん…大丈夫……」……ウソです。

ものすごい疲れました。

「もう次の駅だから起きとけよ？」

「はあい……」

那音は疲れないのかな…私はどっぶりだよ……でも楽しかったなあ。

「また…どっか連れて行ってくれる？」

小さい声で訪ねてみた。

那音は

「…あたりまえじゃん」

って笑ってくれた。

こうして

私の初彼との初デートは幕を閉じたのでした。

第九話・応援団

「あつっー…つか日焼けするよね」

只今体育の授業中です。私は光奈とペアを組んで外でサッカーボールの蹴り合いをしています。

「ねー…焼け死にそうだよ…」

日焼けクリーム塗ってもきかなそうなくらいのいい天気。

雲一つない、快晴。

もう7月になろうとしていた。

那音とはもう付き合って1週間ちよつとなる。

毎日がどきどきして、楽しくて…

那音を毎日、毎日いっぱい、いっぱい好きになっていつている。

「はぁ…疲れた…」

「ね…」

…もう声も出さず気になりません。

「お疲れさま」

「あ。那音…疲れた…」那音は私の頭を撫でて“よくできました”って言って教室に入っていった。

あ…頭撫でられちゃった

そんな私たちのやりとりを見て

「ヒューヒュー　らぶいね〜。羨ましいなあ〜」と光奈がひやかす。

「ち…違うよ。つか光奈だつてらぶらぶじゃん」

光奈は彼氏といつも一緒に帰ってるし…

私は那音と帰ることはすごく少ない。

那音はいつも一緒に帰っている友達と帰っちゃうし…。

私は同じ方向の子、少ないから1人で帰ってるし…。

……………ん？

あれ？

今、重大なことに気づいた。

「光奈…那音ってどこ住んでる？」

「ん？ああ、うちの近くだよ？」

……………やっぱり……………

光奈と私の家の方向は正反対。

てことは那音と私の家の方向も正反対。

なのに

前、気遣って私の家の方向まで来てくれたんだ…

気付かなかった。

好きな人のことなのに…

「ああー…しくった…」
なんか…悪いことしたなあ…

「じゃあー体育祭の役員決めします！！体育祭は、夏休み明けにあるから…気合い入れていきましょう！！」

「おー！ー！！！！」

先生の声でみんなは盛り上がる。

す…す…す…

体育祭ってこんなに盛り上がるものなんだ…。

「桜羽なんかやる？」

後ろの席の光奈が声をかけてきた。

「えー…あんまり…やりたくはないかな」

体育祭っていったら応援団とか、そっちけいたろうし…。

私は基本目立つことが嫌いだからあんまりたくは…ありません…。

「だあよね〜！！めんどいしっ」

光奈も同意見だった。

「はい！！じゃあ応援団から決めようか。女子3人男子3人で。立候補いる？」

先生の言葉でみんながざわつき始める。

そして3人の男子が手を挙げる。

那音と、麻樹と…

あと1人は確か…片山健太かたやま けんたいつも明るくて女好きな那音と違って、どっちかっていうと普段は大人しくて男友達といるときはすごい明るい、男の子だ。

「へ〜…片山も応援団かあ。なんか意外かも」

と、腕を組みながら言う光奈。

「……確かに」

っていつてもよく知らない人だけど。

「誰か女子で応援団やりたい子いない？」

男子はすぐに決まったが女子がいないそうだ。

周りを見てみても手を挙げそうな女子はいない。どうすんだろ。

「ね〜…桜羽…」

光奈が私の背中をツンツン、と触ってきた。

「ん？」

「応援団やらないっ？」

「はっ?!」

いきなり光奈が笑顔で問いかけてきた。なっ…さっきまで“めんどい”とか言ってたくせに!!

「い…嫌だよっ…」

もちろん私は拒む。

「そういわずにっ！！ね？だつてさ、絢斗いるし！！那音もいるんだよっ？」

……………う

痛いところ突かれた。

「あの女好きの那音だよっ？！援団になった子と仲良くされるの嫌でしょっ？！ねっ？？」

光奈はとりあえず必死に私を仲間に入れようとする。

「…………た、確かにそうだけど……………」
他の女の子と仲良くされるのは嫌だ。

だけど…私すぐに緊張するし、足引つ張るだけだろうし…………。

「ね？やんない？私桜羽とやりたいんだよっ」
なんて言いながら顔の前で手を合わせている。

こんなに大事な友達に必死にお願いされて断れるほど私は鬼にはなれなかった。

「わかったよ。もっっ」

「ありがとうっ！！さっち大好きいっ」

まったくこの子は……………（笑）

「先生っ！！光奈とさっち応援団やりますっ！！」
大声で先生に報告する光奈にみんな注目する。
「おっ！！ありがとう。じゃああと1人っ」

「桜羽ちゃん、光奈とやるの？」

と、前の席の兩宮瑠架あまみやるかが話をかけてきた。

「うん。そだよ」

「じゃあうちもやるのかな」

「え!!..るうもやんの？」

光奈が身を乗り出してきた。

「だめなのかよっ」

「いやいや別に」

「てことで、以上で役員決め終了!!..応援団員は夏休みに少し練習あるけど頑張ってくださいね。じゃあ、解散」

…か、解散…。

普通に“サヨナラ”って言いましょうよ。

はあ…..応援団かあ。

あんまりまだ気が乗らない…。

「おい桜羽!!..応援団とかなんか似合わねーなっ」那音が私の背中をばしばし叩きながらバカにしてきた。

「うっさい…..やりたくてやるわけじゃないもん」

「なんだよ俺と他の女子が仲良くすんの嫌だったとか?？」

.....
こいつは私の心が読みとれるのかな。

「.....え。凶星？」

「ち.....！ちちちがつ、ちがつますっ！.....！！！」

.....か...噛んだ！！！！

すごい噛んだ.....！！

「ふっ...可愛いわ。まじで.....俺には桜羽だけだからな？信用しろよ？」

わっ.....

「は...はい.....」

こんな言葉を好きな人からもらえるなんて幸せすぎるよ.....。

「応援団頑張ろうな！」

「うん！！！」

頑張ろう。

那音と一緒にだし、たぶん頑張れる。

この“応援団”がまさか大きな事件につながるなんて私はこの時思いもしなかった

第十話・真実

蝉の声がとぎれることもなく耳に響いてくる。
汗が額を絶え間なく流れる。

…夏、夏、夏、夏……

………夏がきた。

「はい！お疲れさん。応援練習終わり。各自解散していいぞ」
「……はあ……い……」
みんな疲れきった声で余計に暑さが増すような気がした。

「桜羽、光奈！お疲れさんっ」

「っ……瑠架……暑い……！！」

瑠架が後ろから抱きしめてきた。

「えーそんな疲れた？」疲れたも何もありません疲れすぎて暑すぎて倒れそう……

「まあまあ 帰ろー」

「うん」

瑠架とは応援団で一緒になってから仲が良くなった。この頃は瑠架と私と光奈で行動することがほとんどだった。

「あー！あつちに那音いるよ」

「……？……あ。まじだ」遠くに那音の姿が見えた。那音とのことは

もちろん瑠架も知っている。

瑠架は可愛くてモテるけど好きになれる人がいないらしい。

「あはは！！那音走ってこっち来てるよ」

あ………

本当だ……

な……お、と……が

あたし……の……方に……

バタンツ！！

「ちょ……！？桜羽！！大丈夫？桜羽ー？！」

最後に瑠架の声が聞こえた。

あ………れ……

目を開くと白色の天井がなんとなく眩しかった。

こじ……

保健室？

「あ……倒れたんだっけ………？」
記憶がない……

暑くて、くらっ……てなって……。

まあ…いつか。
帰んなきゃ。

私は布団から起き上がった。

ん？

なんかさつきから足らへんが重いつたら……
「…あほか…」

ずっと…私が起きるまでいてくれる気だったの？

「…那音…起きて…」

もう練習終わってから1時間たってる。

1時間もいてくれたんだ…。

「…ん…？」

那音は眠そうに目をこすりながら顔を上げた。

「ごめんね…こんな時間まで…」

「あつ！！寝ちまつてた！！具合大丈夫か？」

「大丈夫だよ。ありがとう」

ガラッ

「桜羽ー？起きた？」

保健室に入ってきたのは瑠架だった。

「うん、ごめんね。1時間も…」

「大丈夫だよっ 気にしないで！。帰ろう？」

そう言って瑠架はにこっと笑った。

私は帰る方向が瑠架と同じだった。なかよくなってからはいつも一緒に帰っている。

「うん。帰ろうかあ」

瑠架の笑顔につられて私も笑顔になる。

「俺のこと忘れてないー？」

「あゝっ」

二人そろって声がでた。そんな二人を見て那音がふっと笑った。

「とりあえず大丈夫そうで良かった！！じゃあな」そう言くと那音はカバンを持って保健室を出て行った。

「本当にびっくりしたんだからねー！！」

帰り際に瑠架がいう。

「ごめんてばー！！今度から気をつける」

気をつけるって言うてもどう気をつければいいのかわかんないけど…。

「…瑠架も彼氏ほしいなあ…」

急に呟かれた一言。

「えっ…瑠架好きな人いないんでしょ？てか、モテるのに…」

私がこう言くと瑠架はにこっと八重歯をだして笑った。

「桜羽と那音見てたら恋したいって思った〜!!」

「そうなんだー…」

瑠架にそう言ってもらえるのがなんだか、嬉しかった。

「彼氏できたらさ、桜羽と那音と光奈と綾斗とトリプルデートしようね」必死な顔で瑠架は私に訴えてくる。

「ぷ…!! 瑠架可愛いなあ。わかった。約束ね!」

「あ…」

なにかを思い出したかのように瑠架は声を出す。

「どうした?」

私は不思議に思い、問いかけた。

「いや…律…の事なんだけど…」

もじもじしながら瑠架がゴニョゴニョと言う。

きっと私が気にする、と考えたのだろう。

「私は気にしないよ?」そう言って笑って見せた。本当はまだ少し気にはなっていたけど…。瑠架に気を遣わせたくない。

「律と瑠架さ仲いいんだ。小学校から親友で」

「うん、なんとなく前にりっちゃんに聞いた」

“りっちゃん”

久々に名前を口にした。

「…よくメールしたり電話したりしてるんだけどさ、やっぱり…桜羽の事ばかりで…」

瑠架の声が寂しそうに聞こえた。

「わ…私…の事…?」

「うん…桜羽メール返してくんないし、話もできないって…泣いてたこともあったよ。律はさ…桜羽とまた仲良くしたいんだって…」

りっちゃんがそんな事思ってたなんて…。
だけど…やっぱり簡単に過去は消せないよ…。

「…なんで…那音と付き合ってた事言ってくれなかったんだろう…」

私が、ずっとずっと…気にしてたこと。大好きなりっちゃんがなんで嘘ついたのか…。

ポツリと呟いたつもりだったが瑠架にはハッキリ聞こえていたらしく、思わぬ言葉を口にした。

「っええ?! 律から聞いてないの?!」

目を見開いて瑠架が私に問う。

「えっ…瑠架…知ってるの!? 教えてっ…!!」

私は思わず瑠架に向かって大きな声をだした。

「ちょ…桜羽落ち着いてっ? 話すから…」

困ったような声で瑠架が言う。

「じっ、ごめん…」

「うん…あのね、あんま珍しい理由でもないんだけど…」

瑠架が話してくれた話は私にとって大きな心の揺れにつながった。

律ね、那音と付き合っただけで別れて……って何回もやってるんだ。今回はもう4回目だったと思う……律是那音の事別れてからいつも“やっぱり好き”ってなってる。那音も新しい彼女作ってもすぐに別れて律にいつも戻ってきて……。

そんな事いつも繰り返してた。そんな時桜羽が那音を好きになって律がどうしたらいい？って電話してきて、いろいろ話し合った結果、律は

“私は今那音より桜羽が大切なんだ。那音はいつも私の所に戻ってくるけど結局私に甘えてるんだと思う。だから……まだやっぱり好きだけど別れて桜羽を応援したい。これが本当の那音の幸せになるかもしれないから”

って……。その次の日に

“私がつと早く別れとけば”って泣いてた。桜羽がキレた日だと思う。その数日後に律が

“那音にフラれたよ”

って泣きながら電話してきた。

なんで泣いてるの？って聞いたら

“私……桜羽に両思いになってほしいの。だからこれで良かったんだと思う。だけどやっぱり……まだ好きだなあ……本当はかだよ”って。

律是那音より桜羽が大事だったんだよ。

だから言えなくて、苦しかったと思う。それでも応援したかったんだと思う。だから律の事責めないでやって……？

律の分まで那音と幸せになっ……。

私は今まで

何をしていたんだろう

なんで

自分のことばっかで

りっちゃんの事

ちゃんと

向き合えなかった？

私なんかより

きっと

ずっと

りっちゃんの方が

痛くて苦しくて

切なかつたんだろう

りっちゃん

ごめんね

こんな私のために

りっちゃんは

自分の気持ちを

犠牲にしたんだ

私のせいで

今まで

那音とりっちゃんが

積み上げてきたものを

壊してしまったんだ

私

が

恋なんてしなきゃ

良かったのに

第十一話・ヤキモチ

今日も応援練習がある。たぶん、夏休み最後の応援練習だ。そして瑠架からあの話を聞いてから1週間がたっていた。あの日から私は那音の目を見ることができなかった。

またりっちゃんのとこに戻ってしまっうんじゃないかって……怖くていつ那音が私から離れていくかわからない。そう思うとなんだかすごく心が締め付けられた。

「桜羽…大丈夫？」

後ろからポン、と肩をたたかれた。

「え…あ、光奈…」

振り返れば心配そうな顔をしている光奈がいた。光奈には瑠架から聞いた日に一番に連絡した。

「…つらいよね。そりゃ……」

泣き出しそうな顔をしている光奈。

「ちょ…?!大丈夫!!私は大丈夫だからッ!!ね?ありがと…光奈」

私が慌ててそういうと光奈はふつと笑顔になった。

「つらくなったらいつでも相談のからね!!」

「うん。ありがと…」

光奈…ありがとう。

「じゃあこのイスを一人5つ体育館に持って行って。運び終わった
ら各自解散。はいっ開始!!」

雑用かよー！！！！！！！！

なんて心で叫びながらもイスに手をかける。

「はぁー…」

めんどくさい。

それしか言いようがない。

「「桜羽くお先にっ」

光奈と瑠架がイスを持って一緒に行ってしまった。

ひどっ！！！！

おいてけぼりかよっ！（泣

私チビだし、力ないし…どうやっても不利じゃんー！！！！

ぶつぶつ一人で文句を言いながらとりあえず2個を持ち上げた。

「お…おもっ…」

ゆっくりと歩き出すと

ガッ！！！！

う…わぁ…！！！！

やばい！！つまずいた！！！！
最悪っ　　！！！！

… ツ倒れ　　！！！！

……………　　ない……？

「あれっ……」

「大丈夫？綾野さん」

あまりよく聞いたことのない声が私の頭の上から聞こえた。

「…か、片山……」

顔を上げると応援団で一緒に片山がいた。

「…ん……………」

片山は手を私の方へ差し出した。

「？」

私はどうすればいいかわからず首を傾げた。

「…イス、貸して」

「…えっ?! い、いいよっ!! 大丈夫だからっ」
思い切り首を横に振った。

だつて悪いし……。

だけど片山は

「たぶんまた綾野さんこけるよ?」

そう言つてにこつと笑った。

ドキッ……

「えっ……でも片山大変になるし……」

不覚にも片山が笑ったところを見たことがなかったからどきっとした。

「大丈夫。てか健太でいいよ。片山ってなんか重たいし」

「えっ……あ、うん……じゃあ私のことも好きに呼んでいいよっ……？」

私がそういうとうーん、と考えて、

「じゃあ……桜羽……」

「うんっ……全然OK!!」

那音以外の男子から下の名前で呼ばれるのは健太が初めてだった。

「よしっ……じゃあ桜羽。イス貸して」

「だから……大丈夫だから……」

ヒョイツ

「つべこべ言わない。さあ行くぞ」

健太は私の持っていたイスを2つ重ねて持った。

「あ……!!」

すごいっ……!!イス合わせて5つも持つてる……!!

「2回に分ければすぐだから!!一個持つてきな？」

「は……はいっ……!!」

逆らうことなく健太の言うとおりイスを一個持つてくる。

そして体育館へ二人で向かった。

「な、なんかごめんね…私が転んでなきゃ片山もつと早く帰れたのに…」

「あ。片山だって」

そういじわるそうに私に笑顔を向けた。

「……け、健太……」

あまり男子の事下の名前で呼ばないから変に緊張する。

「よくできました」

なんてふざけたように私に言った。

健太の印象が今日1日でガラツと変わった。

最初は無愛想でシャイな子かと思ってたけど、全然違った。

優しくて頼りになって少しいじわるな、お兄ちゃんっぽい男の子。

友達が一人増えた。

しかも仲良くできそう。

「はああ〜……終わったあ……」

「お疲れ様」

やっとのことイス運びが終わった。

「うん、ていうか健太の方が疲れたでしょ……」

「あははっ…俺は全然平気。部活で鍛えられてるし」

「……何部だっけ？」

「野球っ！！ポジションは、ピッチャーなんだ」

今まで見せたこともないような楽しそうな顔で言った。

「野球、好きなんだね」

「うん。すげえ好き」

子供のような笑顔に思わず心臓が飛び跳ねた。

「さーわあー！ー！ー！ー！」

「！？」

いきなり聞こえた大きな声に私と健太はびっくりして振り向く。

「あつ…那音お…」

私は自分じゃ気づかない内に顔がほころんでいたのだった。
そんな私を見て健太が呟く。

「なるほど…ねえ…」

「ん？なんか言った？」

「ううん？じゃあな」

そう健太は別れを告げると走って帰って行った。

…？

なんだろう？

「はあつ…探したんだぞっ…！何やってんだよっ…！…！…！」
疲れたような声で息を切らしながら那音は言う。

「ご、ごめん…なさい」

探してくれてたんだ…。

「まったく…しかも健太というし…」

そっぽを向いて眉をひそめる。

やばっ…

本気で怒ってるかも…！！

「！めっ…」

グイツ…

「ばかやろー…」

そう言っつて私を抱きしめた。

「っ…な、なお」

学校の誰もいない体育館で那音の声だけが聞こえる。

「…この頃…目合わせてくんないし…今日だって、健太といるし…
嫌いになったんならそういえよ…」

ズキンッ…

心が痛んだ。

私、那音の事考えてなかった。

自分の中でごちゃごちゃしてて拳げ句の果てに“恋なんてしなきゃ
良かった”なんて…

那音の事考えもしてなかった。

私は那音を強く抱きしめ返した。

「ごめんね…ごめん。那音…好きだよ…」

泣きそうになる。

ああ……やっぱり手放す事なんてできないよ。
私には……
きつともう那音しか好きになれないんだ。

那音

……大好きです……

「ねえ、夏祭り一緒にかねえ？綾斗と光奈も一緒だけど……」
突然の那音からの誘い。

「うん、いーよ？」

夏祭り……かあ。

そつえばあるって誰かが言ってたなあ……。

「あと、もう健太と2人にならんことっ」

「???なんで？」

なんで？

別にただの友達なんだけどなあ……

「俺の幼なじみっ！！妬いちまうから2人になるなよっ」

やっ……

ヤキモチ?!

「ぷっ」

「ッ！！笑うなっ！！！！／＼／＼」

那音が顔を真っ赤にしている。笑わずにはいられない。
可愛すぎ！！

「私は那音一筋だし」

「おっ！！かっこいい事言ってくれるね」

ニヤリと笑う那音。

なんか気味悪い（笑

「よしっ！！じゃあ俺こっちだから……」

「あっ……うん、バイバイッ！！」

笑顔で手を振りながら那音は帰って行った。

りっちゃん……

やっぱり

私は

那音が好きだよ。

ごめんね

ごめんね

私には那音しかいないって確信しちゃったんだ。

たぶん私は

これ以上に人を

好きにはなれない。

第十二話・決意

どきん

どきん

待ち合わせ時間より10分も早く来たのに…

なんで那音もついるのー！ー！？！？

早くない！？

男子つてもっと時間にルーズかと思ってた。

「何してんの桜羽…早く進もうよ！！那音と綾斗いるじゃん」

光奈が呆れたような声で言う。

だつて…

「へ、変じゃない？浴衣…」

最終子エックを光奈に求めた。

「だあいじよぶ 可愛いよ！ー！ー」

そう笑って言ってくれた。

光奈は青中心の浴衣。

私はピンク中心の浴衣。

「よしっ！！行くか」

「うん」

光奈は私の手をとって那音たちの方へ歩き始めた。

「お待たせー」

光奈が元気良く那音と綾斗に手を振った。

そしてグイグイと私の手を引っ張る。

痛い…痛いよ。光奈さん（汗

「しーっ！！」と、麻樹が口に人差し指を当ててこっちに駆けつけた。

「「？？」」

那音に目を向けると電話をしているようだった。

「光奈似合っじゃん 可愛い」

麻樹が光奈に声をかける。

「あ、りがと…」

光奈は真っ赤になっている。

なんだか光奈はもう付き合っ結構長いのに初々しくてすごく可愛い。

「那音のやつ今なんか電話してるから…ちょい待ち？」

「あ、うん…」

…誰と電話してんだろ。

少し気になったけど、そこまで気にすることもないかな…？

モヤモヤする。

「ごめん桜羽！！…あ…か、わいい…」

「えッ…！！！」

なっ…那音、真っ赤です！！ちょお可愛いッス…！！

「「あついね」」

2人が横目で私たちをみた。

「「……ぶっ」」

私と那音は目を合わせて笑った。

「よし、行くか」

麻樹は光奈の手を握った。

う…

こ、これは私たちも繫ぐべきなのでしょう…？

私が戸惑っていると

「ん」

と那音が私の手の横に手を差し出した。

わっ…わー!!

どうしよう…!!

手…

…。

ぎゅ…

軽く那音の手を握った。すると強く握り返してきた。

どきん、どきん

と心臓がリズム良く鳴る。

…… 那音の手、大きい。

… あたたかい。

やっぱり好きな人の手ってすごい落ち着く。

ずっと握ってたい。

「桜羽、私かき氷食べたいなあ」

光奈が麻樹じゃなくて私に甘えてくる。

「なーに綾野に甘えてんだよー。俺が買ってやるってのー!!」

「え…。まじ?!わーい」

光奈は上機嫌(笑)

2人は出店の方へ行ってしまった。

「…桜羽はー?何食べる?奢ってやるよ?」

那音が問いかけてきた。

「え…あ、えーと…」

私は人に奢ってもらうのが苦手だ…。
どうしよう。

断るのは悪いかな…?

私がおどおどしていると

「んー…そこ座ってなー!!」

そう言って走って行ってしまった。

ええー!?!?!

お、おいてけぼりっ…。

光奈たちのところに行ったのかな…?

…てか、もう7時30分か…。

20分後

…なんで?!

どこいった?!早く帰ってきてよお…!!

光奈…那音…。

…探しに行こうかな…。

でも入れ違ったら嫌だし…。

「
桜羽っ…!!」

あっ…

やっと来たっ…!!

「那音お…」

寂しかった。

少しの間側にいないだけですごくすごく不安だった。

「ッて…え！？泣い…どうした？！なんかあった？！」
慌てふためいている那音。

「ちが…どっか…いつちやったかと…」

泣いているって自覚はなかった。

ただ熱いものが頬を伝っているという感覚。

「…ごめん。何が好きかわかんなくて…」

那音の手にはいろいろなものがあった。

「…ぷッ。なんで金魚？？あッ。ヨーヨーもあるー！！」

「え…ああ、友達見かけてもらってきた…。本当ごめんな。何食べる？」

いろんなものを差し出された。

かき氷、わたあめ、たこ焼き、リンゴあめ。

「こんなに買ってきてくれたの？…高かったでしょ…」

「ん？よゆーよゆー もらったりしてきたから、俺が出したの1000円くらいだよ」

そう言って、私の隣へ座った。

「そういえば、光奈たちは？」

見渡してみてもいない。

「ん？ああ、足痛いって、公園いるよ。あとで合流するから、食べ終わったら行こっか」

「…うん」

優しい…

優しいすぎるよ…

那音の優しさが私の心にヒッとする。

「…私、わたあめ食べたい…」

ぼつりと呟いてみた。

でも那音にははっきりと聞こえてたみたいで

「ん」

と、わたあめを渡してくれた。

「ありがとう…」

聞こえてたんだ…。

「…桜羽…？」

「ん…何？」

私はわたあめを開けながらちろつと那音の方を見た。

……。

ふっ、と唇が重なった。

「…っ…えっ…!？」

私はいきなりの出来事に気が動転してしまった。

那音は私の目を見て

「…これがちゃんとしたファーストキスな」

って、はにかんだ。

前のデートのキスはキスっぽくなかったからかな？

あれはあれでびっくりしたけど……（汗

「…うん」

ちまちまと、わたあめを食べながら那音に笑顔に向けた。

「…俺さあ…お前の笑顔好きだあ」

「んぐつ…な、何突然…」

食べていたわたあめを吹き出しそうになった。

い、いきなり何なのさっきからあ……

「だからさ…ずっと、笑っててな？」

ずっと笑ってて

「…ん。大好き…」

大好き…

胸が締まるようなこの感情も

胸が高鳴るこの感情も

きつと

那音にだけなんだろうな…。

「うん…俺も好き」

小さな小さな声で

那音は呟いた…。

公園着

「あつ桜羽あー…ごめんね」

光奈と麻樹がの野原の上に座っていた。

「んー…大丈夫大丈夫。足直ったー？」

光奈に那音と手を繋いだまま駆け寄る。

「うん。だいぶ楽になったよー」

と、笑顔の光奈。

良かった…。

大丈夫そうだ。

「さあ〜花火見るから、場所変えようぜ。いい穴場あるから」

麻樹がそう言って歩き出した。

この公園から5分くらい歩いた時からかな…？

那音がそわそわしていた。

……？

なんとも言えない寂しそうな顔をしている。

ずっと那音の顔を見ているといきなり表情が一変した。

何かとても大事なものを見つけたような、

見開いた目……。

その瞬間

バツ！！

那音の手が離れた。

「じゅめんっ…!!すぐ戻るからっ」

「えっ…:ちよ」

「はっ?!那音!?!」

私たちはパニック状態。

那音は何をしに

そんなに急いでいるの?

何……………??

なんとも言えない不安で心が押しつぶされそうになった。

やだ…

離れて行った。ちやうど気がして。

ダッ…

「…ちよ！？桜羽っ！！」

気付けば私は走り出していた。

浴衣を着ている事なんて忘れて。

那音。

「…っ…ど…っ…っ？」

見当たらない。
いないよ。

次第に視界がぼやける。

「…ッ…ズンお…」

それでも涙を拭って走りつづける。

しばらくきよろきよろしているど

見慣れた、後ろ姿。

「…あ…なお…!」

…

心の中での小さな不安は間違いなにかじゃなかった。

本当は心の端っで少し気づいていたのかも知れない。

「……………ばか……………」

見慣れた背中に

見慣れたきれいな女の子

那音と……………りっちゃん……………

よく見えないけど

りっちゃんは

泣いているようだった。

その

泣いているりっちゃんの頭を撫でている、那音。

私の大好きな温かい手…

何でかわからないけど

触らないで、

なんて

思わなかった。

むしろ

なぜか

抱きしめてあげて

なんて

意味のわからないことを思った。

“彼女”は“私”

“元カノ”は“友達”

こんな恋になるなんて思いもしなかった。

那音は私の手を振り払ってりっちゃんのところに行ってあげてた。

……那音。

それって

那音は……まだ……

私はすぐに光奈の所へ戻った。

「さ、桜羽…？」

下を向きながら歩いてくる私に光奈もいい気はしないだろう。

「…花火…始まるよ!!！」

私は笑って、光奈に言う。

「あ…うん、穴場ここからあと5分くらいかな」

そついうと光奈と麻樹と私は穴場に向かって歩いていった。

2人は何かを察したのか那音のことはなにも聞いてこなかった。

ドドンッ…!!

「わぁっ!?!?!」

気付けばもう花火は始まっていた。

色とりどりの花火が真っ暗な空にうつる。

…きれー

だけど

隣には那音がいない。

今頃りっちゃんといえるのかな…。

私…フられるんだらうな…。

楽しかったなあ…

「桜羽ー光奈！！綾斗っ…ごめんっ…知り合い見かけて、つい…」

“知り合い”

そんな事言いながらも目が泳いでいる。

……わかりやすいヤツ。

本当にバカだよ…。

「花火、始まつちやっただよー！！バカ」

笑って対応する、私。

「あは…ごめん」

いつもの笑顔で笑いかけてくる那音。

複雑な、心境。

せめて

すべての花火が空から消えるまで…

……那音の、隣に……。

花火に照らされた

那音の横顔はとても切なかった。

きつと

りっちゃんへの気持ちを押しさえつけているのだろっ。

那音は

優しいから

……優しすぎるから

私に……いえないのかも知れない。

言えないなら

……私から……。

“おひなひ”

一回

りっちゃんのことを聞いたときに

一回私の心は那音とさよならした。

だから

二回目だね。

那音に……さよなら。

『これで第64回…花火大会を終了致します。尚、お帰りの際は混雑が……』

アナウンスが聞こえた。

「早く帰ろつかあ。すごい混むし……。桜羽、那音また学校でねー」

そう言いながら光奈と麻樹は歩いていった。

残された、2人。

何もしゃべらない那音。

「じゃ…帰るかつ」

にこつと私に笑った。

「…うん」

その笑顔に私も笑い返す。

ゆっくりと私の歩幅に合わせてくれている那音。

ぎゅっ

強く手を握られた。

なんで…？

那音…

自分の気持ちに気づいてないの…？

那音、

那音は

……

ぎゅっ…と涙がでそうになるのを抑えた。

言わなきゃ

“別れよう”って。

それが

那音にとっての

正しい

答え……

「那音…」

小さな声で名前を呼んだ。

「ん…？どうした」

振り向いた那音の笑顔は
私でもわかるほどの
……作り笑い。

ズキン…

今更…胸が痛む。

それでも

私はのどで詰まっていた一言を…声にした。

「別れない…？」

「は……？」

突然の私の言葉に真顔の那音。

「なんで？」

繋いでいた手に力がいれられた。

「な、なんで…も…」

なんでもなくなんてない。

「理由は？言え」

那音のため。

「っ…言えよ!」

初めて私に向かって怒鳴った。

ごめんね…

…那音が私から離れられるよつた…。

今からいっぱい嘘つくよ。

「嫌いになった」

好き。

「はっ…？こんな短期間でか？他に理由…」

「…女好きでバカで人の気持ちもなんも考えない。だから…嫌い」

私の気持ちいつも考えてくれた。

「……んで今更…」

那音は自分の前髪をぐしゃっと掴んだ。
歯を食いしばっていた。

「今まで…こんな私に付き合ってくれてありがとう。でももう………」

一瞬でも気を抜けば“好き”って言ってしまいそうだ。

「好きだ」

ドキン…

「私は、嫌い…」

“嫌い” って言葉を発するたびに涙がでそうになる。

“好き” で溢れてるのに

「じゃあ目合わせろよー!!」

「……………あ……………」

あまりの那音の真剣さと気迫に声がでなかった。

なんで…………?

別れてよ。

…沈黙が続いく。

「…………嫌いだから目も見たくない…………ってか」

ぼそつと那音が呟いた。

「……………」

なにもいえないよ。

「わかったよ。…そこまで嫌われてたなんて…思わなかった。今まで付き合わせてごめんな…」

見たことのない

那音の表情。

だめだよ。

那音にはりっちゃんがいるんだよ。

「……………」

ダメだ。

涙がでる。

ダッ…

那音の手を振りほどいて家に向かって走った。

「ッ好きだよ…!!」

小さな小さな消えそうな声で走りながら呟いた。

ばいばい、那音。

……………大好きだよ。

第十二話・side那音・想いの揺れ

早くつきすぎたか？

まだ20分前。

もちろん桜羽はまだ来ていない。

「んでさー！！」

綾斗がずっと一人できゃっきゃと騒いでいる。

く
く
く

「？」

俺の携帯だ。

ディスプレイには

“健太”

何の用だ？

不信任を抱きながらも電話に出ることにした。

「綾斗…ちょっとわりい」

「ん？ああ、いいよ」

ッピ。

「もしもし？」

『もしもしー』

いつもと変わらない健太の声。

「何？どうかしたか？」

俺も普通に問いかけた。

『んー…今彼女いる？』

は…？

なんだ？コイツ？

「い…るけど…」

『…神崎律？』

ドキン…

名前を聞いただけで…
なんだ…？今の。

「…………さあな」

俺は曖昧な返事をした。

俺はあまり人に恋愛関係のことは話したくないタイプだ。

『あのさ…那音、俺に好きな奴ができたと言えって言ってたよな？』

「ん…？ああ、うん」

言っただけ？（汗

物忘れ激しいな、俺。

『…一目惚れした』

「まじでっ？！」

健太とは幼なじみで長い間付き合ってるけど、健太に好きな人が出来たのは初めてだと思っ。

誰だ？

つてこの時期に
…一目惚れ？

…もしかして…

『綾野桜羽、何だけどさ…』

予感的中。

「……そ…か…。いいんじゃないの？」

なんて、笑ってみた。

「お待たせー」

……あ。

光奈と桜羽が来た。

『那音…アド知ってる？仲いいよな…』

「……しらねー」

嘘ついた。

だって“彼女”だぞ？

教えるわけねえじゃん。

つか

こんなことになるなら先に付き合ってること言えばよかった。

いつも

いつも後悔はあとから押し寄せてくるんだ…。

いつも。

『知らないか…じゃあ、な。なんかごめんな。とりあえず報告…！
じゃ』

ブチッ

ツー…ツー…

一方的に電話を切られた。

「…んなんだよ…！」

小声で呟いた。

まさか健太が桜羽の事好きになるなんて思いもしなかった。

電話を終えて桜羽たちのもとへ駆け寄った。

お、浴衣……!!

「ごめん桜羽!!……あ……か、わいい……」

思わず本音がこぼれた。

!!

“可愛い”とか……!!

何言ってるんだ俺っ……/ / /

「えッ……!!」

桜羽も驚いている。

あ……。

俺今絶対真っ赤……。

桜羽も真っ赤だけど（笑

「「あついなえー」」

光奈と綾斗が声をそろえて言った。

俺は対応に困って桜羽の方を見た。

すると桜羽も困った顔でこっちを見ていた。

「「……ぷ」「」

2人揃って笑い合った。

「よし、行くか」

そう言っつて綾斗が光奈の手を握った。

桜羽の方をちらっと見ると戸惑っているようだった。

しょうがねえなあ

「ん」

ちよつと無愛想だったか…？

桜羽の横に手を出してみた。

ぎゅ…

ドキン…

小さくて冷たい手が俺のでかい手に軽く触れた。

俺はその冷たい手を強く握り締めた。

「桜羽！私かき氷食べたいなあ」

光奈が桜羽に甘えている…（笑

「なーに綾野に甘えてんだよー。俺が買ってやるってのー!!」

おっ

綾斗カックイー!!!!

「え…。まじ?!わーい」

光奈は上機嫌で綾斗と出店へ向かっていった。

「ここは俺も何かしてやらんとなー」。

「…桜羽はー?何食べる?奢ってやるよ?」

俺は問いかけてみた。

「え…あ、えーと…」

桜羽は戸惑っているようだった。

コイツ、人に奢ってもらうのが苦手なタイプだなー…。

適当に買ってくるかな。

「んー…そこ座つてなー!」

そう言い残して出店へ走っていった。

何がいいかな…？

かき氷？たこ焼き？

でも桜羽はわたあめ好きそうだなあ…。

迷ったあげくいろいろ買うことにした。

とりあえずかき氷……。

「おいっ！！なおとー」

「お…」

呼ばれた方を振り返ると同じクラスの友達が5人いた。

「1人？」

「ちげえよ。彼女」

をらっと言ってみたりする。

「お まじっじゃあコレあげるよー」

ドサドサッ！！

「？！」

手の上にわたあめとヨーヨーと金魚とリンゴあめを渡された。

あ、ありがたいけど

金魚は…いらんな(笑

「いいのー?!マジもらっよっ」

「おうよ 俺らもう食べないからさー!金魚は飼ってやって!」

な…

自分勝手な…!!

まあいろいろもらったし……
いつか。

「さんきゅー!!じゃあな」

友達に別れを告げ、かき氷とたこ焼きを買いに行った。

あ。
光奈たちだ。

「おい！何やってんだよ。かき氷買いに行っただまま帰ってこないし」

「あ…那音…ごめん、光奈が靴ずれで足痛いらしいからあっちの公園いるわ。あとで合流しよ？」

光奈の足に目をやると見事に痛そうだった。

「了解。じゃああとで」

携帯に目をやると、もう20分たっていた。

やばい

どっか行ってるかも…!!

不安を抱えながらも走って元の場所へ急いだ。

あ…!!

良かった。いた…。

「桜羽…!!」

「那音おー…」

桜羽の目には涙がたまっていて俺の顔を見た瞬間涙が頬を伝った。

「ッて…え！？泣い…どうした?!なんかあった?!」

俺は当たり前前に慌てる。

「ちが…どっか…いつちやったかと…」

桜羽は涙を拭うことなく流し続ける。

「…ごめん。何が好きかわかんなくて…」

そう言っ下を向いた。

女に泣かれるのは正直弱い。どうしたらいいのかわかんなくなる…。

「…ぷッ。なんで金魚?あッ。ヨーヨーもあるー!!」

桜羽は泣いている顔から一変して笑顔になった。

…良かった

「え…ああ、友達見かけてもらってきた…。本当ごめんな。何食べ
る?」

全部桜羽に差し出した。

「こんなに買ってきてくれたの?…高かったでしょ…」

あ。

やっぱり奢られること嫌いなんだな。
わかりやすい…

「ん？よーよーよー もらったりしてきたから、俺が出したの1000円くらいだよ」

不安にさせないように笑っていった。

そして桜羽の横に座る。

「そういえば、光奈たちは？」

「ん？ああ、足痛いって、公園いるよ。あとで合流するから、食べ終わったら行こっか」

「…うん」

桜羽はまだあんま歩いてないから足は痛くないはず。

食べ終わったら

ゆっくり行けばいい。

「…私、わたあめ食べたい…」

ぽつりと聞こえないような小さな声で桜羽は言う。

そついつ遠慮がちなところがまた可愛い。

「ん」

とわたあめを渡した。

「ありがとう…」

そつ言つて桜羽はわたあめを受け取った。

やばい…

可愛すぎ

…

「…桜羽…？」

「ん…何？」

桜羽はわたあめを開けながらちろっと俺の方を見た。

……。

ふっ、と唇を重ねた。

「…っ…えっ…!？」

桜羽は相変わらず可愛い反応

俺は桜羽の目を見て

「…これがちゃんとしたファーストキスな」

って、言ってみた。

前のデートのキスはキスっぽくなかったから（汗

「…うん」

ちまちまと、わたあめを食べる桜羽が俺に笑顔を向けた。

きゅん…

なんて胸が締めつけられた。

「…俺さあ…お前の笑顔好きだあ」

「んぐっ…な、何突然…」

食べていたわたあめを吹き出しそうになっている桜羽。

だって急に思ったんだ。

「だからさ…ずっと、笑っててな？」

ずっと笑ってて

ずっと

もし俺と離れたとしても。

「…ん。大好き…」

予想外だった、桜羽からの言葉に俺は心底驚いた。

だけど

すごい嬉しかった。

「うん…俺も好き」

なんか照れくさくて小さな小さな声で
俺は呟いた…。

公園着

「あつ桜羽あー…ごめんね」

光奈と綾斗がの野原の上に座っていた。

俺に謝罪の言葉はないのか。

「んー…大丈夫大丈夫。足直ったー？」

桜羽は光奈に俺と手を繋いだまま駆け寄る。

グイグイと引つ張られた。

「うん。だいぶ楽になったよ」
と、笑顔の光奈。

“良かった…。”

って顔をしている桜羽。

桜羽はいつも優しすぎる。

人のことを大事に思っている、思いやりがある
いい子だ。

なんて。

言ってみたりとかする。

「さあ〜花火見るから、場所変えようぜ。いい穴場あるから」

綾斗がそう言って歩き出した。

そのときだった。

俺の目に止まった人。

律…。

って…!!

何気にしてんだ俺!!
別に好きじゃないのに…

ただ
元カノだから少し気になるだけだ。

そうだろう？

しばらくしてもう一度なんとなく目を向けると知らない奴に囲まれていた。

オイオイ。

まだ中2だぞ？

なんて思ってる暇もなかった。

バツ!!

俺は桜羽の手を離れた。

「ごめんっ…!!すぐ戻るからっ」

そう言って全力で律の方へ向かった。

「えっ…ちよ」

「はっ?! 那音!？」

よくわからない。

体が勝手に動いてた。

「はあっ…律!！」

「えっ…な…那音!？」

俺がいくと囲んでた奴らは舌打ちをしてどこかへ行った。

「だいじょ…」

俺が問いかける前に律は鼻を真っ赤にして泣いていた。

「っ…あ…ありが…」

怖かったのか…?

律の泣き顔を俺は何回見てきたんだろう。

自分勝手な俺が何度律を傷つけただろう。

「…「じめん」…」

そう言って頭を撫でた。

変わらない、キレイな長い髪。

ドキン…

まただ。

なんでだ？

なんでいつも律を見ると心臓が狂うんだ？

俺が好きなのは

桜羽だろ？

「なんで那音が謝るの…私だよ、迷惑かけてごめんね…」

鼻をすすりながら俺に謝る、律。

あ…そろそろ

花火始まっちまう……

「も、大丈夫…友達すぐそこにいるらしいから」

そう言って律は俺の方を見た。

「あ、うん…じゃ…行くな。ばいばい」

そう言って歩き出したとき

「那音っ！！わた…」

俺が振り返った瞬間だった。

ド
ド
ン
ッ
…！！

花火と律の声が被った。

「なに？」

「や…なんでもない。ばいばい」

そっぴい残して律は走っていった。

ドクン…ドクン……

なんだか心臓が落ち着かない。

歩いていると桜羽たちが見えた。

綾斗が事前に穴場を教えてくれたから助かった。

「桜羽ー光奈！！綾斗っ…ごめんっ…知り合い見かけて、つい…」

適当に嘘をついた。

“律といた”

なんて言ったらきつと桜羽は勘違いするだろうから。

「花火、始まつちやったよー！！バカ」

桜羽のいつもと変わらない笑顔にほっとした。

それに対して俺は

「あは…ごめーん」

と、いつものように笑いかける。

花火…かあ。

確か去年は律ときた。

律も桜羽と同じピンクの浴衣だったな…。

……って…。

なんなんだよ…俺…

さっきから“律”を気にして……。

結構時間がたってきたころだった。

『これで第64回…花火大会を終了致します。尚、お帰りの際は混雑が……』

アナウンスが聞こえた。

「早く帰ろつかあ。すごい混むし……。桜羽、那音また学校でねー」

そう言いながら光奈と綾斗は歩いていった。

残された、俺と桜羽。

何もしゃべらない桜羽。

なに……

さっきからそわそわしてんだ？

「じゃ……帰るかつ」

にこつと俺は笑った。

「……うん」

やはりあまり元気がない……。

ゆっくと桜羽の歩幅に合わせて歩く。

にしても、男の俺にとっては遅すぎる。

ぎゅっ

と、手を握った。

小さな、女の子の手。

しばらくして

「那音…」

小さな声で名前を呼ばれた。

「ん…? どうした」

いきなりだったから作り笑いをしてしまった。

「別れない……？」

「は………？」

突然の桜羽の言葉に真顔の俺。

いきなり………なに？

動揺を隠すように冷静に問いかける。

「なんで？」

繋いでいた手に力をいれた。

「な、なんで……も……」

目を合わせようとしない桜羽。

それでも俺はしつこく問いかける。

「理由は？ 言え」

理由がないわけない。

それなのに口を開かない桜羽。

「っ…言えよ！！」

感情がおかしくなりそうだ。

「嫌いになった」

桜羽からの考えもしなかった言葉に言葉を失う。

情けない。

「はっ…？こんな短期間でか？他に理由…」

声が少し震える。

そんな俺をよそに

桜羽は続ける。

「…女好きでバカで人の気持ちもなんも考えない。だから…嫌い」

“嫌い”

言葉が心に刺さる。

「……………んで今更…」

俺は自分の前髪をぐしゃっと掴んだ。
ただただ悔しくて歯を食いしばった。

「今まで…こんな私に付き合ってくれてありがとう。でももう…」

桜羽はもう俺が嫌い。

だけど俺は

「好きだ」

「私は、嫌い…」

……！！

嘘じゃないんなら…

「じゃあ目合わせるよ…!!」

「……………あ…」

桜羽は完璧におびえている。

それでも

桜羽は目を合わさなかった。

「……嫌いだから目も見たくない……ってか」

ぼそつと俺は呟いた。

「……………」

なにもいわない。

てことは本当に嫌われたかな。

気づかなかった。

「わかったよ。…そこまで嫌われてたなんて…思わなかった。今まで付き合わせてごめんな…」

たぶん俺はこのとき

今まで生きてきた中で一番情けない顔をしていただろう。

「……っ」

ダッ…

俺の手を振りほどいて桜羽は走りだした。

「っ……くそっ…!!!!」

桜羽…

ごめんな。

俺

桜羽の気持ちに

気づけなかった

気づこうとしなかった

今になって

後悔の波が押し寄せる

第十三話・席替え

那音に別れを告げてから夏休みが明け、
もう2週間が経とうとしていた。

そして

今日は二学期初日。

重たい足取りで学校に向かった。

那音と会いたくない

口ではそう言えた。

だけど

心の端っこでは

顔が見たい…

なんて…、矛盾してる。

何…???

この気持ち。

こんな気持ち知らない。

こんな気持ち知らない。

「桜羽…??」

下駄箱に靴をしまっているとき、後ろから光奈の心配そうな声が聞こえた。

「光奈…おはよ??」

あんまり心配かけたくない。

そう思って笑って見せた。

光奈には私からフツた事を最近伝えた。

「…無理だけはしないでね…??」

そう、呟いて光奈は階段を登っていった。

無理…か。

作り笑い、やっぱりばれちゃったかあ…。

光奈の優しさと自分の小ささに涙が目にとまる。

「っ…泣くな…私…」

そう自分に言い聞かせる。

そうじゃなきゃやってらんないよ…。

キーンコーンカーンコーン……

「えー今日のホームルームは席替えです。くじ引き作ってきたから並んで引いて」

突然の先生の言葉に

「やったー!!」と言う声と

「えー」と言う声が半々に聞こえる。

私は

「えー」グループ。

… 那音とりっちゃんとは絶対なりたくない…。

というか

コレ以上私は2人には関われないよ…。

「やだあー!!桜羽と離れたくないいー!!!!」

と、だだをこねている光奈。

「くじ引きだし、可能性あるじゃん ねっ??」

「…さわああー!!!!」

光奈は泣きそうな可愛い顔で私の制服を掴む。

な、なんか私が転校するみたいになってるのは
気のせいでしょうか…（汗）

ていうか。

私こう見えてもけっこうくじ運はいい方だと思う。

「綾野さん??早く」

「へっ?!あ、はい!」

いろいろ考えてたら私の番になっていた。

私はごくりと唾をのんでゆっくりと箱に手を入れた。

ガサッ…

よじっ…「ミ」…

「……14番」

黒板を見てみると私は窓側だった。

隣は25番。

……………誰…??

「25の人ー!!!」

と、声を出してみた。

すると一人駆け寄ってきた。

ドキン…

ニコッと笑う顔が那音とかぶった。

「け…健太、25??」

少しだけ声の上擦った。

「うん 桜羽14!??」

「よろしくねっ」

よかったあ…

那音じゃなかった。

と思ったがやっぱり

心の端っここでは少し残念な気持ちの私がいた。

「桜羽ー…離れたあ」

と後ろから光奈がだれてきた。

「えー…私の班だれ…」

黒板に目を向けると

私の心臓は一瞬止まりかけた。

女子はりっちゃんだった。

こんな偶然ある？

「……う、そ……」

どっからどうも考えても

神様のイタズラ……。

いや

天罰かな……

“友達の好きな人を好きになった罰”

ばかだ。

本当に私はばかだ。

今更後悔したってどうにもならないのに。

「じゃあ、席動かして」

先生の声にはっとした。

どうしよう…。

ガタ、ガタ…

私は仕方なく机を動かした。

幸いにも

那音とは同じ班じゃなかったけど…。

りっちゃんを嫌いな訳じゃない。

だって…

ちゃんと真実を知れたから。

私のこと裏切ったわけじゃないってわかったから。

だけど反対に、

りっちゃんはどう？

私はりっちゃんを捨てて那音を選んだ。

友情より恋愛を選んだ。

こんな私を嫌いにならないわけがない。

憎まないわけがない…。

だから

怖いんだ……。

「桜羽？」

「へっ?!」

健太に呼ばれて、はっとする。

「いや…ボーっとしてたよ?」

少し目を細めて笑う、健太。

「だ…大丈夫!」

そういつて私は机に突っ伏した。

ドクン、ドクン

まただ。

那音とどうしても
笑顔がかぶる。

ヤメテ

笑わないですよ……

なんで……

二度と叶わない恋におちてしまったんだろう。

第十四話・じめんね

「桜羽ー…」

情けないような小さな声で健太が私を呼んだ。

「…んー？」

私も授業中のため小さな声で返事した。

「…神崎とケンカしてんの？前仲良かったよな？」

「…ッ…え…」

いきなりの健太からの質問に動揺を隠せなかった。

後ろにはりっちゃんがいるから…

冷や汗が出てくると動じに鼓動が早くなっていく。

「や…なんか心配で」

健太が私をじっと見つめた。

ドキン…

また、だ。

この頃よく健太にドキドキするときがある。

それは

健太だから？

それとも

あの人と被るから……？

答えはわかってる。

だけど

その答えは消さなきゃいけない。

わかってるの

「だ…大丈夫！…ありがとう…心配してくれて」

変な意識しちゃって健太の目が見れなかった。

「…そか？なら…いいんだけど…」

「うんうん」

キーンコーンカーンコーン……

「桜羽、じゃあな」

「あ、バイバイっ」

健太に別れを告げて瑠架のところに行くこととしたときだった。

「さ……桜羽ッ……」

高くてきれいな声が私の名前を呼んだ。

「……りっちゃん……」

「ちょっと……いいかな?」

下を向いて遠慮がちに呟いた。

こんなりっちゃんを見て“いや”なんて言えるわけがない。

「…っん」

誰もいなくなった教室。

残されたのは
私とりっちゃんだけ。

私はずっと心臓がバクバクで壊れそうだった。

何を言われるんだろう

それで頭がいつぱいだった。

「桜羽っ…ごめんなさいっ…!!」

え…?

「な、んで…?」

りっちゃんは頭を深く下げていた。
そのまま頭を上げない。

なんで

りっちゃんが謝るの?

「…ずっと…言えなかったの…付き合ってた事…」

そう言いながらりっちゃんはゆっくりと顔を上げた。

目には涙が溜まっていた。

「うん…聞いた…瑠架から」

私は小さな声で返事をした。

「あ…そか…。最低だよね…。でも私…本当に桜羽が大事でっ…だ
けどっ……那音も…大事だったこと忘れてたの…」

「…うん」

「だからっ…桜羽が付き合い始めたとき、嬉しさと悲しさがあった
の…。っ……ごめんなさい…応援するって言ったに…」

そう言いながらりっちゃんは涙を流した。

痛いほどに伝わってくる、りっちゃんのお気持ち。

私はゆっくりと口を開いた。

「…ごめんなさいは…私だよ…」

「…え…?」

りっちゃんは私を驚いたような目を見た。

「りっちゃん…ごめん…!!りっちゃんのお気持ち考えないで、ひどいこと…言っして…」

私は深く頭を下げた。

「…わ…わ…」

りっちゃんは私に“顔を上げて”
って優しい声で言った。

あげられないよ。

りっちゃんの事
どれだけ傷つけたんだろう。

たしかに

私だってすごいすごい傷ついた。

けど

りっちゃんの気持ちを考えると私の傷なんてちっぽけなもんだ。

私にひどいこと言われて

那音と別れて

私と那音が付き合っ

そんなことを噂とかで聞いて……………。

きっと

私なんかより
何十倍も

傷ついたらろう。

しかも

私はまだ那音が好きで。

顔……あげられない。

「桜羽……私、まだ那音が好きだったよ……
ごめんね……応援……したか……ったのっ……に……」

嗚咽まじりにりっちゃんが言った。

ズキン……

やっぱり……好きだよね。

忘れられないよね。

「……あのね……、那音まだ……りっちゃんが好きだよ……？」

顔を伏せたまま私は呟いた。

「…………え……？」

驚くよね。

それと同時に私の瞳からは大粒の涙が流れ落ちた。

やだ。

やだよ……。

那音のこと

大好きなの。

りっちゃんのとこるに行ってほしくない……。

だけど

りっちゃんは私の幸せを願ってくれた。

りっちゃんは私のことを一番に考えてくれた。

私だって

そのくらいはできるよ。

「りっちゃん…大好きだよ……。次はっ…幸せになってね…!!」

大好きだから

大好きだから

……幸せになって。

2人で……。

「……さあ……、しめんねっ……しめん……!!」

……ありがとう……」

ねえ

神様……

私はこんなに
大事に思える人ができました。

私の運命を考えてくれてありがとうございます。

つらいことも

悲しいことも

乗り越えられるから
この世に存在するんだ。

そして

それを乗り越えられた時

人は

本当の強さを

知るんだろっね。

第十五話・それぞれの想い

『これから、二年生の競技が行われます。二年生は……』

夏休みが開けてだいぶ経った頃、体育祭が行われた。

天気もよくて体育祭日和って感じ。

あのあとのりっちゃんとの関係はというと…

「桜羽ー！ー！一緒にっっ」

「うん！ー！」

前みたいに仲良しに戻ることができた。

りっちゃんは何も言わないけど

きっともう那音と、よりを戻したと思う。

これでいい。

全部…

全部リセットするんだ。

転校してきた頃に。

「あー…次男女別リレーじゃんっ…」

私はクラスの中では速い方らしく、

アンカーになっている。

「よーっ…ドンッ…」

最初は女子のリレー。

私は緊張でそわそわしていた。

どうしようー…。

転んだりしなきゃいいなあー……。

とかなんとか思っている間に

「各クラスのアンカーー！！あと3人だから準備してっ！！」

えええええー?!?!?!

ああー

どうしようっ。。

心臓がああー!!!!!!

そして私の前に走っていた瑠架がバトンを持って勢いよく向かってきた。

よしっ…!!

「あとは任せたー!!行けえー!桜羽ーっ!」

パシッ!!

バトンを受け取って私は勢いよく走り出した。

向かい風が吹いている。

でも

それに対抗してスピードを上げる。

幸い前には誰も走っていない。

これはっ…!!

いけるのでわっ?!?!

ゴールまであと20メートルぐらゐのとこまで

みんなの声が聞こえた。

「さーわー！！行けー！！」

「頑張れー！！」

その声の中に

「桜羽ーっ！！」

大好きな人の声。

思わず振り向きそうになった。

パァンッ！！

『一位は3組です！！』

その言葉をきいて私は

「やったあー!!!」

って言いながらみんなのところに駆け寄った。

ガッ……!!!

や、ば……!!

また転……!!!

「うつ……いたあー……」

勢いよく転んだ。

半泣き状態の私……。

「ちょ……桜羽ー!!!何やってんのぉー!!」

そう言いながら光奈が駆け寄ってきた。

「うえー……いったあー……」

「あーもう。ばかあ!保健室行くよ!捕まってる」

ゆっくりと光奈の肩に手を回して保健室に向かった。

保健室に行く間私はさっきのことばかり考えていた。

“桜羽ーっ！！”

…那音の声だった。

まだ…こんなにも反応してしまう…。

諦めたいのに。

考えたくないのに…。

「いったっ！！ばかっ光奈もっ優しくっ……………」

光奈が消毒液を思い切り私の足の傷に吹きかけた。

「あはっ　O型なもんで」

笑い事じゃないわっ!!!

どうやら保健室の先生は熱中症で重症な子を
病院に送りに行っていて留守らしい。

「あっ!!!やばっ。綾斗の番だ!じゃあねっ!!!先行く。少しソコ
居なっ?」

「はぁーい。いってらっしやい」

そう言っつて光奈は保健室をあとにした。

足がまだズキズキする。

外では女子の声援がちらほら聞こえてくる。

………那音も走ってるのかな？

そんなこと考えたけど、窓の方は見なかった。

「ふあっ……」

やばあ……

眠くなってきた……。

先生いないし……ベッドに潜ってようかな。

そうと決まれば

ベッドに直行ー

「んいー ……柔らかか……」

思っていたよりも柔らかいベッドに余計に睡魔が襲ってきた。

ガラッ

「?!」

だ、誰!?

先生……?

「せんせー?ってアレ……?…いないし……」

ドキン…ドキン…

なんでいつもいつも

私の心に入ってくるの?

「あれ…て…桜羽?」

「…な…那音…どうしたの？」

心臓は壊れそうなほどにバクバクだった。

だけどそれがバレないように
私は平然を装う。

ふと、那音に目を向けると
那音の膝は血で赤く染まっていた。

「ちょ…?!…どうしたの…?!…」

「え？あー…転けた」

そう言っつて那音は白い歯を見せて笑った。

ドキン…

心臓が跳ねた。

笑顔が

大好きだったの。

ドキドキしてる“心臓”とは裏腹に
“心”はズキズキが止まらない。

「…消毒してよ」

そう言って那音は先生のイスに座った。

「…えっ…」

いきなりの要求に戸惑う私。

「お願いしまーす」

特に深い意味でもなさそうだから私は仕方なく先生の前のイスに腰をかけた。

水で軽く洗ってから

消毒液を脱脂綿につけて丁寧に消毒をしてあげた。

「へえー…お前器用なのなっ」

「んー…？そうかな」

久しぶりに向けられた私への言葉。

私だけに

向けられた言葉…。

「…」

「…桜羽？」

やばい…なんか泣きそう。

「お…終わったから…！じゃあねっ……」

そう言い残して保健室をでようとしたときだった。

「ちょ…待って…！…ごめん…俺のこと嫌いなのに。…あと…気持ちに気付かせてくれてありがとう…」

那音の

“気持ち”は

りっちゃんへの気持ち。

やっぱりもどしたんだ…。

「大丈夫…あの…次はちゃんと大事にしてあげて？もう…泣かせたりしちゃだめだよ…？」

私の

最後の強がり。

“ 幸せになって ”

「うん…さんきゅ…」

那音は柔らかく笑って
私の手に何かを握らせた。

「じゃあな」

那音が見えなくなってから私は手の中のものを見てみた。

その瞬間

私の目からは涙が流れた。

「…いちごの…アメ…」

イチゴ味のアメを見たら
今までの記憶がゆっくりと頭の中で騒ぎ始めた。

イチゴ味の初めてのキス

「桜羽…珍しい名前 …!!」

那音と最初に話した言葉。

【やほ！！メールしてみた　メーワクかな？】

初めてのメール。

「…なんか桜羽に見せたくなくなっちゃってさ」

那音が見せてくれたキレイな星空。

「お前、可愛いなあ」

呟かれた一言。

『中途半端に優しくしてるつもりないから…桜羽だけ』

電話の向こう側で那音はどんな顔してた？

『……………桜羽…俺と付き合って…？』

このとき私は生きてた中で一番嬉しかった。

「ばかやるー…」

そう言って私を抱きしめた。
温かくて大きかった、那音。

ずっと、笑っててな？

笑えないよ。

笑えない。

泣いてばかりだよ。

「好きだ」

別れるときに真剣な目で言った一言。

全部、全部、

忘れられてない。

こんなにも新鮮に記憶が残ってる。

「…つな…おとあ……!」

好きで好きで

でも

気持ちのやりばがなくて。

叶わないってわかってても

恋しくて、愛おしくて…。

こんな想いいらないよ。

「…桜羽…」

「……っ?!」

顔を上げればそこには健太が立っていた。

「どしたあー…大丈夫?」

優しさが那音とかぶる。

「んっ…だい…じよぶ」

泣いてるせいで
うまくしゃべれない。

「全然…大丈夫じゃねえだろよ…」

健太は私の頭をポンポン、と叩いた。

健太も那音と同じ仕草に私は余計に涙が止まらなかった。

「っ…那音…な…お」

「那音？那音となんかあったの？」

私は少し言おうか考えてから、「クン…」と頷いた。

「…そっか、…泣くな…」

健太は何かを察してか、私の頭にあつた手をひっこめた。

そして私の頬に手をあてぐいっと上に上げた。

いま、顔涙でぐちゃぐちゃなのに。

「…っ…けん…た…」

「よしよし…大丈夫だから。な？…泣くな!!」

そう言つて私の頬をぺちつと軽く叩いて、軽く引っ張つた。

「…っ…いひゃい」

おそらく今私は変顔。

「ぶっ!!…可愛いね」

“可愛いね”

やっぱり何かが違う。

那音に言われた時は心が温かくて。

健太にはそういうのがないよ。

「…どこが…？こんな涙でぐちゃぐちゃなのに…」

可愛くなんかない。

私は悪い子だよ。

那音の幸せを心から願えない、

言葉だけの

最悪なやつだよ……？

「…ばか」

そう言って健太は私のおでこに唇をあてた。

「……………?!?!?!?」

な、なななななっ…?!?

きっ…キスっ!!
おでこにキス…。

「ほら 涙止まった」

「…あ…」

そういえば…びっくりしすぎた…。

で、でもなんで…

「……………付き合っ…?」

「…え……………?」

な…何言っ…てんの…??

「…一目惚れ…だったんですね…実は」

顔を赤らめて呟いた健太がなんだか可愛かった。

でも今は……

「……あたし……」

「わかってる。…だから…考えてみて？利用するだけでもいいから……」

利用って……。

そんなことできないよ。

「…健太…私…利用なんてしたくな……」

「忘れさせてやる」

ドキン……

健太の真剣な目に私は言葉がでなかった。

「…ごめん…こんな時に…でも考えてみて」

そう言っつて健太は去っつていった。

優しい、健太。

傷つけることなんてできない。

だから…ごめんね。

嬉しいよ。

ありがとう…。

『以上で体育祭を終了します。生徒の皆さんは…』

あのあと無事にもなく体育祭は終了した。

「桜羽ー」

後ろから瑠架が駆け寄ってきた。

「ん？なにー」

「かぁーえろー」

無邪気に笑いかけてきた瑠架に癒されながら

何も考えないで

私は家へ向かった。

どうにもできない…。

健太と付き合っても

きつと

那音とかぶる。

また、大事な人を傷つける。

そんな事はもうしたくない。

ポケットに入れっぱなしだったイチゴ味のアメを見つめて

そう、心から思った。

第十六話・新しい道（前書き）

急展開ですねー…（T―T）

わけわかんなくて

本当すみません…（；|；）

第十六話・新しい道

体育祭も終わり秋が近づく。

あの日以来私は那音と話をしていなかった。

…したくなかった。

健太からの告白の答えも保留のまま。

ただただ……。

時は過ぎていった。

夏が秋に変わるみたいに

私の気持ちも健太に変わっちゃえばいいのに

って…何度も思った。

秋がきて

私的那音に対する気持ちは

薄れていっていた。

というか

ムリヤリ考えないようにした。

今はりっちゃんと仲良くやっているはずだから。

だから

私も新しい恋しなきゃって…考えた。

ただただ…
忘れるためだけに私は必死だった。

「さあーわっ
」

「う…わっ…!!
」

後ろから光奈がキツく抱きしめてきた。

い…痛い。普通に痛い。

「あのさあ、今日の帰りにカラオケ行こ
」

「はいっ…!?」

いきなりの発言に驚く私。

か…帰りつて…。

別に構わないけど…。

「ん、おっけ 光奈とふたり？」

「へ？瑠架もだよお」

……りっちゃんはいないんだ…。

そうだよね…。

光奈や瑠架は私に気遣ってくれてるんだよね…。

私、弱いね。

みんなに気遣われて…。

りっちゃんとは仲直りはしたけど必要なときしか話はかけられないし…。

…強がつてるだけじゃ、強くはなれないよ…。

「おし じゃあーまたあとで」

うん、と笑顔で光奈に返事をした。

カラオケboxの中。

キレイな光奈の声がよく聞こえる。

もうすでに1時間が経過していた。

な……なんかトイレ行きたくなくてきたっ……!!

「じゅめん、トイレ……」

そう、瑠架に耳打ちしてトイレへ向かった。

あれ……?

トイレってどこだっけ?

あんまりカラオケってこないからよくわかんない……。

私がウロウロしていると後ろから声が聞こえた。

「あれ？桜羽……だよな？」

「へっ…?」

振り向けばそこには健太がいた。

「あー!! やっぱり」

そっぴいながら近づいてくる健太。

と、その友達。

健太を除き5人いる。

その5人の中に私の最も見たくない顔が1人。

那音……。

なんで会っちゃうかなあ…。

…最悪

「何やってんの？」

健太の声にハッとする。

「あつ…と…トイレわかんなくてっ」

「ああ、それなら…」

「綾野さん…だよ？健太知り合い？」

いきなり違うクラスの知らない男子が声をかけてきた。

「…へ…あ…はいっ」

同い年なのに知らない人だから、なんとなくかしくまっちゃん私。

「ちよ、お前」

健太の話を遮るようにして、男子が続ける。

「可愛くね？紹介してよっ」

そう言いながら私の頭を触ろうとした。

わっ……や……だ……！！

思わず反射的に目をつぶった

「触んなよ」

……へ………？

な……に………

ゆっくりと目を開けるとそこには今までしたこともない目でその男子を睨んでいた。

健太……。

「け…健太？なにキレて…」

あからさまに動揺している、その男子。

「触らないで？俺の」

ドキンッ……

『俺の』

那音が驚いた顔でこっちを見ていた。

「あの…け、健太…？」

ドクン…ドクン…

那音がこつち見てる。

やだ…。

なんでこんなドキドキしてんの…？

「…こつち…来て」

ぐつと腕に力をいれられた。

そしてそのままどこかへ私を連れて行った。

グイグイ引つ張るばかりで、無言の健太。

その空気に耐えられず私は思わず声を出した。

「…け…健太っ」

すると健太はピタリと足を止めた。

「あの…ごめん…なさい…」

「……………はい?!」

いきなり、しゅん…と捨てられたチワワのような顔で謝ってきた、健太。

か……………かわいい……………// //

「なんで? 助けてくれたじゃん?」

「…やつ…お…俺の…って…ば…バカな事を」

真っ赤な顔であたふたしている健太を見て思わず笑みがこぼれた。

「へっ? ああ…大丈夫だよ」

むしろドキドキしました…なんて言えないけど。

「ん……ていつか…告白の返事まだ貰ってない」

ギクッ……

「あ…えと……」

「じゃあー、わかった！ー！お試して付き合ってみない？」

えっ………。

「…でも…私…健太の事…傷つけるかもよ…？」

傷つける。

今の私じゃ絶対に…。

「それでもいいよ」

「…^…?」

迷いのない瞳で私に言った。

「それでもいい…」

そう言って抱きしめた。

もしかしたら…

健太なら

好きになれるかもしれない。

那音を……

忘れられるかもしれない。

傷つけるかもしれないけど

……もしかしたら

そんな期待が私を襲った。

「……傷つけたらごめんなさい……」

「……え……」

「……私で……いいの？」

きつと

那音を忘れられる。

そう思いながら健太を抱きしめ返した。

「桜羽じゃなきゃ……ダメ」

トクン…

私

忘れられるかなあ……？

ねえ、健太。

ねえ………那音……。

第十六話・新しい道（後書き）

こゝ、こんな簡単に……

いいんじゃないか……

（ノ　Ｔ）

第十六話・side 那音・一石二鳥(前書き)

題名わ気にしないですわい。(; (;) /

第十六話・side那音・一石二鳥

体育祭が終わってクラスが落ち着いてきたころ

もう秋が近づいていた。

だいぶ暑さがなくなった。

桜羽に別れを告げられてから俺は

ずっと1人で考えた。

誰を想っていた？

誰を…傷つけたくなかった？

答えなんてでなかった。

わからなかったんだ。

どちらとも傷つけたくなかったんだ。

…でも

夏祭りの時に俺はなんで桜羽の手を振り払ってまで律の所へ行っただ？

243

考え直してみれば

桜羽と一緒にいるとき、

たまに笑顔が律と被ってなんだか…ズキズキしたり

桜羽といるのに律のこと無意識のうちに考えていたりした事があった。

最初は

元カノだから

そう考えていた。

………だけど

ごめんな…桜羽。

俺、律じゃなきゃダメみたいなんだ。

桜羽のことは本当に好きだった。

だけど

俺の大事な人は

……桜羽じゃなかった。

桜羽……。

きっと桜羽は優しいから
俺に……

自分の気持ちに気づいてほしくて
別れを告げたんだろう。

優しすぎたんだ。

だから

桜羽ばかりが……
心を痛めていたのだろう。

それでも

“側にいたい”

そう思えた人は律だったんだ。

なんだか

那音…

そう言って笑う

桜羽の顔が頭に浮かんだ。

笑ってる。

ずっと、ずっと。

俺は桜羽の笑顔が

……大好きだから……

「なおー」

「ん？」

女友達が声をかけてきた。

……ダル。

そんな事思いながらも俺は人にあまり冷たくできるタイプではないため
適当に話を聞いた。

「今日カラオケ行かない？」

「えー……どうしよ」

俺には律がいるの!!

なんて言えないし…

だけど断るのもかわいそうかなー…?

「だあめ 那音は今日俺とカラオケ!!」

いきなり割り込んできた声。

「えー…じゃあまた今度ねッ」

そう言っつて女友達は廊下へかけていった。

「さんきゅー…助かった…絢斗」

「まったくー!!断ることもできねえの?」

絢斗はけっこつこついう時、助けてくれたりする。

……本当に助かります。

「じゃ そゆことだから！！学校終わったら、カラオケ集合な」

「まじかよ……」

ガクン、となりつつも
まあ“絢斗ならいいか”と
俺は帰る支度を始めた。

「あつ！！おせえぞコラ」

「すまん……」

絢斗の声に迫力なんてないけど。一応謝る俺。

てか

ふたりじゃなかったんだ。

絢斗と一緒に違うクラスのまあまあ仲いい男子が多少いた。

……プラス

健太。

「まあいい。ジュース奢れよー」

「はいっ!?!…つか…えっ?!…そもそも俺なんで怒られてんの!?!」

そうだった。

重大なこと忘れてた。

“おせえぞ”

つつたって…まだ時間の5分前。

「20分前行動厳守」

そう真顔で俺に訴えてきた絢斗に俺は呆れて言葉がでなかった。

こいつの自己チューさには、かなわない。(笑)

ガヤガヤしながら部屋へと進んでいる時だった。

ウロウロしている女の子が1人。

…桜羽だ。

ウロウロしているってことは、きっとトイレの場所でも悩んでいるのだろっつ。

「や…」

「あれ？桜羽…だよな？」

俺の声と健太の声が重なった。

きっと俺の声は誰にも聞こえていなかっただろう。

健太の声にくるつと振り向く桜羽。

「あー！！やっぱり」

そついいながら近づいて行く健太。

そついえば健太は桜羽が好きなんだっけ……。

「何やってんの？」

健太が問いかける。

「あつ…と…トイレわかんなくてっ」

少し顔を赤らめて恥ずかしそうに言った。

不覚にもその顔にドキッとしてしまった。

「ああ、それなら……」

健太が道を教えようとしたときだった。

「綾野さん……だよな？健太知り合い？」

ツレの男子が桜羽に話しかけた。

……なんだ？

「……へ……あ……はいっ」

桜羽はかしこまる。

たぶんまだ知らない人なのだろう。

「ちょ、お前…」

健太の話を遮るようにして、男子が続ける。

「可愛くね？紹介してよっ」

そう言いながら桜羽の頭を触ろうとした。

ちょ…なにこいつ…！

初対面の女子にこんな事言うか？

俺が止めようとして、手をのばした瞬間だった。

「触んなよ」

ビクッと俺の体が跳ねた。

お、俺？！

そう思つて健太に目を向けた。

その瞬間俺は固まる。

そこには今までしたこともない目で
その男子を睨んでいた、健太がいた。

「け…健太？なにキレて……」

あからさまに動揺している、その男子。

「触らないで？俺の」

“ 俺の ”

その言葉を俺は理解できなかった。

俺の……って…。

ああ……そうか。

こいつら、付き合ってたのか…。

全然言ってくんないからわかんなかった。

なんだろ。

少し寂しい、この感じ。

「あの…け、健太…？」
あきらかにあたふたしている桜羽。

そんな桜羽とは裏腹に健太は冷静に桜羽に言う。

「…こっち…来て」

そのまま

桜羽は健太とどこかへ行った。

「…び、びびった！！健太のあんな顔初めて見た」

絢斗もあたふた状態。

「てかあ。あの2人付き合ってたんだな」

ツレの男子が口にした言葉。

「……………」

これでいい。

桜羽は俺の事忘れられたんだ。

ちゃんとした道選んだんだ。

それでいいじゃないか。

俺はもう桜羽の事にしなくていい。

俺はもう桜羽の事で悩まなくていい。

桜羽は健太と幸せになる。

一石二鳥じゃん。

律が好き。

その気持ちに嘘なんてない。

だけどなんだか
心に
穴があいたみたいだ。

この気持ちをなんという？

誰か、教えて。

第十六話・side 那音・一石二鳥(後書き)

那音、よくわからないですね、、、

中学生って甘酸っぱいです(^w^)(

第十七話・強がり

…私、健太と付き合う事になったんだ。

そう打ち明けたのはりっちゃんが最初だった。

「…え?!嘘っ?!好きだったの?」

当然、びっくりするりっちゃん。

…好き…?」

まだ好き、ではないよ。

だけど本当の気持ちを打ち明けるわけにはいかない。

「うん…好きだよ」

そう言って笑顔を作った。

この頃、作り笑いに慣れてきちゃったよ。

「そかぁ…良かったね!! 幸せにね?」

そう言って満面の笑みを私に向けたりっちゃん。

「あたりまえーっ」

私もそれに答えるようにしてりっちゃんに笑顔を向けた。

笑うってこんなにツライ事だったっけ…？

「桜羽ー」

「！！」

思わず心臓が脈打った。

「健太ー」

「な…なんだよっ！！びびりすぎっ」

いつもと変わらない態度の健太にほっとする。

健太の事…好きになれたら…。

どれだけ、幸せだろうか。

「神崎ー、先生呼んでた」

健太がりっちゃんにそう言つと、りっちゃんは
「ありがとう」と言つて、教室を出て行つた。

「桜羽？」

「んー？」

軽く返事をするときゅっとほっぺを掴まれた。

いつ…たい！！手加減しようよっ！！（泣）

「へんはあー…いひゃい…」

約 健太、痛い

「桜羽っ!!」

大きな声で名前を呼ばれて思わずびっくりして目をパチクリする。

「は…はひ…」

約 は、はい

「笑いたくない時は笑わなくていい」

真剣な、でもどこか寂しそうな瞳で私に言った。

「…なん…で」

健太の手が私の頬から離れた。

「無理すんな…。」

「無理なんてしてないよ？本当に笑ってるし…！」

なんて言いながらも、顔が引きつる。

「なんで…強がる？」

健太の声のトーンが下がった。

だけど私は気にせず続ける。

「強がってなんかないよ？つか、私強いしさ」

頑張っ、頑張っ…明るく振る舞っ。

「弱いくせにどつどつして無理して強がる？」

その言葉に私の中で何かが切れたようなきがした。

強がってるよ。

だって弱かったらみんなに迷惑かける。

迷惑かけたくないんだよ。

健太に。みんなに。

…笑ってなきゃ、涙でてくる。

だから笑うんだよ。

今の私にとっては、笑うって事は

楽しい

嬉しい

幸せ

そんな事を表すためのものじゃなくて

ただ涙を隠すためだけのものなんだよ。

それに ……

“笑ってて”

那音がそう言ってくれた。

だから笑うんだよ。

「…じゃあなんで泣いてんの…」

「…え……………」

気づけば私の頬には冷たい涙が伝っていた。

大粒の涙が無意識のうちに瞳からこぼれていく。

「泣きたいときは泣いていいから。そばにいてやるから…。…な
」?

「ッ…けん…た…あ…ごめ…ごめんねっ…」

そう言って私は静かに机に突っ伏した。

そして今までの作った笑顔の分だけ泣いた。

健太はずっと私の頭を撫でてくれていた。

途中、少し泣き止んだ時に

“本当は抱きしめたいんだけどね”
って言っただけだ。

流石にみんながいる教室じゃ、そんな事できないからね。

「ばーかっ」

ありがとう。

健太…。

ありがとう。

…

…

「とじろでー」

「ん？」

放課後、帰ろうとしていた私に
健太が話しかけてきた。

「明日暇？」

「明日？んー…たぶん」

なにも用事なかった気がする。

「付き合っしてほしいところがあるんだけどー…」

そう顔を赤らめて咳く健太につられて私も熱くなる。

「いいよっ」

そう言うと健太はパアッと明るくなって、ガッツポーズした。

「じゃあ今日メール…する…って、ああっ！！」

「うわぁっ？！」

いきなり大声にびっくりする私。

なっ、なにっ……?!?!

「…俺、桜羽のアド知らない…」

「え？そうだったけ？」

てっきり教えてたかと…。

「あ…じゃあ今教える…」

教室にだいぶ人がいなくなっし、大丈夫だ。

携帯をこっそりカバンから取り出してピコピコと赤外線を用意をする。

「あー…桜羽…今日は？用意ない？」

携帯をいじりながら健太がいった。

「うん？」

今日……？

でも健太このあと部活だよね？

「よーしっ！…！部活とぼろっ」と

「えええ？！…」

な、なにを……！……！

「だから、今日はこのまま…教室いない？いろいろ話とかしたいし」

いきなりの教室残ります宣言にあたふたする私。

「だ、大丈夫なの？」

確か部活って出席率とかあるんじゃないかなかったっけ？

「俺普段超真面目だから 大丈夫」

「そ…それならいいんだけど…」

け、健太と2人きりかぁ。

ちよつとドキドキ…。

「とらあええ、アドね」

「あっ…うんっ」

健太の携帯と私の携帯をくっつけて赤外線開始。

「お…きたきた！！ありがとう」

「うん」

私のアドレス帳に健太が登録された。

あっ

そういえば

「あのさあ、明日どこ行くの？」

気になってたんだよね！！

「んー…水族館？」

ドクン…

那音と、初めて行ったデート場所。

それだけなのに動揺を隠せない。

「あ…えと…あたし、魚…は、あんまり…」

さ…魚とか…。

最悪じゃん、私。

「そ？…じゃあー…」

何も、突っかかってはないっばい。

…良かった。

「リクエストある？」

うっ

そうきたか…。

「んー…映画？とか」

あ、ありきたりだったかな？

「いいよ わかったー。そのあとは？」

「えっと…えとお…」

どうしよう。。。

デート場所だよね。

やっぱり…

ありきたりだけど

「遊園地っ」

「遊園地とかは？」

声がかぶった。

「あははっ…了解。遊園地ね！」

「…はい」

なんか…恥ずかしい／＼

「じゃあー今日メールするからな」

そう言って健太は私の頭をくしゃくしゃと撫でた。

思わず那音の行動と似ていて心臓が波打った。

ごめん、健太…

まだ私、未練たらたらみたい。

少しは心が健太に向いているかもしれない。

けど
それはほんの数%

忘れられるかな…？

「部活行かないし、送ろうか？」

「へっ？」

さっさと言われた一言。

いきなりいー？！？！

「だっ…だ、大丈夫！！」

「わー…あからさまに拒否りすぎ。傷つくなよ」

なんて言いながらも苦笑いする健太。

「やつ…ちが…家の方向反対だろうから…」

私の家の方向の人、滅多にいないだろうし…。

「んーまあね。嫌ならいいやつ…!!…じゃあなっ」
そう言って歩き出した健太。

あ……。

傷つけた…？

グイツ…!!

「えっ？」

「へっ？」

気がつけば私は健太のカバンを掴んでいた。

「さ…桜羽？」

「う…ごめんっ…傷つけた…かなって…」

すんなりとでた言葉。

「……………」

健太は黙ってこっちを向いた。

お、怒ってる…？

私がビクビクしていると

「んぶっ…!!」

鼻をつままれた。

「ばあか」

ば、ばかって…

「お、怒ってないの…?」

「なんで怒るの?」

え…?そうきますか…。

「や…だって…拒否…」

したわけじゃあないんだけどね?

「怒らないよ…桜羽が嫌がる事したくないし?」

「…け…んた…」

寂しそうな瞳でだけど真剣な瞳で

そう真っ直ぐに言った健太に、顔が熱くなった。

“那音”

と、被ったわけじゃなくて……なくて、

“健太”

ちゃんと

健太にドキッとした。

「桜羽さん？」

「えっ……あっ……はい!!」

思わず跳ねるような声がでた。

「好きだよ……」

そう笑顔で呟いて手を振って廊下を走って行ってしまった。

「　　っ……」

やばい。

今、ハンパなくドキドキしてる。

…健太…。

私…

健太の事、好きになれるかもしれない。

私の淡い、小さな恋心が

今少しずつ、少しずつ

動き始めた。

第十八話・好き？（前書き）

まず初めに。

前の話のときに文字間違いがありました。

“約”でわなく“役”

です（T—T）

気づいた方、すみません。

気づいてない方は気にしないでくださいorz

第十八話・好き？

「寝過ごしたぁー!!」

やばあ…。

時間まであと30分だ。

確か9時に駅だった。

駅はけっこう近いから

15分で着く。

ただご飯とか顔洗ったりとか……。

絶対間に合わない。

仕方なく健太に電話をした。

プルプル…

健太はワンコールででた。

『もしもし?』

「健太ごめん！！遅れるかも……」

いきなり、用件に入った。

『あ。まじ？んーわかった！！早めにな？』

「うん……ごめんね？」

怒ってないかなあ？

………つう。

心配になってきた。

『心配すんな？大丈夫だから。ゆっくりでいいよ』

「えっ……あ、うんっ……頑張って早く行くからね………じゃあ……ばいばい」

『おっ。よ。じゃあな』

ブシッ……

……切れちゃった。

健太は私の心の気持ちかわかるのかなあ？

なんか…エスパーみたい。

ふう、とため息をつき、携帯電話をしまって洗面所へ向かおうとしたときだった。

「っ…あ…？」

グラッと、目の前の景色が歪んだ。

「わ…なんだろ…」

目眩…？

なんか：体もだるい。

風邪かなあ？

急いで体温計に手を伸ばして、熱を計った。

ズ。ズ。ズ。

「げっ」

“ 37.5 ”

び…微妙。

まあそこまでするいわげじゃないし、大丈夫かな？

30分後に私は家をでた。

…

…

「健太っ…ごめん」

結局着いたのは10時近く。

「1時間遅刻ー」

そこにはいつもと雰囲気全然違う健太がいた。

黒のTシャツにピンク色がワンポイントで入っていて、

ジーンズの半ズボン。

膝の少し上が切れていてカッコイイ。

そして、白のサンダル。

プラス、黒縁メガネ…！！

「さあーわ？」

「へっ!?!」

思わず見とれていた。

「…あっ…なんでメガネ？」

見とれていたことを隠すようにして、話題をふった。

「ああ、見るの初めてだったけ？普段俺コンタクトだからさー」

そうなんだ…
知らなかった。

「ん?どした？」

はっ!?!
だめだっ…!!

今日なんだか、ずっとボーっとしてそう。

「かつ…こいいね…」

そう言うのが精一杯。

実は私、メガネ男子大好きだったりとかする（笑）

「…なっ…バカ…!!…さあ…電車…!!はい、手」

「ぶっ…!!」

今までに見たことないような、真っ赤な顔に、思わず吹き出した。

「あんなー…笑うなっの…!!マジ…ばか。お前の方が可愛いから」

「ばーか タコー」

「たっ…タコ言っとなっ…！」

健太、からかうの面白い。
可愛すぎ。

まあ…

“可愛い”って言われてドキドキしたのは、秘密ね

ガタン…ゴトン…

「まずは…映画。何見たいの？」

電車の中で健太が問いかけてきた。

そ、そこまで考えてなかった…!!

「んー、なんでもっ」

私の返事にガクツとする健太。

「お前なー…。…んじやなに？俺が決めていいの？」

「うん。いや」

私は即答。

ぶつちやけ映画はあまり興味がない。

「…あとで決めとくね？」

そう子供のように笑う健太に

……………健太に。

ドキッとした。

「あ。着いた」

健太の声で電車から降りて
駅の近くの映画館へ向かった。

駅から5分ほどで着いた。

大きくて綺麗な映画館。

中に入るといきなり健太が

「桜羽ー。ちょっとベンチで待ってて」

とのこと。

言われるがままにベンチに座っていた。

…どこいったんだろ？

もー！ー！ー！ー！ー！

けっこう経つよ?!

チケット買いに行ったのかな？

…にしては長すぎ。

一人にされると不安で不安でたまらなくなる。

「そーいえば…」

那音の時もこんなことあったな…。

夏祭りの時。

まだ新鮮に残ってるや。

…もう夏祭りから…2ヶ月かな？

……なんか、最近の事に思えるよ。

って…

健太といえるのに、何考えてるんだか…。

「桜羽？」

「あっ…ごめん、なお…」

あっ…!!!!

「那音」って言いそうになった。

やばい。

健太が黙っちゃった…。

「行こっか？」

そう言って笑った健太。

笑顔ひきつってるよ……？

ごめんね。

私は心の中で必死に謝った。

「……って……！」

「ん？どした？」

ど、どうしたって……。

「ホラーなんて聞いてないー……！」

今にも泣き出しそうな声がでる私。

やだっ……！

ぜつつつたいムリ……！！！！

私はホラー大嫌い。

理由はそのまま。

“怖いから”

「なんでもいって言ったもーん」

「うゝ…いじわるだあー…」

やばい。

始まつちゃうよー…。

「頑張れー」

余裕の健太。

くっそあー…!!…!

「いいもんっ!!」

拗ねてみたりする。

「うーそ。拗ねんなよ」

そう笑いながら私に謝ってきた健太。

完璧、バカにしてる!!泣

「べつに、拗ねてな…」

ちよっとムカついて否定しようとした時だった。

「ごめんな？」

そう言いながら、私の手をさりげなく握った。

「…うぎゃっ?!」

暗くて視界が悪いから突然の出来事に色気のカケラもない声でた。

うーわぁ!!!!!!最悪!!!!!!//

恥ずかしい!!

「きゃぁ」とかならまだしもっ……………!!

「…あははっ!!っ…さ…桜羽…腹痛い…!!」

健太サン、大爆笑。

かああっ…と顔が熱くなる。

「笑わないでよっ!!」

若干涙目で訴えた。

「いやー…可愛くてね?」

そう言っている健太の顔がかすかに見えた。

「か…可愛くないっ!!…って、ああー…! 始まっちゃっよお…」
忘れていた…。

「意地悪してごめんね? 目つむってな?」

急に弱くなる声。

おそらく本気で反省してる（笑）

可愛いな…。健太は。

お兄ちゃんぽかったり

意地悪だったり

急にすごく弱くなったり

いろんな、健太。

……那音の事、考えたりしたけど……。

あきらかに健太にドキドキしてる。

もしかしたら……

『きゃあああー！……！』

映画の中の女の人のものすごい高い悲鳴に、肩がビクッと上がる。

び……びつくりした……！！

若干涙目の私……。
ああ、情けない。

だけどっ

怖いし……！！

でたいよ……！（泣）

助けて……、お母さん……

し…心臓止まりそう…。

「桜羽」

「は……はい？」

小さな、小さな聞こえないような声で返事をした。

「ちゅちゅちゅ？」

「……？」

もう返事をするこことすら困難な私。

それに対して真剣な顔の健太。

こゝこんなときに何？

「那音…つてさ…」

ポソツと呟かれた一言。

「……………！」

そういえば、さっき…。

忘れてたかと思ってた。

間違えて健太のこと

“那音”って呼びそうになったこと。

「…無理して俺と付き合ってくんなくてももいいからな？」

……………え、

「…な…んで…?」

「桜羽、さっき俺の事待ってる時那音のこと考えてたでしょ」

ドクン、

と心臓が脈を打った。

私は何も言い返せなかった。

「俺の事利用しても、忘れらんない?」

「…な…!」

“利用”

という言葉に敏感に反応した私。

「ムリなら……」

「好きだよ……！」

……はっ！？

え！？

私……今なんて………？！

ていつかココ映画館……！！

大声出しちゃったし……！！

……す……好き？

って言ったよね……私。

「は……い……？」

あきらかに放心状態の健太。

わた…私、何を……！！

顔から火がでてているんじゃないか、というくらいに顔が熱くてたまらない。

“好き”だなんてあんまり考えなかったのに……！！

なんでいきなり……？

自分で自分にびっくりしている私に健太は目をパチクリさせている。

「桜羽…意味が分からない…ん…だが」

ふと健太の声で顔を上げると、健太は真っ赤な顔をしていた。

…きつと

“好き”っていう感情が私の中で生まれてるんだ。

だから

声にでちゃったんだ…。

…きつと…ね？

私は気持ちを落ち着かせるためにふうつと息をはいた。

そしてゆっくり…口を開いた。

「…まだ…よくわからないの」

「…ん？」

「…聞いて？」

そう言って
私は映画上映中のため周りに迷惑がかからない程度の声で話を始めた。

「好き…かも、なんだ」

「…かも…？」

一瞬、健太の顔が曇った。

だけど、私は続けた。

「よく…わからないの。那音の事…まだ好きかもしれない。だけどね、健太が気になるの」

ああ…。

なんか涙がでそうだよ。

よくわからないの。

誰が好き？

誰に側にいてほしい？

答えを出すのは私なのに…私自身なのに。

出せない。

出ないんだ…。

しばらくの沈黙のあと、健太が私の手を握った。

「…うん…そっか。桜羽はまだ答えが…でないんだ？」

コクン、と頷くことしかできない私。

「…わかってるよ。忘れられないよな…簡単に」

「……………」

ポロポロと落ちていく涙が服に落ちて、色が変わっていく。

「…そんな簡単に忘れられたら…こんな悩まないよな…」

健太が泣きそうな声で呟く。

「…っごめ、だけどっ…好き…になれるよ…」

好きになれる。

「…なんで？」

冷静な声。

理由は…よくわからないけど。

健太に握られていた手を強く、強く握り返した。

「私、健太の良いところ…いっぱい知ってる。
それに、健太の優しさについていっぱい助けられたんだよ。
今日は那音の事より…健太の事、いっぱい考えてたの」

「…まあか。忘れさせてやるって言っただろ？」

涙でぐちゃぐちゃな顔の私に向かって笑顔を見せた健太。

「…ばあか、…」

そう言っつて私も笑いかけた。

ホラー映画中だったことも忘れて私たちは映画が終わるまで話し込んだ。

健太、健太、健太。

もう少し、待っててね。

「ひゃっほお〜!!!!」

「きゃあぁー!!!」

只今恐怖のジェットコースター中です。

いつもより、空に近い。

だけど私は目をつぶっていて、そんなこと気にもできなかった。

「ふい〜…おつかれ桜羽」

「…はあ〜…つか…れた」

私たちは映画のあとご飯を食べてすぐに遊園地に着いた。

そして、もう3時になるうとしていた。

時間が過ぎるのが早い。
楽しいからかな？

にしても…

なんだか無性に暑い。
クラクラしてきた。

「桜羽…どした？具合悪い？」

ヨタヨタしている私に気づいて健太が声をかけてきた。

「ん。大丈夫だよ？」

これくらいなら大丈夫だろう。
ただ疲れただけだろうし。

「そ？ちよつとジュース買ってくるから、そこいな？」

「はい…」

私は近くにあったベンチに腰をかけた。

途端、頭痛が私を襲う。

「…痛っ…!!」

なんだろ…。

だるいし、頭痛い。

あ…!!

そういえば私今朝熱あつて、そのまま出てきたんだつた。

熱、上がったのかな。

そりゃそりゃだよね…。

結構動き回ったし…。

「さーわ」

少し遠くに健太が見えた。

健太のところに行こうと立とうとしたときだった。

「あつ…けん、」

グラ、

視界が一気に真っ黒になった。

「桜羽っ?!」

そう、叫ぶ健太の声が最後に聞こえた。

「 ……ん」

「桜羽っ…!!…良かった…」

目の前には心配そうな健太の顔があった。

「…!!!」

周りにはベッドなどがあって保健室っぽい感じ。

「ああ…遊園地内の休憩所っていつか…まあ学校でいう保健室だよ」

あ、やっぱりか。

ふと時計に目を運ぶともう5時を回っていた。

私2時間寝てたの？！

2時間も…健太は側にいてくれたの？

「け…健太…ごめん…」

せっかくのデートが、台無しだ…。

私のせいで…。

「本当だよ」

…え

やっぱり、怒るよね…。

「なんで熱ある」と言わねえんだよ…ばか」

「……………へ？」

そ、そこ？

そこに怒ってるの？

「はあ、もう！！…心配した…」

そう言っつて健太は私の頬を撫でた。

ドキンっ…

「ひゃっ…」

「?!」

健太の手が冷たくて思わず、声が漏れた。

「わ…ごめ、…ごめん」

「や…大丈夫…。俺こそ…すまん」

なんだかあわあわしている健太。

私変なことしたかな!?

「…け、健太…?」

心配になって声をかけた。

「…わ、ちょ…見ないで…」

そう言って健太は顔を背けた。

……ガーン……。

そこまでっ?!?! (泣)

「…いじめ…なぞ」

少し泣きべそかきながら謝った。

「…や…ちが、ちがくて」

健太は首をぶんぶんとぶった。

「……？」

意味が分からない。

怒ってるんでしょ???

健太は、はあく…と息をはいて私を見た。

「可愛すぎだよ?」

「…へっ?!」

意味が理解できない私。

か…可愛すぎて…?」

どゆこと？

「ど、どゆこと？」

首を傾げる私。

「…だからあゝ。俺も男なのっ！！わかる？」

「……んん？」

な、何？

男？まあそりゃ男だよ？

何言ってるんの。健太…。

「あゝもっつ！！…純粋すぎっ…！！！」

グイツ

腕を思い切り引っ張られた。

「わ……」

健太の顔が私の顔に近づいた。

と、思った瞬間…。

ちゅ…

「!?!」

いきなりの出来事に何が起こったかわからなかった。

そのまま健太の唇は私の唇を離さなかった。

息…できないっ…!!

「っ…んう…!」

声が漏れる。

「…ふ…はっ…!」

やっと唇が離れた。

「け…けん…」

「…ごめ…我慢できな…」

そう言いかけると健太は私の唇をまたふさいだ。
「…っ」

だめだ…。
クラクラする。

やっとのこと唇が離れた。

「あー！！好きだっ」

そう言って強く抱きしめられた。

「…健太…」

まだ残っている、唇の感触。

那音以来のキス。

初めての、長い長いキス。

すくくドキドキした。

「うん…」

「きゅ…急にごめん。…まだ…その…那音…」

あきらかにキスした事を後悔している健太。

私…嫌だなんて思わなかった。

むしろ…もっと、なんて。

「私…嫌じゃなかったよ…？」

心臓がバクバク。

だって

こんなこと言ったことなんてないし…。

「…でも…」

「ね？」

否定しようとする健太に笑顔を向けた。

「…ん」

納得したようなしないような声で返事をする健太。

「なんで今更気にしてんの〜…」

クスクスと笑いがもれた。

なんかしゅんとしてる健太が可愛くて。

「…じつさい〜…」

そう言いながらまた更に強く抱きしめられた。

「…ッ!…」

ねえ 健太？

私今日1日楽しかったよ。

健太のいろんなところもつと知れた。

好きに…なれた。

ただ…もう少し待って？

まだね、心の端っくに那音がいるから…。

100%健太でいっぱいになるまで待っててね。

そうしたら

“好き”

すぐに伝えるよ。

第十八話・好き？（後書き）

なんだか

この頃

話がよくわかりませんね

ごめんなさい（ ; ）

第十九話・その後。(前書き)

すみません…!!

“役”でもなく“訳”
ですっ (| ;) (泣)

頭がおかしい訳じゃないですので (T|T) 汗

ただの打ち間違いです

m (|) m

第十九話・その後。

結局

あのとすぐに家に帰ってきた私たち。

映画もろくに観れなかったし

遊園地もゆっくりできなかった。

「私のせいだあゝ……」

「桜羽…しつこい。大丈夫だって言ってるじゃん」

健太の慰め（？）の言葉を今日は何十回聞いた事やら…。

「んっ…でも…」

授業中なのにも関わらず普通にしゃべってる私たち。

「でもじゃないの」

グサツと健太の一言。

う…。

だって

私のせいでデート台無しになっちゃったんだよ？

「…うっ…ごめん。また行くっね…？」

謝罪をしつつさりげなく誘ってみたりする。

「…え…あ、おう」

突然の誘いに驚いたのだろう。

健太は顔が赤くなっていた。

ほんと、すぐに赤くなるなあ。

可愛い。

私の心はあの日から確実に健太に向き始めていた。

那音の事はそりゃまだ気にはなるけど
この頃はそうでもない。

りっちゃんとも仲良くやっているだろう。

これでいいんだ。

私はちゃんと道が作れたんだ。

やっと

新しい恋に進めた。

そう思っている。

これからが

私の本当の恋の

苦しみだなんてこの時は

カケラも思わなかった。

思うわけもない。

こんなに幸せだったから。

周りを……………

那音を

りっちゃんを

……………健太を。

ちゃんに見れなかった。

私が

自分の事でいっぱいだったから……。

後悔なんて

だいぶ未来の事。

第十九話・その後。(後書き)

短編でした。

史上初の短さです(< 〱 >)

第二十話・大切な人

「さーわっ」

突然の明るい光奈の声。

「はいー？」

もちろんその声に明るく応答する私。

「あのさっ、いい天気だね！！つかだいぶ冷えてきたあ…！！」

突然の光奈の言葉に頭いつぱいに

「？」が浮かんだ。

な、なに言ってるんだ？

「そだねえ…もうすぐ11月だし…」

気がつけばもう

時はだいぶ経っていて。もう半袖じゃ少し寒い時期になった。

那音とはあの体育祭の出来事以来話していない。

だけど寂しくはない。

今は

ちゃんと健太が好きだから…。

“100%健太が好き”

今なら胸を張って言えるだろう。

「…んで？本題は？」

思い出したように私は光奈に問いかけた。

「あー…え？や、なんもないけど…ただ話したかったただだよ」

ニコツと笑って見せた光奈にちくん、と心が痛んだ。

…作り笑い。

光奈？

まだ会ってから何年とかは経ってないけど

私わかるんだよ？

光奈といつも一緒にいたんだから。

作り笑いをした光奈のほっぺに向かって私は、指を向けた。

「ん？なにっ？」

「……………えくぼ」

「……………？」

光奈は作り笑いするとえくぼができる。

こんなにわかりやすい作り笑いする人、光奈くらいだよ。

「作り笑いでしょー！！私の事騙せるとでも思ったあ！？」

私はそう言いながら光奈のほっぺでぐりぐりと指を動かした。

「いたいいー…うそぉ。すいね…ごめんね？」

申し訳なさそうに、“ごめんね”と呟いた光奈がなんだか犬みたいで可愛くて、ふいてしまった。

「なっ…なに、ふいてんのよ…バカ桜羽」

「あはっ、ごめ…可愛くって…」

「い、意味わかんないっ！！！」

そう言いながらも顔が少し頬がピンク色に染まった光奈。

「あははっ、ごめんごめん…」

軽く謝ると光奈は、少し表情を変えた。

「…桜羽、今健太が好き…だよね？」

真剣な瞳で私に問いかける光奈。

「…うん？好きだよ？」

決まってる。

那音の事を、忘れさせてくれた健太。

優しくくて

温かくて

“好き”だよ。

「だよねっ…良かった」

光奈はふう、と消えそつなくらいのため息をついた。

「……………」

いきなりどろしてこんな質問をされたんだろう。

首を傾げていると、授業の始まりを知らせるチャイムが鳴った。

「わっ…ごめん！！今日メールするからっ」

慌てて光奈は自分の席に戻った。

「……」

なんだろう。

なんか嫌な予感がする。

ふられちゃうかもとか、そういう予感じゃないけど
なんか

…なんだろう。

「桜羽ーごめん！！教科書見して。忘れた」

いろいろ考えて
ぼーっとしていた。

健太の声ではっとした。

「……あ…う、うん」

急いで机の中に手を入れて教科書を探した

「なんかあったでシヨ」

健太の声に私の教科書を探す手が止まる。

「な、なんもないよ……」

思わず俯いてしまった私に、健太はにこっと笑って私の頭を撫でた。

「大丈夫か？なんかあるなら我慢すんなよ？」

きゅん、と胸が締め付けられるような感覚。

「……あり、がとう……」

健太の優しさに思わず涙腺が緩む。

「わっ……ちよ、泣くなっ……大丈夫？」

「ッくん……」

健太、健太……。

大好きだよ。

【やほ

メール久々だよね*。

今大丈夫ー？】

お風呂上がりちょうどに光奈からメールがきた。

【やっほ

久々だね

大丈夫だよー】

すぐさま返信をした。

私は送信したのを確認するとタオルで頭をくしゃくしゃと、ふき始めた。

一分程度で返事は返ってきた。

【明日暇かあ？

暇なら明日瑠架と律、

誘って遊ばない？】

瑠架…、はともかく。

この3人の中に入りっちゃんが入ることはあまりなかった。

なんで…？

別に嫌とかそういうんじゃない…。

なんだか変な違和感を感じた。

まあでも、明日は暇だし…。

【大丈夫だよ

待ち合わせドコ？】

ていうか帰宅部の私は大体毎日暇…。

自分の言葉に、なんだか苦笑い。

【んー

じゃあー…駅の前の

カフェわかる？】

光奈からのメールに一瞬、どこだっけ？なんて考えながらも

何回か、光奈たちと行ったから…なんとなーく場所が思い浮かんだ。

まあ
どうにかなるっしょ

【わかるよー

大丈夫 f ^ | ^ ;
】

そのあとも軽くメールのやりとりをして

明日は一時から駅前のカフェに待ち合わせになった。

光奈とのメールのやりとりが終わると

ケータイを

ぱたん…

と、ゆっくりしめた。

りっちゃん……。

明日かあ…。

久々に話すかも。

那音と…うまくやってるのかな？

聞いてみようかな…。

今は健太が好きだし、

…でもなんか、怖いのはなんでだろう？

「あーもう…」

自分の気持ちがあまらなくて苛々する。

「じいじい時はおひなと寝よう。

寝て、忘れよう。

私はまだ濡れたままの髪で眠りについた。

「早すぎたかな…」

只今待ち合わせ時間の15分前。

天気はあまりよくない。雨が降りそうだ。

若干肌寒い。

もう半袖の季節は完全に終わりを告げた。

もう、冬…かあ。

この学校に来て結構経ったなあ…。

「桜羽ー！！早くない？」

私の次に待ち合わせ場所に来たのは、瑠架だった。

光奈と一緒に来るかと思ってた…。

「瑠架、光奈とりっちゃんは？」

私の質問を聞いて、瑠架は

「うーん」と、うなった。

「わかんない…」

「そ、そっか…」

結局わかんないかい!! (汗)

「あ!! 律と来るって言ってたよ」

「あ、ほんと?」

「たぶんー」

なんなんだ、この子は…。

なんかつかみにくい (笑)

「んまあ…寒いし、先に入ってようよ」

にっこりと可愛らしい笑顔で私に向けられた言葉に少しきゅん、なんて思ったりした。

「ふぉ…あつたかい…」
店内は外とは全く違って、寒さなんてなかった。
適当な位置に私たちは腰掛けた。

）
）
）

「…あー、光奈だ」

鳴っていたのは瑠架の携帯電話。

「電話？」

「ううん、メール」

瑠架は、光奈からのメールを見て
「まじかよ」と呟いた。

「ん？どうした？」

ふと問いかけると、瑠架は眉間にシワを寄せてブスツとした声で

「寝坊したから律と遅れるってさー！！まったく」

「あー…なるほどね」

光奈ならよく寝坊するし…。
まあ想定内ってところですかね。

「光奈、けっこうよく遅刻するよねえ…」

ちよつと不機嫌な声で呟いた瑠架。

「だよなー…まあ、しょうがないよー」

こればかりはどうもできないからねー…。

「うー、まあいつか お腹減ったあ。お昼ご飯食べてないんだよね」

サラッと気分が変わったのか、パラパラとメニューをめくり始めた瑠架。

「そだね。なんか食べようかあ」

ここのお店のパフェは、私が知ってる中で一番おいしい。

ってなことで。

私は即パフェ決定

「瑠架は？」

メニューを見ている瑠架に問いかけた。

「うーん。じゃあ…ポテトとチョコパフェ」

「おー…」。

よく食べますねえ。

心の中で、軽くつつこんだあと私は店員を呼ぶボタンを押した。

「ご注文どうぞ」

「チョコパフェ2つとポテト1つ下さい」

「かしこまりました、チョコパフェ2つとポテト1つでよろしいですか？」

「はい」

軽く返事をするとう店は厨房へと向かった。

「桜羽もやっぱパフェかぁ おいしいよね」

「うん」

甘党の私にはたまりませんっ

「あーそういえばさあ」

なにかを思い出したように、瑠架が口を開いた。

「んー？」

「健太のこと！！聞いたよね？」

グツ、と息が詰まった。

「な、…なにが？」

瑠架は何を言おうとしてるの？

健太？健太が何…？

なにかあるの？

昨日の光奈の質問が脳裏に浮かんだ。

「健太のこと好きだよね？」

「え、知らないのっ?!」

瑠架は目を見開いて、身を乗り出した。

「なに…?」

なんだかすごく不安で不安でたまらなくなっていく。

「健太ね……」

「お待たせしましたー」

タイミング悪く、パフェが運ばれてきた。

私は店員に軽く会釈すると、
パフェに手を伸ばすことなど忘れ、瑠架の方をじっと見つめた。

そんな私をよそに瑠架はパフェに手を伸ばした。

「ちょ……瑠架さん」

「はひ？」

口にアイスを運ぶ瑠架はまるで小学生のよう。

……モテる理由、わかる気がする。

裏がなくて、素直で。

可愛いし……。

って!!

そんなこと考えてる場合じゃないっ!!

「健太のこと…」

「あ、ごめんごめん!」

そう言って瑠架はスプーンを置いた。

「あ、食べながらいいよ?私も食べるから…」

そう私が声をかけると瑠架は、ぱあっと明るくなり、
またもやアイスを食べ始めた。

私もアイスを口に運んだ。

「健太ねー…って、あ。桜羽には言っなって言っってたよな…」

…私に、言っちゃいけないようなこと?

「ま、いつかあ」

いいんですかっ?!

声に出してつっこみたかったが、ここは我慢して…。

「で、？」

「うん、でね…まあけっこう深刻な問題なんだけどね」

瑠架はアイスに手をつけるのをやめて生クリームを口に運び始めた。

ゴクン、と私はゆっくり口の中の温度で溶けきったアイスを飲み込んだ。

深刻…。

大きな病気にかかったとか？

なに？

頭の中を嫌な予感ばかりがぐるぐるする。

「転校するんだって」

瑠架は顔色一つ変えずに私に言った。

…転……校……？

「い、いつツ……?!」

それは唐突にでた言葉。

『転校』という文字が
私の頭の中を駆け回る。

「んー…確か、3年になるくらいの頃かな？」

「3年生…」

てことは、春。

あと約…5ヶ月？

なんで健太は私に言ってくれなかったの？

「あ、言ったってこと言わないでね？」

思い出したかのように、顔の前で手を合わせて私に軽く頭を下げた。

「う…うん、」

だが今の私にはそんなことを考えている余裕がない。

店内の暖かさで

目の前のアイスがどんどん溶けていく。

なんで

なんで

なんで

…なんで？

「わたし、私…トイレ…」

とりあえず健太に確認しなきゃ。

気が動転している私は健太に確認を取ろうと、必死だった。

電話…

電話でいい。

そう思っただけ私はポケットから急いで携帯を取り出した。

トイレに駆け込んで、誰もいないのを確認すると、私は急いでアドレス帳から『健太』を探した。

あつた…

見つけた瞬間に、涙がでそうになった。

『音声電話』

を震える指で押した。

「…でて…」

プルルル…プルルル…

…でない。

プルルル…プルルル…

ダメだ…。
でないよ…。

もうコレ以上鳴らしても無駄だと判断した私は
耳から携帯を離した。

その瞬間だった。

プッ…

『桜羽？』

健太が電話にでた。

「っけん…た…？」

『え…桜羽?! どうした? 泣いてる?!』

健太は私が泣いている事にすぐに気がついた。

「健太…転校するの?」

思ったよりすんなりと私の口からでた言葉。

『なんで…その事…』

きつと電話の向こうの健太は目を見開いていると思う。

「うそ…だよね?」

うそだと言って。

いつもみたいな柔らかい口調で
「うそだよ」って笑ってよ……。

『…じめん…』

か細い声で謝った健太に、嘘ではないという事を突きつけられた。

「なんで？なんで言うてくれなかったの？」

転校するって事の以前になんで私に言うてくれなかったのかという事に対しての怒りと悔しさがこみ上げてくる。

『……………』

なにも答えない健太に余計に苛立ちを覚える。

「もおいいよおッ…！…！」

気持ちの整理がつかなくて一方的に電話を切ってしまった。

知らない。知らない。

健太なんてもう知らない。

電話を切る前に

最後に聞こえた

「待ってっ…おれ、」
という声。

それを私は聞き流した。

「っ…、」

「さーわ？」

いきなりドア越しから聞こえた高い声にビクッと肩が上がった。

瑠架だ…。

「もう15分経ったよー？大丈夫ー？」

涙を急いで拭い、下を向いたまま私はドアを開けた。

「…桜羽？」

心配そうな声の瑠架。

だけど、そんな声すら耳に入っていない。

「ごめんね…お腹痛いから帰る」

瑠架にそう告げて私はトイレからでた。

「え?!大丈夫?パフェ代私払つとくから…早く帰んなね?」

後ろから瑠架の優しい声が聞こえた。

「大丈夫…ありがと。お金学校で返すね…」

それだけ告げて私は店をでて、家へと走った。

外と店内の気温差が激しくて余計に寒さを感じた。

なんで

私の大切な人は遠くに行ってしまうのだろう。

なんで

離れていってしまうのだろう。

………神様。

神様は

そんなに

私が嫌いですか…？

第二一話・夢(前書き)

なんか急展開多くて、ごちゃごちゃしてすみません…。

第二話・夢

。。。。。

頭の上で鳴り響いている目覚まし時計に手を伸ばした。

「うゝ…朝…？」

…もう、朝か。

てことは…学校行かなきゃ。

「うゝ…さむ…」

小さな独り言をもらしながら、パジャマを脱いで、制服に腕を通す。

着替え終わると、リビングに向かった。

「おはよー…。あれ？お母さんは？」

リビングに入って、すぐに目についたのは美羽だった。

「あ。お姉ちゃん、おはよ。お母さんなんか今日仕事早いらしいよ」
「？」

あー…。

そういえばなんか昨日、そんなこと言ってたよつな…。

「ねえ、お姉ちゃん。1つ質問いい？」

美羽はパンを食べながら私に話しかけてきた。

「ん？」

「なんで制服着てんの？」

突然の美羽の意味の分からない質問に目を丸くする私。

「はあっ？」

としか、返す言葉ないよ。(汗)

「今日、日曜日」

サラッと、軽く口角を上げて言われた一言。

「……………あ！！」

そういえば…。

そうでした…。

なんと情けない。

何をやってんだか…。

ばかにもほどがあるよ、私。

「そんなに学校行きたかったの？」

「ち、ちがつ…！！」

行きたいわけがない。

昨日あつた事を、頭から消すことができないんだから…。

「まあ、いいや」

「…っ」

冷静な美羽がなんだか腹立たしい。

私は自分のイスに乱暴に座り、パンにジャムをつけ始めた。

「ねえ、お姉ちゃん」

今度は、なにっ…。

まだ変なところある!?

「…ん？」

ちょっと不機嫌な感じの返事をした。

だけどそれにまったく動じず、笑顔で話を続ける美羽。

「今日、ちょっと一緒にプレゼント選びしてくんない？」

想定外だった美羽からの誘い。

「うん…別にいいよ。誰にプレゼント？」

まあ、ひまだし…。

美羽と出掛けるって少ないし、たまにはいいかな。

「いろいろ」

いろいろ、って…。

彼氏かな？

…って。

なんで私に頼むんだ？

いろんな疑問をとりあえずは頭にしまっておいた。

「さあ〜行こう」

「は?! ちょ、まだ制服だしッ…!!」

「制服でも別によくない?」

「……はあ」

もっどっどでもいいや(泣)

美羽の自己中ぶりには勝てません。

ギブアップ〜…。

「早く歯磨きして、顔洗ってきて〜」

「はいはい…」

生返事の私に、美羽はふうっと溜め息。

溜め息つきたいのはこつちじゃあー!!! (怒)

心の中で苛立ちを抑えて、しびしび洗面所に行つて、支度をすました。

まったく…。

朝ご飯もろくに食べられてないよ。

ぶつぶつと文句を言いながら、私は玄関に鍵をかけ、家をでた。

「ねえー男の子ってどんなもの欲しがる?」

近くのデパートの雑貨屋で美羽は男子へのプレゼントを選んでいる様子。

「私は女ですよ?」

男の子呼べば良かったじゃん。

なんて心底思った。

ていうか何気制服って目立つかも…。
若干恥ずかしい。

「えー…」

シヨボンとした美羽に対して、『男子連れてくれば良かったじゃん』
なんて言えるはずもなく。

私は美羽の頭をポンと叩いた。

「アクセサリーは？」

「んー…アクセかあ」

ちょっと悩んだような顔を見せた、美羽。

「や、美羽てきにはね？アクセでもいーんだけど…」

「だけど？」

「…彼氏ね、そういうのつけない人なんだよ」

やっと白状したか。

やっぱり彼氏じゃん。

“彼氏”

私にとっての彼氏は

“健太”

……昨日。

なに言おうとしてたんだろう。

今更になって、聞いておけば良かったと後悔の波が押し寄せる。

「…、お姉ちゃん？」

「…あつ、え？」

「ねえ、なんかあったんでしょ。健太先輩と」

美羽が真顔で私に言った。

「…はっ?!」

ちよ、ちよっと待って?!

私美羽に言っていないよね?!?!

「なんで知ってるかって？そりゃ知ってるよ。
健太先輩、人気あるんだよ？」

私の心を読み取ったかのようにペラペラしゃべった美羽。

へえ…。

健太って人気あるんだ。
なんか、複雑な気持ち。

「健太先輩、転校すんでしょ？」

「…」

美羽って結構物知りだな。
ちよっと心の中で尊敬した。

「…そだね」

「理由カツコイイよね」

理由？

そうだ…。

理由。理由は何？

昨日は気が動転してて考えてる余裕がなかった。

「り、理由って何?!」

聞かせて。

早く、早く。

「え!?!知らないの?!」

ていうか

「…なんで美羽は知ってるの?」

「彼氏が、野球部だからだよ」

野球部?

「健太先輩さ、野球大好きでしょ?

だからね、目標が甲子園なんだって。その、甲子園の夢叶えたいから
野球が少しでも強い中学、高校に行きたいんだって。やっと中学と
高校の手続き完了したらしいよ?」

美羽から聞いた話に私は心をうたれた。

なんで昨日、私はちゃんと理由を聞かなかったの?

最後に言いかけた言葉に繋がっていたのは、

このことだったの…？

「お姉ちゃんには、転校するまで言わないつもりだったんだって」
美羽は更に話しを続ける。

「…え？」

「時間を気にして接してほしくなかったらしいよ？…まあここまでしか彼氏には聞いてないけど」

「…、」

言葉がでない。

健太は健太なりにいろいろ考えてくれてたのに。
それを

「もういい」

なんて言葉で私は片づけちゃったんだ…。

何やってんだ…私。

「お姉ちゃん、帰っていいよ。」

「な、なんで…?」

突然の言葉を理解できない私。

なんなの？美羽。

「健太先輩、いるよ?」

健太が?

「な、なん」

なんで?

「昨日、家に電話あったよ。お姉ちゃんがケータイでないって。心配してた。」

「んで、美羽があ、『そんなら明日来てくださいよっ』って冗談言ったら、『あ、じゃあ明日行きます』ってさ。」

…そうだった。

私、ケータイの電源切ったんだった。

あれから健太から着信があったから…。

なんだか、でるのが怖くて…。

「はい、ばあいばい」

美羽はそう言って私の背中をポンと押した。

「っ、美羽っ…」

この、おせっかい…！

っていつもなら怒ってたと思う。

だけど、今回はそのおせっかいに感謝するよ。

「…ありがとう…」

そう呟いて、私は家へと走って向かった。

幸い、デパートが家から近いので、走れば10分もあれば着く。

健太、健太、健太。

ごめんね。

ごめん。

なにも気づけなかった。

気づけなかった。

…気づこうとしなかった。

家が見えてきた。

その家の玄関の横には、

はっきりと見覚えのある、
大好きな人。

「…け、健太…」

走って乱れた呼吸を整えながら、その人の名前を呼ぶ。

「…遅い。ばか」

そう言った健太は優しく笑っていた。

きつと美羽が私に全部話したことを知ってるんだろう。

健太の前に立って、私は、健太を見上げた。

「はじめ、…ごめんなさい…」

今にも涙がでてきそうだ。

「また泣く気？…泣き虫…」

そう言って健太は私の頬に触れた。

「…っ…つめた、」

健太の手はとても冷たかった。

おそらくずっと外で待っていたのだろう。

「あ、わりい」

私の反応を見ると、そう言って手を離れた。

「とりあえず…中入ろうか。なんかあったかいもの持ってくるね」

健太の冷たい手を引っ張って、家へと導いた。

「え…」

クツと止まった健太。

親の事気にしてるとか？

「今日仕事だから、家誰もいないよ？」

「や、そうじゃ…なくて…」

もじもじ（？）している健太。

「あー、はい、じゃあ…おじやまします」

そしてなぜか発言と行動が矛盾している。

「…うん、？どござ」

だけど気にせずに私は健太を家にした。

「階段上がって、すぐ左が私の部屋だから、先行ってて？」

「ああ…うん」

なんだか落ち着かない様子の健太。

そんな健太を気にしつつも私は、台所へ行ってお湯を沸かし始めた。

「…、」

ちゃんと、謝んなきゃな…。

何から話そう…。

いろいろ考え事していると、やかんからピーツという音がした。

「…あつ、わあつ」

慌てて、火を止めた。

ていうか。

何の飲み物がいいかな…？

やっぱり紅茶？

私は紅茶飲めないけど。

…まあとりあえず、私はココアで健太は紅茶でいいか。

ガチャ、

部屋に入ると、健太は私のベッドで寝ていた。

「……ん、桜羽？」

「あ、ごめ…起こした？」

ついつい、寝顔がキレイで見入ってしまった。

健太は目をゴシゴシと擦ると、目一杯のびた。

「…ふあ…ねみい…」

その、猫みたいな仕草にクスツと笑ってしまった。

「なに笑ってるんだよー…」

「ふふっ、ついつい可愛くて…」

ぷくつとほっぺを膨らました健太。

お兄ちゃんみみたいな健太が初めてスネた。

やだよ。

やっぱり、離れるなんて、できないよ…。

寂しすぎるよ。

健太は寂しくないのかな？

「ねえ、健太…」

「……ん？」

“私と野球どっちが大事なの？”

なんて、バカなことは聞けない。

夢と恋は関係ないんだから。

ごちゃごちゃにしちゃいけない。

「…離れるの、寂しい」

そう言って、私は健太の横に座った。

「…桜羽…」

困るよね。
わかってるよ。

だけど…、私そこまで感情抑えられるほど大人じゃないよ…。

「…うん、俺だって寂しいよ？」

「…、」

まだ中学生だ。

これからだっっているいろいろ出会有るはず。

周りの人はそう考えるだろう。

だけど今の私には…。

“今”

を大切にすることくらいしかできないんだ…。

「妹さんから…全部聞いた？」

健太の質問にコクン、と頷いた。

「…ごめんな…なんか、言い出しにくくて…」

「…うん」

「この中学入学したときから決まってるさ。本当は二年の二学期から行ける予定だったんだけど…」

私の方を向いてニコツと笑った健太に胸が痛んだ。

「二学期から行けたのに、私のせいで行けなかったの…？」

「桜羽のせいじゃないよ。ただ…一年生はちゃんと終わってから行きたいなあって…」

「…うん」

「桜羽と一緒にいたいっていうのもあるんだけどね？」

「…」

そう言うと、健太は私の前髪をそつとあげて、おでこに唇を軽く当てた。

「なんちってー」

「ッな…ななな?!?!」

自分の顔が熱くなつていくのがよくわかる。

「真っ赤になつてるー。かわいいー タコー」

う、

完璧にバカにされてる。

「ど、どうせ…タコだもん」

開き直った、私。(笑)

「うそだよ、ごめんごめん…」

急に弱々しくなる健太。

なんか前にもこんな事があつたような…?

「ば、ばか…」

私はその弱々しい声に弱いんだ。

「絶対毎日メールする。寂しいなら電話する…ごめんな」

謝らなくていいよ。

……私決めたよ。

「健太の夢、応援するからね！！絶対毎日メールだよ？」

そう言って笑ってみせた。

応援する。

ちゃんと決めたよ。

私にできる事はそれくらいしかないから…。

「…サンキュ」

そう言って健太も笑った。

健太、健太。

頑張つて、絶対甲子園行つてね。

何年後かに

絶対に応援行くからね。

だから

転校しちゃうときがくるまで

いっぱい思い出作ろつね。

第三二話・不安の解決

「うー…さんむいね」

健太が転校するということを知ってから
もう1ヶ月が経った。

すごく、すごく
短い1ヶ月だった。

もう、12月。

…12月と言えば。

「クリスマスーっ」

「ぐはっ…!!」

いきなり後ろから抱きついてきた光奈。

色気のない声だしちゃったじゃん…（恥）

あ。そういえば…。

光奈に聞きたい事があった。

私は光奈の方をじいつと凝視した。

光奈は

な、なに？と、不思議がっている。

なにつて…。

「やつ…やっぱりさ…その、クリスマスって彼氏と過ごす…べき？」

私はたじたじとしながら言った。

「当たり前じゃんツ！！」

光奈は私の頭を思い切り叩いた。

「い…ツ！！」

痛い痛い痛いっ！！！！！

真面目に痛いからっ（涙）

涙目になる私に対して光奈は軽く、「ごめんごめんと謝った。

痛いよー…。

「で？どうした？今更」

「…いや、なんでもない」

ただ…不安なだけだ。

健太は一緒にいてくれるかな？

「…ふふ」

「…はっ…?!」

いきなり光奈が不気味に笑った。

「どうせ桜羽のことだから、不安とかでしょ？」

な、なぜわかる…?!

「な…なんでわかった…?」

私はすべてを見透かされてるようで恥ずかしくなった。

「カンってやつ」

「…はあ」

なあんだ…。カンが。
良かった良かった。

「まあまあ 絶対クリスマスにラブラブしなね」
笑顔の光奈。
だけどどこか悲しそうな表情をした。

私は小さなため息をもらした。

……光奈は…
まだ私が健太の転校の事知らないって思ってるんだよね。

だから…気遣ってるのかな。

「うん」

私はそれだけ言って、机へと視線を下ろした。

「…桜羽、」

すると、小さな声で光奈が私をよんだ

。

「ん？」

笑顔で上を向いた私。

「けん…、…やっぱり…なんでもないや」

光奈…。

今、健太が転校するよって事言いかけたよね？

「……………知ってるよ、」

「……………え？」

光奈は真顔になって私を見つめた。

「…知ってるから、大丈夫…」

私は真顔の光奈に対して笑顔を向けた。

光奈は私の顔を見て、ふっと表情が緩やかになった。

「…そっか…ごめんね、早く言ってあげたかったんだけど…健太か

ら口止めされてて…」

光奈は申し訳なさそうに言った。

「大丈夫だってー！！ねっ？私健太のこと応援するって決めたんだから！」

私は光奈に本心をぶつけた。

応援したい。

ただそれだけ。

「桜羽…」

光奈はニコツと私に笑った。
それにつられて私も笑った。

「でもさあー…」

光奈が呆れたように口を開いた。

「ん？」

「健太の転校先、たったの三駅でつくんだよね」

…はっ?!?!

「ツえええー!?!?」

私は気づかぬうちに大声をあげていた。

光奈は私の驚きを見て、目をぱちくりした。

「え…もしや…し、知らなかったの？」

「聞いてないよっ!?!」

やばい。泣きそうだ。

だって、普通転校で言ったらもっと遠くない!?

会おうと思えばいつでもあえるじゃん!?!?!

ああ…。

なんか気が抜けた…。

私

私…、

「え…ちよ、桜羽!？」

「よ…よか…良かったあ…、」

気が抜けたからか、私の涙腺は完璧に切れてしまった。

そりゃあ

寂しい。同じ学校にいないなんて。
だけど“県”は同じなんだ。

“市”は違うけど…。

離ればなれってほど

遠くなくて良かった…。

「よしよし〜泣くなあ」

「う〜…」

…良かった、…。

私は安心感でいっぱいになり、涙が止まらなかった。

「あーッ！！お前っ…なに桜羽の事泣かしてんだよ！！」

健太が光奈に言い寄った。

「泣かせてるのはあんたですよー」

光奈は、もちろん対抗。

「え。俺ツ？」

健太はたじたじしている。

それはそれは可愛い態度。

「そーだよっ！」

光奈はギンツと健太を睨みつけた。

そこまですますか（笑）

「ん、もう大丈夫……」

私はそう言って、光奈の制服の袖を引っ張った。

「……………！！」

その瞬間、2人が黙り込んだ。
そして顔をあわせている。

……………な、なに……？

「さっちヤバ可愛い!!」

光奈は目がハートになっているように見えた。

……はっ!?

「ちょっとその泣き顔で袖をちょい、なんてされたら……」

健太が続けた。

ちよ、2人とも…変。

「俺ダメ…クリスマス大丈夫かなあ…」

いきなり意味の分からない事を口にした健太。

ダメ?クリスマス?

なんだ???

「ダメだからねっ!!」

光奈が健太を横目でみた。

「わかってる、大丈夫」

健太は光奈にピースを向けた。

私の頭は“？”でいっぱいだった。
な、なに？？

よくわかんない…。

「ふう…頑張るよ。んで、桜羽！…クリスマス開けといてな？」

ふと私の方を笑顔で見た健太。

…クリスマス…！

「…あ、はいつ…！」

私は即答した。

嬉しい…。

さっきの不安が一気になくなった。

良かった。

なんか今日はいろいろ安心した。

健太の転校の事。

クリスマスの事。

「あー…良かった どこ行くかは秘密な」

健太はそう言って私に笑いかけた。

約4ヶ月後には

もうこの笑顔を毎日のようには見れないんだ…。

そう考えると胸がチクンと痛んだ。

「うん。楽しみにしとくね」

クリスマス。

好きな人と…。

彼氏と…。

健太と…。

初めてのクリスマス…。

私の頭はクリスマスでいっぱいだった。

きれいなきれいな

思い出しになるよ。いな。

第三二話・不安の解決（後書き）

まだまだ

終わりには

なりません…。

道のり長いです…。

ああ（T—T）

もう少し

付き合っていただければ幸いです（*・艸、）

第三話・プレゼント（前書き）

長くなってしまいました…。

第三話・プレゼント

【明日の朝の10時に
桜羽んち行くな。
待ってるよー】

そんなメールが来たのはクリスマス前日。

つまり今日はクリスマスイヴ。

もう夜の11時をまわっている。

明日…。

あと少しで健太とあえるんだ。

…早く会いたいな。

【りよおーかい
待ってるよ (^w^)]

私はゆっくりと返信を打って、送信ボタンを押した。

会いたい。

早く……早く。

明日なに着ていこう。

プレゼントはこの間クリスマス前に選びに行った。

ちゃんと渡せるかな…？

そんな事ばかり

考えているうちに

私は深い眠りについていた。

くくく

「……ん、」

メールを知らせる着信音で私は目を覚ました。

…あれ…私寝てたんだ…。

外はもう明るい。

朝…。

早く起きなきゃなあ。

ふああっと大きなあくびをしながら
メールの受信フォルダを開いた。

【ついたよ（＾o＾）】

………へっ?!?!?!

差出人は健太。

ついたって…。

今何時…、

ふと時計に目を向けるともう9時50分になっていた。

寝坊したっ!!!

私はベッドから飛び起きて、窓から外を見た。

外には健太が白い息を出しながら立っていた。

「け、健太!!」

私はできるだけ小さな声で、だけど聞こえるような声で健太を呼んだ。

その声に気づいて健太は私の方を見た。

にこっと笑って私に手を振っている。

「ごめん、ちょっと待って?」

そう告げると健太は私にピースした。

早く支度しなきゃ!

クローゼットに手を伸ばし、洋服にすぐに着替えた。

寒さなんて二の次だ。

「よし、」

朝ご飯食べてる暇ないし…。
顔洗って歯磨きして、出ちゃおう。

「ごめんね!!」

私が外に出たのは10時15分だった。
健太を30分近くも待たせてしまった。

「大丈夫だよ」

それなのに健太は私に笑顔を見せた。

優しすぎるよ…

「…ありがとう…」

そう言っつて健太の手を無意識にとっていた。

「桜羽…?」

健太は驚いていた。

そりゃそうだろう。

滅多にこんな事私からしないんだから。

でも驚いたのは私もだった。

健太の手、すごく冷たい。

こんな…、30分近くも待たせて…。

冷たいはずだ。

「…ごめんね、……」

そう言いながら私は健太の手を懸命に自分の手で暖めた。

「桜羽？大丈夫だよ？」

健太はいきなり手を握り返してきた。

すると

さあ行くかつ、と歩き出した。

健太、優しすぎるんだよ。

「…ばあか」

ポソツと私は健太の背中に呟いた。

「ん？なんか言った？」

健太には聞こえてたみたいで、後ろを振り返った。

「…大好きだったの」

私はそう言っただけを向いた。

思ったよりも、恥ずかしい…。

「……ばあか」

健太はちらつと八重歯を見せて笑った。

「…、」

そんな顔反則だ。

心臓がおかしくなる。

しばらく歩くと、見覚えのある道。

……どこいくんだ？

「ねえ、健太どこ行くの？」

気になって気になって
健太に思わず問いかけた。

「ついたよー」

と、健太。

顔を上げると、そこは…。

「み、光奈の家？」

見上げた先には一軒の家。

表札には“金本”の文字。

な、なんで？！

「あ、来た来た」

光奈が玄関からでてきた。

き、来た来たっ…て。

「桜羽たち、入っていいよ」

光奈は私たちに手招きをした。

私は何がなんだかわからなくって、放心状態。

なんでっ!?!?

なんで光奈の家!?!?

光奈は「部屋は二階のすぐ右だから」と言って、リビングに向かった。

私たちは言われるがままに、光奈の部屋に向かった。

ガチャ

私はドアを開けた。

「ぎゃあっ!?!?」

「うおわあっ!?!?!」

部屋に誰かいた。

それに驚いて、思わず悲鳴をあげた私。

に、プラス

部屋にいた人の悲鳴。

「な…なんだ、綾野か」

……ん？

よく、その人を見てみると…。

「ま、麻樹…」

光奈の彼氏だった。

「さわあー」

部屋の、私の視界からは見えないところから瑠架がでてきた。

「な…なんで？え？」

「まあ、まあ」

混乱状態の私に、健太はニカツと笑った。

よくわからないまま

部屋へ入ると、知らない男子が一名。

「……、？」

誰？この人…。

じいつと私はその人を凝視した。

目がくりつと丸くて、

けっこう童顔。

女の子みたいな顔。

髪の毛がかすかに茶色い。

そして、背が…低い？

「瑠架…なんか俺、超見られてる…。」

声は、見かけによらずけっこう低いな…。

「あ、そっか。桜羽知らないよね。この子」

瑠架は私の手を引っ張って、その人の前に立たせた。

「ほら、悠ゆう自己紹介しなよ」

…ゆ、ゆう？

瑠架の声により、その人は立ち上がった。

「秋田あきた悠ゆうです！」

いつも健太先輩にお世話になってます！！
瑠架の彼氏ですっ！よろしくですっっ！！」

け、健太先輩？

………てことは、

「い、一年生？」

「そだよ」

どつりで見たことないわけだ。

「え、あ…じゃあ秋田くん…でいい？呼び方
だってね。」

瑠架の彼氏だし
私基本的に男子って苗字だし…。

「悠でいいよ」

瑠架が私に笑顔を向けた。

「えっ、」

私はたじたじする。

あんま…

よろしくないのでは？

「あ、全然いいっすよ」

秋田くんも承諾。

…でも、呼び捨てはちょっとな。

「じゃ、じゃあ…悠くん…」

「「プッ」

瑠架と彼氏さんがふいた。

「な、なんだよう…」

なんか変ー…？

「いや、可愛いなて」

瑠架が私をぎゅっつと抱きしめた。

「わっ、」

「こらー！！俺の桜羽！」

健太が瑠架の頭を軽く叩いた。

「いたッ」

「ちょ、健太先輩！。瑠架に手あげないてくださいよっ」

悠くんがさらに入ってくる。

「俺のこと忘れてない？」

麻樹が冷ややかな目線で私たちを見た。

……………忘れてました。

ガチャ

「待たせてごめんねー」

光奈が重そうなおぼんやら箱やら…いろいろもってきた。

「お疲れ様。光奈」

「絢斗も手伝ってよー！！大変だったのよ？」

光奈と麻樹は相変わらず仲がいい。

…、

チクン、と心が痛んだ。

光奈と麻樹はこのままあと一年ちょっと一緒にいられるんだよね。

でも来年になったら…。

私の隣に健太はいないんだ…。

なんだかクリスマスなのに嫌な気分襲われた。

「よし、じゃあみんな揃ったことだし…」

光奈がゆっくりしゃべりだした。

そうだ。

すっかり目的を知るところを忘れていた。

「メリークリスマス」

「め…メリークリスマス!!」

私は光奈に言い返した。

「あと…」

光奈はなにかを言いかけて私の方を見た。

「お誕生日おめでとう!!!!」

私以外のみんなが私に向かって言った。

「……………え…?」

た、誕生日…？

「3日早いけど」

そうだ。

健太の転校とかですっかり忘れてた。

12月28日。

私の誕生日…。

「桜羽ごめんな。俺28日用事あって会えないから…
無理言っつて今日みんなに集まっってもらったんだ」

……健太の、考え…？

「う、嬉しい…ありがとう……」

びっくりした。

たぶんこんなびっくりしたのは、
転入してきたころのサプライズ以来だ。

あの時は那音が…、

……那音が、

「……、」

そうだった。

あの時は那音が私のために……。

って……。

なに那音のこと考えてるんだろ。

隣に健太がいるのに。

……失礼じゃん。

そんな自分にイライラした。

光奈はケーキを
ふたつ持っていた。

……ふたつ？

一個には

“happy birthday桜羽”の文字。

もう一個には

“元気でね健太”
の文字。

「プラス、健太のお別れ会なんだ」

光奈と麻樹が目を合わせて笑った。

「え、まじ?!」

目をまんまるにして
驚いている健太。

「わ…嬉しいわ。サンキュー…」

そのあと私たちはまだ昼間だと言つのに、
ケーキを食べまくった。
他愛もない話をしながら。

「あ、もう2時じゃん。」

ふと、悠くんが口にした。

「ん、本当だ…じゃあ瑠架たち行くね」

瑠架たちは2時30分から、デートらしい。

バイバイと、手を振って瑠架と悠くんは行ってしまった。

「んー、じゃあ…私たちも行くからさ」

光奈が立ち上がった。

「あ、うん!」

私は返事をする、光奈たちと外にでた。

「よし、行くか」

健太がそう言って歩きだそうとしたときだった。

「あ、桜羽!!」

光奈が私を呼び止めた。

「誕生日プレゼント」

そう言っただけ渡された。ピンク色の包装紙で包まれた箱を手渡された。

「あ、ありがと!!」

「瑠架のも一緒に入ってるからね　じゃあね」

そう言っただけ光奈たちは歩いて行った。

「…なんだろう？」

私は包装紙をきれいに開けていった。

小さな3つの箱があった。

………3つ？

一つには“瑠架”

もう一つには“光奈”

と、書いてあった。

だけど、もう一つは名無し。

疑問に思いながらも、まず瑠架の箱を開けた。

「…わ、あ…！！」

私が好きなの、星のモチーフの可愛いネックレスだ。

「桜羽、星好きなの？」

健太が私に問いかけてきた。

「う、うん。好き！！」

質問に答えながら、次は光奈からの箱を開けた。

「…可愛い…」

箱の中には二つのハート型のキーホルダー。

健太と…ってことかな？

そう思った私は健太に水色のハートの方を渡した。

私は、ピンク。

「え、俺？…ハート…」
あっ！！

そうだよねー。

男子がハートって…。

「つけないの…？」

つけないかな？

少し恥ずかしいかな？

心配する私に健太は笑いかけた。

そしてポケットからケータイをだして、器用につけはじめた。

「ん！！オツケー？」

本当に…優しすぎ、

「オツケー！！」

私は満面の笑みで健太に言った。

あ、

あと一つ、名無しさん。

ガサガサと、箱を取り出し、開けてみた。

……え……？

その瞬間、私は硬直した。

箱の中には、またもや星のモチーフのもの。

…キーホルダー…、

それにプラス、一通の手紙。

“桜羽へ”

見覚えのある字だった。

「桜羽…どした？」

硬直している私に向かって健太は問いかけた。

「あ…うん、なんでもないよ！！行こっか」

私は動揺を隠すようにして、健太に言った。

なんで？

なんで？

…なんで…？

「あ…うん。桜羽さ今日何時まで平気？」

「えと…連絡すれば何時くらいでも大丈夫だけど、基本は9時くらい…」

心臓がドクンドクンと音を立てる。

差出人があきらかにおかしかった。

いや…。

でも、もしかしたら違つかもしれない。

字だけで判断はできない。
そっだよ。

違う。絶対に違う…。

「んー…うちくる？」

「へっ?!」

突然の健太の言葉に
言葉を失う私。

「や、いやなら…」

「お、おじゃまします…!!」

否定されるまえにオツケーした私。

まあ…、

健太といれるなら

どこでもいいから…。

って

なに恥ずかしいことを…!!

「そっだよ」

ん？

そこ？つて…。

まだ光奈の家の近くなのに…。

「金本んちの、5件先」

「知らなかった…！！」

そんなに近所だったんだ。
なんかうらやましい…。

「おじゃまします…。」

健太の家は普通の一般家庭の家よりは全然広い。

「あ、うち今人いねーよ？」

「そ…そなんだ」

つてことは…！！

よくあるシチュエーションNo.1…。

“彼氏んちに2人きり”
ではないですか…！！！！

いきなり緊張してきた。
ヤバい。心臓がっ…!!

「俺の部屋で適当に座ってな？二階上がったすぐだから」
そう言って、健太はキッチンに入っていった。

「あ、はいっ」

かちこちな私。
だって、2人きりだとは…。

健太の指示通りに私は健太の部屋に向かった。

健太の部屋は水色と白中心で、かわいらしかった。
てっきり、男子の部屋って黒とかそっち系かと思ってたから…
びっくりした。

適当に座っててって言われたけど…。
どうしよう。

ソファーあるけど、いきなり座るなんて、なんか失礼だし…。

私は悩みに悩んだ結果、床にしいてある、じゅうたんの上に正座して待っていた。

心臓が落ち着かない。

それは二つの理由。

ひとつは…

健太の家だから。

ふたつ目は…

さっきのプレゼント。

ガチャ

「待たせてわりーな」

「ッ?!」

いきなり健太が部屋に入ってきた。

「なんで床に座ってたよ」

笑いながら頭をポンと叩かれた。

「だ…だつて…」

恥ずかしいじゃん。

いきなりソファーに座るなんて図々しいじゃん。

「ほら、ソファー行きな？」

「う、うん」

私はまだたじたじしながらも、ソファーに座った。

「はい、」

健太はココアを差し出してくれた。

私が大好きなココア。

「あ、ありがとっ…」

白い湯気が天井に向かって泳いでいく。

私はマグカップに口をつけた。

ココアがゆつくりと、喉を通る。

「ん…あつたかい」

「ココア好きなんだろう？」

「…へ、」

ふいに言われた一言。

なんで知ってるんだ？

「なんで？なんで知ってるの？」

私は問いかける。

「前に桜羽んち行ったときに、ココア飲んだじゃん」

あ、そっか。

納得、納得。

「あ…そうだ」

「？」

健太が自分の部屋の机の中をあさり始めた。

すると、くるつと私の方を向き、ニコツと笑った。

「メリークリスマス」

そう言って、箱を渡された。

「あ、ありがとう…!」

嬉しい。

なんだろう？

と、その前に……。

「私も…」

ゴソゴソと自分のかばんをあさる。

…わ、渡すの恥ずかしい。

「め…メリークリスマス」

そう言って私は健太に少し大きめの袋を渡した。

「え、くれんの？サンキュー…!」

健太はもらええると思っていなかったらしい。

「開けてイイ？」

ワクワクした表情で私に聞いてきた健太は、小さな子供みたいだった。

「ん、でもたいした物じゃないよ？」

ガサガサと健太は袋を開けた。

「…マフラー？」

「う、うん…」

気に入らなかったかな…？

「嬉しい！！ありがとう」

ニカッと笑って私の髪の毛をくしゃくしゃやってした。

よかった。

喜んでくれた。

「風邪ひいて野球できなくなったら大変だから…って思ってた…。健太いつも手冷たいし」

少しでも暖かいように。そう思って私はマフラーにした。

色は黒。

ガラは端っこに少し白いラインが入ってる程度。

男の子でも身につけられるような、マフラー。

健太からののはなになかな？

私はゆっくり箱を開けた。

「え…あ…」

指輪がチェーンについて、ネックレスになっているものだった。

「う、ごめん…どんなのがいいかとか…まじわかんなくて…」

おどおどしている健太。

「…嬉しいよ。ありがとう…」

健太、一生懸命選んだんだろうなあ。

ありがとう。

すごく嬉しいよ。

「ほ…ほんと？」

健太が自信なさげな声で私に聞いた。

「ほんと」

満面の笑みで健太に言った私。

「…桜羽、好き…」

「…へ…？」

いきなり言われた言葉に理解ができない私。

…好き…？

いきなりどうしたんだろ？

「まし…好き…大好き」

「…うん、…私も」

なんだろう。

なんか今一瞬、「私も」って言葉が詰まった。

……気のせい？

だよね……。

「……桜羽」

「ん？なに……に……」

ちゅ、

唇が重なった。

ほんの一瞬のこと。

「……っ！！？！」

ふいをつかれて、恥ずかしさを隠せない私。

いきなりキスされるなんて思わなかった……！！！！

「すきあり」

健太はいじわるな顔で私に言った。

う…。

それから…。

9時ごろまで転校のことや、学校のこと、
野球のことや私の転入前のことなど
いろいろ話した。

「楽しかった。ありがとう。じゃあまたね」

そう言って私は健太に手をふった。

送ってく

健太はそう言ってくれたけど、

最後の最後まで頼るわけにはいかない気がして、大丈夫だ、と断っ

た。

「…ふう」

つかれた。

って言葉が今一番当てはまる。

楽しかった。

は、その次くらい。

1日ドタバタしてると、こんなに疲れるものなんだな…。

「ただいまあ…」

家につくと、まだリビングは明るかった。

私は靴をぬいで、リビングにそのまま向かった。

「あ、お姉ちゃんおかえりー」

「た、ただいま」

リビングには美羽の姿しかなかった。

「お母さんたちは？」

「デートだってさあ」

呆れたような声で呟いた美羽。

この歳になってまだデートするくらい、
ラブラブなんだなあ。

そんな家庭が、私は将来ほしいと思った。

「美羽は？彼氏は？」

美羽も今日は彼氏と過ごすって言ってたよなあ。

「ついさっき帰ったよー」

しらっとした顔で美羽は答えた。

「…ふうん」

そうか。よかった。

美羽の事だからケンカでもしてクリスマスに
会ってないかと思った。

私は一安心すると、二階の自分の部屋に向かった。

バッグをぼん、とベッドに投げた。

投げている途中に気づいた。

やばっ。

チャック開きっぱなしだ！！

気づいたときにはもう、遅かった。

衝撃で、バッグからはいろいろなものがでていた。

それを片付けるために私は飛び出たものを一個一個手にとる。

ふっと、私の手の動きは止まった。

そっだ。

忘れていた。

いや、正確に言えば無理やり忘れていたのかもしれない。

「…、」

星のキーホルダー。

“桜羽へ”

手紙。

私はゆっくりと手紙へと手を伸ばした。

そして

ゆっくりと手紙を開いた。

“桜羽へ

誕生日おめでとう

桜羽に会えてよかった。

俺、また律と別れた。
バカだよな

桜羽の事傷つけてまで
選んだ道なのに…

今は健太とうまく

やってるよな。

…今更遅いよな。

だけど今更わかった。
自分勝手にごめん。

俺は、

律よりも

桜羽が大事だったよ。
健太と仲良くやれよ？
じゃないと、

俺の

諦めがつかないから…

いきなり本当ごめん。

返事なんて求めないか
ら、知っておいて？

桜羽が、好き。

谷岡那音”

「……………」

私はただただ黙って

手紙を見つめた。

…なによ。

なによ。今更…。

こっちの気持ちも知らないで…。

なに考えてるの…？

やっと

やっと

健太を…健太だけを見ることができたのに。

なんで私の気持ちを崩していくの？

ねえ、

なにが目的？

もう

那音のこと、信じれないよ。

答えてよ…

答えてよ、那音。

今の私に“答え”なんてないんだから。

「健太が好き……、」

私は健太がいてくれたから……立ち直れた。

健太のおかげで私はまたちゃんと笑えるようになった。

健太が……、

健太がつ……！！

なのに

なんで？

なんでこんなにも

那音が心にひっかかるの？

私の心からちゅと出て行ってくれたのに。

…ずるい。

那音はずるいよ。

「…那音っ…」

私は小さな小さな声で
呟いた…。

第三話・プレゼント（後書き）

またまた急展開ですね。

那音も

なにを考えていることやら…。

これからの桜羽の気持ちの変化を

お楽しみいただければ

光栄です（*、艸、）

第二三話・side那音・心

「なあ、那音」

「……ん？」

俺に話しかけてきたのは、絢斗だった。

「クリスマスは、神崎と過ごすよな？」

…クリスマス。

もうそんな時期か。

あと…二週間？

「…わかんねえ」

律は、彼女だ。

桜羽と別れてからずっと今まで付き合っている。

「わかんねえってな！。彼女だろ？あ。なに？誰か違う人見つけたの？」

絢斗はさらっと言った。

だけどその言葉に俺は反応した。

「わかんねえの……」

自分でわかるほどの、弱々しい声。

情けない。

「おい……、どうした？」

普段しないような声を出したからか、絢斗は少し慌てた様子だった。

「律が……好きなんだよ。だけど……」

最初、桜羽と別れて、律と付き合い始めたときは律の事で頭がいっぱいだった。

けど

時が経つにつれて、感情に濁りがでてきた。

笑ってる桜羽を見るのが、つらかった。

俺はあんなひどいことしたのに、笑ってられる桜羽はすごいと思っ
た。

心から…

でも桜羽は今、俺を忘れて、健太と付き合っている。

俺を……忘れて…。

なんでだ。

なんでこんなにも心がズキズキするんだ。

俺が別れる原因を作ったのに。

俺のせいで別れたのに。

今の俺には律がいるのに。

何回俺は同じ事を繰り返し返せば気が済むんだ。

…また…

裏切るのか？
律のことを…？

そんな勇気、俺にはもうない。

第一、また桜羽を困らせるわけにはいかない。

今は桜羽は健太が好きなんだ。

だから俺が入るスキなんてない。

ふたりのあいだに、隙間なんてないだろうから。

健太は桜羽に一目惚れだったっけな。

そんな…ずっとずっと俺より長い間桜羽を見てきた健太を裏切るわけにはいかない。

「…綾野、か？」

ポツリと絢斗が呟いた。

俺はゆっくりと首を縦にふった。

「まあ…今は健太がいるしな…」

その通りだ。

今になってなにやってんだ。

「でもよ、那音」

「……なに」

急に絢斗の声が変わった。

「お前ハッキリ言って、軽いんじゃないか？」

その言葉は、俺の心臓に突き刺さるようにして、俺を痛めつけた。

そんなの…わかってる。

「……………」

俺は返す言葉がなかった。

周りから見れば、そういう印象が強いだろつ。

女友達が多いし、元カノだってけっこういる。

周りから見れば

“軽い”

そう思われて当然だ。

「俺…けっこう長い間お前といるけどさ…
お前フリーの時期ないだろ？本気で好きでもないのに告られたら付き合えるんだろ？」

「…ちが、！！」

俺は必死に否定しようとした。

「お前は、結局ひとりになるのが嫌なんだろ？」

「……………」

ここまで絢斗に真剣に話をされるのは、初めてだった。

ひとりが嫌…

違う。違う。違う。違う。

「…そんな軽い気持ちで桜羽と付き合ってたわけじゃない…!!」

それは、ハッキリ言えるんだ。

好きだった。

好きだから

桜羽を抱きしめた。

桜羽にキスした。

桜羽………桜羽、？

「まだ…綾野が好きなんじゃん、那音」

「…え？」

「普通、一番に思い浮かぶのは神崎でしょ？」

あ…。

「…、」

…好き？

「頑張れ」

絢斗は笑ってそう言うと、俺のもとを離れた。

でも…。

律は…？

また泣かせるのか？

もう

何回繰り返したんだ。

律と。

俺は

律が大好きだった。

ずっとずっと好きでいれるって、初めて思えた人だった。

だけどな、律。

それを超える人に出会ってしまった、そう言ったら、律はどつする？

俺を憎むかな？

俺を嫌いになるかな？

「…それでも…」

それでも、俺は。

心の奥にいた大切な人に気づくことができたんだ。

今思えば

律が“キスして”って言っても
俺は、できなかった。

いや、できなかったんじゃない。

わかんないけど
しちゃいけない気がすごくしたんだ。

それはたぶん、別れてからも、桜羽が俺の心の中にいたから。

俺が好きなのは、桜羽……。

今やっと確実にできた。

「那音…？」

「……………律」

今か？

今、律に言うのか…？

でも…。

律、泣くだろっな。

“別れよう”なんて言えない…。

「ねえ、那音」

律の声にハッとし、律の方を向いた。

俺と目があうと、にこっと笑った。

「別れよう」

……………は？

「…り、律…？」

俺はいきなりのことくに、戸惑いを隠せない。

「…好きだよ？」

律が震えた声で俺に向かって話し出した。

「でも…那音、私の事見てない。好きだけど、…もう終わりにしよう」

俺は黙って聞いていた。

「りっ……」

なんで女って、男の気持ちがわかるんだろう？

「ちゃんと、気持ち伝えてあげて？たとえ叶わなかったとしても絶対に諦めないで……？ずっと想い続けてあげて」

そう言った律は、いつもとは違った。

キラキラしてて。

眩しくて。

別れるときはいつも泣いてたのに……。

律は、強いな。

「いめん…律」

「……………ばいばい」

そう言いつつ、律は教室をでようとした。

「律ッ…!!」

そんな律を俺は引き止めた。

「律の事…大好きだった。今までごめん。…ありがとう」

俺がそう言っていると、律はにこっと笑って

「私も」

そう、呟いた。

さよなら。律。

もう、俺は迷わない。

「…桜羽に？」

「うん。…ダメかな」

俺は光奈に、桜羽の誕生日プレゼントを渡してほしい、と頼んだ。

直接は渡せない。

……桜羽は健太が好きなんだろうから。

むやみに突っ走れない。

「わかった。渡しとく。……那音」

「……なに？」

「桜羽の事傷つけるような事だけは、絶対しないで…?」

光奈が俺の瞳に向かって、まっすぐに言った。

「おっ」

ねえ、桜羽。

俺は一通の手紙に

全ての気持ちを託すよ

だから

伝わると…いいな

俺のこと好きになれ

なんて

無茶な事は望まない

ただ

気持ちを知っていて？

桜羽が

大好きなんだ。

桜羽がいることが

俺にとっての全てなんだ

第三話・side那音・心(後書き)

なあ…！

このあとが

戦いです……！

第二四話・距離

「桜羽？」

「…あつ、ごめん…何？」

光奈の声で、我に返る。

「席替えだつてさー…」

もうあの日から3週間が経った。

今、私は…。

私は健太と付き合っている。

「…席替え？」

「うん。なんか今回は先生が決めるらしいよ?…あ、ほら来た」

席替え…。

「桜羽と離れちゃうな」

寂しそうな声で健太は私に向かって言った。

「……………うん、」

……………離れちゃう。

やだな。

あと少しで健太は転校なのに…。

離れたくないよ…。

しばらくすると、先生は黒板に席順を書いた。

「はい、移動開始!!」

私の席は真ん中あたり。

隣の男子はクラスでけっこううるさい子。

別に嫌いではない。

でも…

健太がよかったな。

健太は私とは全然違うところにいた。

あーあ…。

残念な気持ちでいっぱいなまま、私は机を動かした。

その日は、何事もなく1日が終わった。

でも、ちらちらと見てしまう人がいる。

那音だ。

あんな手紙をもらって、私は平然としていられる人ではない。

「…!!」

目があっちゃった…。

すぐさまそらした私。

那音の席は、健太のそばだった。

「…はあ」

私は家について、すぐにベッドに倒れ込んだ。

那音に…返事返すべき？

もう三週間経っちゃったよ。

なんで、今更。

あの日から私は那音のことばかり考えていた。

健太がいるのに。

健太が大切なのに。

なんで…心が揺れるの？

私は健太が好き。

那音なんか好きじゃない。

那音なんか。

……。

「…好きじゃない……」

自分に言い聞かせないと、自分が壊れちゃいそうなんだ。

）
）
）

いきなり、ケータイが騒がしく、鳴り始めた。

「誰…」

電話だった。
着信は、

【健太】

一瞬

那音じゃないか、って期待した。

そんな自分に嫌気がさす。

「もしもし？」

『あ…桜羽。俺』

健太から電話なんて、めったにないから嬉しい。
電話だと、健太の声が少し低く聞こえる。

「うん。どうしたの？」
「なにか、急な用事だろうか。」

『…「じめん」』

え…？

なんで、謝るの？

もしかして、別れ話…？

「……………」

私は黙ることしかできなかった。

怖い。

『…いきなりごめんな？ただ…声聞きたかっただけ…なんだよね…』

「……………」

私が予想していた言葉とは全く違う言葉が健太の口からでた。

『ご、ごめん。切る？』

「だ…大丈夫…嬉しい」

よかった。

よかった。

なにやってんだ。

健太を…信じなきや。

『……………桜羽はそ』

「ん？」

『優しいな』

いきなりの言葉に戸惑う私。

「や、優しくないよ…！」

『はは…本当…好きだよ』

なんか、今日の健太変だ。

なにかあった？

「うん…私も好きだよ」

ごめんね。健太。

私、なにも気付かなかったよ…

『あはは、知ってる。…じゃあ…また明日な』

「うん。ばいばい」

『声、聞けて安心した』

「…ばあか」

『じゃあな』

「…うん」

健太から電話を切った。

私は、変な違和感を覚えた。
いつもと様子が違った健太。

…大丈夫かな…。

少し心配をしながらも、私はケータイを机に置いて、眠りについた。

……

「桜羽」

私を…呼んでる？
男の子の声だ…。

「健太？」

後ろを向くと、そこは真っ暗だった。

やだ。怖い…。

「健太。健太…助けて」
怖いよ。
ここはどこ？

「……………桜羽……………」

私を呼ぶ声は近くなる。

「……………け…んた……………」

ではなかった。

「……那音……」

那音はにっこりと笑った。

「幸せになれ」

那音はそういうと、すうつと透けていった。

「やだ…やだっ、行かないでよお…!!」

行かないで。

行かないで。

ひとりにしないで。

「健太と…幸せにな」

消えかけた那音が私に向かって言った。

涙を流しながら。

「私が好きなのはっ…!!」

…
「お姉ちゃんご飯だよ」

美羽がドアを開けた音で私は目がさめた。

夢……

「…うん、今行く」

なんだったの？

「私が好きなのは…！！」

私は那音に何を言いかけたの？

「…桜羽」

なんでそんな優しい声で私を呼ぶの…？

ねえ、那音。

「健太…」

「ん？どした」

私は学校の帰り際に健太に話をかけた。

「…私…、」

私はそこで言葉をつまらした。

やっぱりまだ

私には言う勇氣がない。

気持ちが揺らいでるなんて…。

…言えないか。

「気づいてたよ」

「
…え？」

気づいてた…？

「今、桜羽は…那音が好きなんだろう？」

下を向く、健太。

「違うよっ…!!」

そうじゃない。

そうじゃないの。

好きなのはわからない。

どっちが好きなのかわからないの…。

「…桜羽…俺は、桜羽が好きだよ？だから桜羽が幸せならいいんだ
よ」

「……ち…ちが、」

「ムリすんな」

…そっか

そっだよね。

考えてみれば、好きな人で迷ってるやつとなんか、付き合ってるんじゃないよね…。

嫌だよね。

ちゃんと気持ちハッキリさせよう。

「健太…距離置きたい」

私が小さい声でそういうと、健太は私の頭をなでた。

「わかった」

…。

こんなときまで優しい健太。

私は健太を傷つけたくはないよ。

だから

距離を置く。

そして私は…。

自分の気持ちに白黒をハッキリつける。

“自分”の気持ちを。

第二五話・好きじゃない(前書き)

なんちゅー

タイトル・・・;

短めです。

第二五話・好きじゃない

「距離置きたい」

健太にそう告げてから、もう1週間が経った。

私は…まだ答えがでていなかった。

いくら考えても考えてもわからない。

健太は……。

私が那音と別れて、傷ついて。

そんな時に

「利用してもいい」

そう言った。

最初は、ただ気になってただけだった。

だからこんなに健太が愛しくなるなんて思わなかった。

お兄ちゃんみたいな健太。

たまに見せる、子供みたいな表情。

私の脳裏にしっかりと焼き付いてるよ。

いつでも健太は優しいから、きっと私の気持ちにすぐ気づくのかもね。

「私が好きなのは…!!」

…誰？

誰が…好きなの？

せめて…

せめて夢の中で、答えが聞けてたら。

「私が好きなのは…!!」

その続きは

自分で決めなきゃいけないの…？

那音は…

優しくて

だけど女好きで。

寝言で

「さわ」

そう笑顔で呟いた那音に恋をした。

今思えば、一目惚れだったのかもね。

気になってたから

寝言言われて、完璧にはまっちゃったのかもしれない。

いつでも私のこと考えてくれた。

不安になると、いつもそばにいてくれた。

……それは健太も。

だからわからなくなるの。

「健太…那音…」

私は……

まだ答えをだせそうにないよ。

「…おはよ」

「……え……」

私を見て、言った人。

那音。

「お…おはよ…」

何ヶ月ぶりに話をしただろう。

久しぶりに話すから
すごく緊張する。

「あのさ」

那音は私の席の前に立った。

迫力があって、少し怖い。

「俺…よく考えてみたら、お前の事好きじゃねーわ」

「……………え……………」

那音の口からであることを予想しなかった言葉に心臓がドクンと動いた。

「今更じめん。…じゃ」

そう言うと、那音は自分の席についた。

「…なに……………」

「お前の事」

そんな

「好きじゃねーわ」

そんな言葉で……………

終わらせられるの……………？

私がどれだけ悩んだと思ってるの…？

そんな…そんな軽い気持ちなら。

…いらなかったよ。

那音……。

……那音。

なんなのよ……。

「嫌いって言うてよ…」

好きじゃねーわ

じゃなくて

嫌い

そのほうが
心が楽だと感じた。

第二六話・真の優しさ

「好きじゃねーわ」

那音からそう言われた日からずいぶん経った。

あれから私は何度かメールをした。

だけど、全部ムシされている。

なのに

私はまだ答えが出せずにいた。

那音にあんなこと言われたのに、なんだか
まだハッキリしない。

モヤモヤする。

そんな自分にイライラする。

「……………健太……………」

健太、なにしてるかな？

「……………那音……………」

なんでだろう。

なんで那音が思い浮かぶんだろう。

あんな軽い男、

「……………好きじゃない……………」

私が好きなのは……………。

どうしても、この先がでない。

「桜羽、帰ろ！！」

「あ…うん、待って」

瑠架に呼ばれて、私は急いでカバンに物をつめこむ。

よし、っと。

「行こうか」

「んー」

いつもと変わらない帰り道。

瑠架といろいろな話を話す。

だけど瑠架も、光奈も那音と健太のことには触れてこなかった。

ふたりなりに気遣ってくれてるんだなあと思うと、なんだか嬉しかった。

「…あゝっ…!!…!!」

しばらく歩いて、声をあげたのは私。

「どしたあ？」

不思議そうに私に問いかける瑠架。

「…課題のプリント忘れてきちゃった…」

なんで今更思い出すんだろ。

「えー？大丈夫じゃない？」

それがダメなんです。

なぜかって？

もう提出期限が二日過ぎてているから…。

流石に出さなきゃ成績に響く…!!

ただでさえ頭悪いんだから…!!

「ごめん瑠架、先帰ってて!!」

私は瑠架にそう告げると、全力で走り出した。

「!頑張つてー」

最悪だ。

もーッ!!!!!!

「はあ…はあ…う」

やばい。

走りすぎて、気持ち悪い。

う、とか…。

あんな声もう二度と出せないと思う。

私はゆっくりと学校に入っていた。

教室が見えると、少し小走りした。

やっとついたー…。

……あれ？

電気がついてる。

誰か、いる？

そう思った私は足音が聞こえないように、ドアの前にしゃがんでドアに耳をあてた。

「…那音はさ…」

小さいけど、聞こえる程度の声。

…麻樹の声。

「那音」って言ったよね。

那音がいるの…？

私は少し体を上げて、ドアの隙間から教室を覗いた。

「っ…」

那音と麻樹がいた。

私は入ることができず、ただただ固まっていた。

「…いいのか？」

麻樹が那音に問いかける。

「いいんだって。桜羽には…健太いるし」

私…の、話し…？

「…だからって…お前好きなんだろ？」

「…好きに決まってるんだろ」

……え？

な…なんで…？

「好きじゃねーわ」

あの言葉は…？

私は頭の中が混乱していた。

「じゃあどうして…！！お前初めてだろ！？ここまで本気になったの…！」

麻樹が取り乱している。

声を張り上げてはないからそこまで恐くない。

「……………」

那音は黙り込む。

ドクン、ドクン…

私の心臓は速くなっていく。

「なんとか言えよ…！」

「好きだったってんだろ?!」

泣きそうな、震えた声が聞こえたような気がした。

「でも桜羽は今、健太がいるんだよ。そんな簡単に突っ走れないだろ…。」

俺だって…考えてるんだよ。バカなりに。」

「…けどっ、」

「俺は」

那音の声が一気に真剣になった。

「桜羽が幸せなら」

それでいい」

「……………ッ、」

私はその言葉を聞いた途端、涙がでそうになった。

那音は…。

那音は私のこと考えてくれてたんだ。

一番に考えてくれてたから…突き放すような言葉や行為をしてたんだ。

ごめんね…那音。

気づかなかったよ。

…気づけなかった…。

「俺と別れてから、桜羽は健太とちゃんと付き合ってる。けど…

俺のせいで…俺が手紙渡したせいで桜羽たちがおかしくなってるんだよ。

おかしくしたのは、俺。俺なんだよ。後悔してんの」

「……………那音……………」

麻樹が那音の頭に手をのせた。

「桜羽がツライとき…そばにいたのは健太だ。だから俺は……………必要ない」

「…んなことねえよ」

「俺が気持ちハッキリしねえから……………」

那音は自分を攻めている。

那音…。

那音違うよ。

たしかにつらかったよ？
だけど

「必要ない」なんて、考えないですよ。

言わないでよ。

私にとって那音は必要だった人だよ？

那音……。

「……初めて……他人の幸せを心から願えた」

「……うん」

「好き……すげえ好き」

「……うん」

「……だけど俺は」

「……もういいから……」

「……俺……」

「那音！！もういい」

麻樹が那音に怒鳴った。

私は目をこらして那音を見た。

那音の、きれいな大きな瞳から一筋の涙が頬を伝って、床に落ちた。

那音が…泣いてる…。

「……………」

とりあえず、私はこの場から離れることにした。

ツラくてツラくて

心が壊れそうだ。

心臓がえぐられてるみたいに、ズキズキと繰り返す痛み。

「…っ、」

私はふらつく足で、立った。

…カタン、

「あっ…」

ドアにぶつかった。

やばい。バレちゃう…!!

私はガバツと勢いよく立つと、階段を一目散に駆け下りた。

バレたかも知れない。

）
）
）

「……」

夜、寝る前に急になりはじめたケータイ。

那音……？……健太？

恐る恐るケータイを開くと、知らないアドレス。

【a y a t o . m . x x x x @ e z w e b . n e : j p
【p】

「……誰？」

少し不信感を持ちながらも、メールをあけた。

「……あ」

【綾野！。

ごめん。勝手に

光奈から教えてもらっ

た（・人・、）

麻樹絢斗】

麻樹だった。

あ…そっか。

アドレスに名前らしきものがあったな。

気づかなかった。

【大丈夫だよ（＾|＾）】

私はそれだけ打つと、麻樹に送信した。

………なんでいきなり…。

五分ほどでメールは返ってきた。

【ありがとうf^|_^；

んで、今日さ

聞いてたよね？】

…気づかれてる!？

ああー…。
しくった。

【…ごめんね。
たまたま…教室行った　らいたから
つい気になって…】

素直に謝るのが第一だ。

怒るのかな…？
どうしよう。
恐くなってきた。

……返信こないな。

なんて思った矢先、ケータイが鳴った。

【謝らなくていいよ^_^；　怒ってるわけじゃない　からさ^_
| ^)
ただ、那音の気持ちも　わかってやって？
って事をいいたくて】

…お、怒ってない。

麻樹って…なんか印象変わった。

友達思いのいい人だ。
光奈が好きになるのがなんとなくわかった。

【ありがとう】

私はそうとだけ送ると、ケータイを閉じた。

初めてみた那音の涙。

私の幸せを…本気で願ってくれてる。

わかったよ。

那音。

私は、幸せになるから。

だからあと少し、

時間をください。

最終話・君がいること

気がつけば、私は校内を走り回っていた。

「はっ…はぁ…」

なんでこんなことにつ…!!

それはつい数分前の事。

…

那音に話があったかった私は、那音を探しに廊下を歩いていた。

あ。いた。

「な、那音…」

私は小さな声で呼んだ。

那音は気づかない。
それもそうだろう。

周りには女の子がうじゃうじゃいるんだから。

きゃあきゃあ騒いでて、すぐくぐるさい。

那音で、なにげにモテる。

すると、ちらつと私の方を見た。

目があった…!!

「…なお、」

「教室行こ？俺さみい」

その言葉は私に向けられたものではなかった。

言葉を遮られて

拳げ句の果てにムシされて、逃げられて。

でも、もうくじけない。

「…那音っ!!」

バカでかい声を那音に向かってだした。

すると、数人の女子と那音がこっちを向いた。

「…なに？」

明らかに冷たい瞳。
明らかに冷たい声。

だけどそれは、那音の優しさ。

「は…話が…ある…の」

ちゃんとハッキリさせる。健太も呼んで。

「…ここで話せば？」

私はビクッと肩をあげた。

「…ムリ、だよ。」

「ふたりに話したい」

私は那音と目を合わせた。

那音はふいっと、目をそらした。

「…いいよ？」

「…！！ありがとう」

「そのかわり」

冷たい、低い声のまま那音は私に言った。

「健太呼んでこい」

いきなりの要求に戸惑う私。

でも…話せるチャンスだ。逃すわけにはいかない。

私は教室に駆け戻った。

「…健太っ…！！」

「え、な…なに？」

いきなり私が話しかけたことに驚いている健太。

「ちょっと、こっち」

私はそう言つと、健太の手を引つ張つて、廊下へと連れ出した。

廊下に戻ると那音だけだった。

「きたんだ」

「は…？え？なに？」

健太は戸惑っていた。

私もなにをするのかわからないから戸惑っていた。

「…桜羽…」

ポツリと那音が呟いた。

「…なに？」

私は冷静に答える。

「先に言っておく。俺はもうお前の事は好きでもなんでもねーから」

那音は私と視線を合わさずに、そう言った。

「……知ってるよ」

私は那音に笑顔を向けた。

那音は下を向いたまま。

「……健太」

「……なに」

健太はあきらかに不機嫌だった。

「頑張れよ」

……？

なにが、頑張れ？

「ゲームだ」

「…え？」

ゲ…ゲーム…？

「ルールは簡単。俺と健太は、この校内を15分駆け回る。それを桜羽が捕まえる」

「…それで？」

「ただそれだけだ」

ふたりを…いつぺんに？

「そ…そんなの…」

「いいな？健太」

那音は健太に問いかける。
健太はコクリと頷いた。

「ちよっ…」

待つてよ。

なんで…!?

「ゲーム開始だ」

那音がそう言うと、ふたりは走り出した。

なんでゲームになるの!?

ゲームっていうか…ただの鬼ごっこじゃない!!

私…どっちを追いかければ…。

「桜羽」

私は……。

「桜羽」

私っ………！！

私はひとりのもとへと走り出した。

…

「はあ……は……ど……」

もう10分たった。
あと5分……！！

どこにいるの…？

どこにいるの、

私は走った。

ただがむしゃらに。

ただ大好きな人を追いかけて。

「……………あ！！」

そうだ。

もしかしたら…

“あそこ”にいるかもしれない。

私は走った。

体育館に。

急げ…!!

あと5分しかない!!

…

「はあ…は…」

やっぱり。

いると思った。

「…なんでわかった…!？」

「…逃げられないよ？那音」

私はじりじりと近寄った。

だけど、一瞬のうちに体育館のドアに向かって走って行ってしまった。

「…待ってっ!!」

私が手を伸ばそうとした瞬間に振り払われた。

その衝撃で、胸ポケットに入っていたケータイがでそうになった。

「…わっ！！」

思い切り、ケータイを床に落とした。

その衝撃で、キーホルダーが外れた。

ハートの…光奈が健太とペアでくれたキーホルダー。

「俺の勝ち」

私はキーホルダーに…

手を伸ばさなかった。

那音に思い切り体当たりして、後ろから抱きしめた。

「お…お前！！キーホルダー…！！！」

「那音の方が大事に決まってるでしょ…!？」

ごめん。

ごめん健太。

いっぱいいっぱい
優しくしてくれた。

いっぱいいっぱい
私を慰めてくれた。

健太のこと、大好きだった。

ごめんね…。

ごめんなさい。

「……っんでだよ…!」

那音は私に向かって呟いた。

「好き」

私は那音の背中に顔を埋めて、呟いた。

「……っ……だから俺は、お前のこと……」

「……嫌いでいい」

「……え？」

たとえば、本当に嫌われてたとしても、もうきつとっつん。絶対に

迷わないよ。

「大好き」

「……ばかかよ」

那音は下を向いて、震えていた。

「すごいと思った…他人の幸せを願えるの」

こんな人に好かれる私は、本当に幸せものだ。

「…なんでだよ」

「私にはそんな事、できなかつた」

一度是那音とりっちゃんの幸せを願ったよ？

だけどね。

那音みたいにはできなかった。

那音に嫌われるのが怖くて。

「健太は…？」

「健太のこと、大好きだった。けどそれ以上に那音が好きなの」

健太のこと裏切ってごめんなさい。

でもきつと健太は最後まで優しいんだろっね。

でもね。

でもね健太。

もう私は健太の優しさには甘えない。

「ねえ、那音」

「……なんだよ」

「好きな人いる？」

「……いるよ」

「……教えて」

くると、那音が私の方を向いた。
そして私の唇にかかるくキスを落とした。

「桜羽が……好き」

そう言って那音はちらっと八重歯を見せて笑った。

「私が好きなのは……!!」

私が好きなのは
那音でした。

ねえ那音。

私いっぱい傷ついたんだ。

私いっぱい泣いたんだ。

だけどそれ以上に

いっぱい

笑った。

嬉しかった。

楽しかった。

………愛しかった。

私にとって、那音は…必要な人だった。

……那音。

私にとって

君がいることがどれだけ大切なのか

いろいろな人を傷ついでしまったから

やっと気づいたよ。

いろいろな人を傷ついでしまった。

でもだからこそ

“ここ”にたどり着けたのかもしれない。

那音がいたから
見える世界が輝いた。

那音がいたから
初めての恋を知った。

那音がいたから
人を愛することを知った。

那音。

那音がいることが

私にとっての全てなんだ

最終話・君がいること（後書き）

終わり方に

けっこう困りました。

そして、ここまで読んでいただき、ありがとうございます！

まだside那音とside健太があるので
暇があればどうぞ・・・

最終話・side那音・ゲーム

「ねー那音遊ばー？」

律と別れてからすぐに情報が回ったのか、女がやたらに俺の周りに集る。

やめてほしい。

だけと言えない。

そんな、自分が嫌だ。

そんなある時だった。

俺の視界に一瞬写った、桜羽。

「な、那音……」

桜羽に小さな声で呼ばれた。

俺は気づかない。

気づかないフリをする。

嫌われたい。

諦めたいんだ。

しばらく経っても、桜羽はその場を動かなかった。

流石に気になる。

俺はちらつと桜羽の方を見た。

目があった…。

「…なお、」

「教室行こ？俺さみい」

桜羽の言葉を遮って、周りの女子に声をかける。

すると周りの女子たちはぞろぞろと教室に向かって行く。

「…那音っ！！」

バカでかい声を俺に向かって出した桜羽。

流石に驚いて、俺は思わず振り返った。

「…なに？」

明らかに冷たい瞳で。
明らかに冷たい声で。

嫌われたいんだ。
諦めたいんだ。

ただそれだけだ。

「は…話が…ある…の」

真っ赤な顔してうつむく桜羽に、思わず心臓が波打った。

「…ここで話せば？」

だけど

嫌われないんだ。
諦めたいんだ。

俺は冷たく対応する。

「ふたりで話したい」

そんな俺の気持ちも知らずにしゃべる桜羽。

俺は桜羽と目を合わせた。

俺はふいっと、目をそらした。

…一回くらいいいか。

しょうがない。

「…いいよ？」

「…!!…!!ありがとう」

「そのかわり」

冷たい、低い声のまま俺は桜羽に言った。

「健太呼んでこい」

どうせ、そっち系の話だろう？

桜羽は教室に駆け戻った。

「なんか大変そうだから、ウチら教室いるね」

そう言うと、女子たちは教室に入っていった。

しばらくして桜羽がでてきた。

健太もいるな。

「…きたんだ」

「…は…？え？なに？」

健太は戸惑っていた。

桜羽もなにをするのかわからないからか、戸惑っていた。

「…桜羽…」

ポツリと那音が呟いた。

「…なに？」

桜羽は冷静に答えた。

「先に言っておく。俺はもうお前の事は好きでもなんでもねーから」

健太を選べ。

俺は桜羽と視線を合わさずに、そう言った。

「…知ってるよ」

俺は下を向いたまま。

「…健太」

健太……。

「……………なに」

健太はあきらかに不機嫌だった。

「頑張れよ」

俺は桜羽を幸せになんかできないから。

「ゲームだ」

「…え？」

ふたりは戸惑っていた。

「ルールは簡単。俺と健太は、この校内を15分駆け回る。それを桜羽が捕まえる」

「…それで？」

「ただそれだけだ」

ふたりを…いつぺんに
そんなのむりだろう？
15分しかないのに。

桜羽。

お前の最後の決断だ。

「そ…そんなの…」

「いいな？健太」

桜羽の言葉を見無視し、健太に問いかけた。

健太はコクリと頷いた。

「ちよっ…」

「ゲーム開始だ」

俺はそう言いつつ、走り出した。

俺はただひとつの場所へと向かった。

「…はあ、…」

体育館だ。

きっと、桜羽はこない。

話がしたいってだけで、健太をほっとくなんて有り得ない。

最初からこのゲームに勝敗はついてるんだよ…。

「……………桜羽」

体育館で抱きしめた。

桜羽の心臓の音。

桜羽の声。

桜羽の匂い。

まだ新鮮に覚えていた。

そんな

体育館は俺にとって大事な場所なんだ。

体育館の時計に目を向けた。

…あと5分。

今頃…健太と。

「はあ…は…、」

体育館に響いた、誰かの荒い息づかい。

「…なんでわかった…!？」

なんで…桜羽が？

「…逃げらんないよ？那音」

桜羽はじりじりと近寄ってきた。

俺はがむしゃらに体育館のドアに向かって走っていった。

「…待ってっ!!」

桜羽が俺の手をつかもうとした瞬間に振り払った。

お前の場所はここじゃない…!!

振り払った衝撃で、桜羽の胸ポケットに入っていたケータイがでそ
うになった。

「…わっ!!」

桜羽は思い切り、ケータイを床に落とした。

その衝撃で、キーホルダーが外れた。

ハートの…キーホルダー。

たしか健太もつけてた。…お揃いか。

ほら、お前の場所はここじゃないだろ？

拾いに行くんだろ？

「俺の勝ち」

俺はそう言っただけで走り出そうとした。

…！…！

な…んで…？

桜羽に思い切り体当たりされて、後ろから抱きしめられた。

「お…お前…！キーホルダー…！…！」

大事なんだろ？

健太とお揃いだろ？

なんで拾わないんだよ。
なんで俺なんかに

手のばしてんだよ。

「那音の方が大事に決まってるでしょ……!?!?」

ドクン、と心臓が動いた。

「……っんでだよ!!」

俺は床に向かって呟いた。

なんでだよ。

なんで健太追いかねーんだよ。

なんで俺なんかをこんな汗だくになるまで
息切らすまで探してんだよ。

「好き」

桜羽は俺の背中に顔を埋めて、呟いた。

その声が背中から全身に響く。

なんて心地が良くて
安心できるのだろう。

だけど

「……っ……だから俺は、お前のこと……」

「……嫌いでもいい」

「……え？」

思いもしなかった言葉に目を丸くする俺。

「大好き」

「……ばかかよ」

なんで、俺なんかのところに来てくれたんだよ。

俺は下を向いて、震えていた。

「すごいと思った…他人の幸せを願えるの」

「…なんでだよ」

なんで、知ってたんだよ。

「私にはそんな事、できなかつた」

「健太は…？」

健太は…いいのかよ。

だって健太はいつでもお前のこと好きでいたんだぞ？

きつと、ずっと。

「健太のこと、大好きだった。だけどそれ以上に那音が好きなの」

“那音が好きなの”

いつぶりだろう。

桜羽に“好き”って言われたの。

ねえ、桜羽。

いいんだな？

本当に俺で…いいんだな？

俺でいいんだな？

「ねえ、那音」

なに？桜羽

「……なんだよ」

「好きな人いる？」

いるに決まってるじゃん

「……いるよ」

「…教えて」

桜羽だよ？

くるりと、俺は桜羽の方を向いた。

そして桜羽の小さな唇にかかるくキスを落とした。

「桜羽が…好き」

そう言っつて俺は笑った。

俺は知らなかつたんだ。

桜羽がどれだけ大切だったかかってこと。

きつと

いっばい傷つけた。

いっばい泣かせた。

いっばい悲しませた。

……ごめんな。

そしていろんな人を傷つけてしまった。

だけど、それでも

想い続けたい人がいた。

いっばい空回りした。

いっぱい遠回りした。

でもだからこそ

“桜羽”にたどり着けた。

ねえ、桜羽。

俺、初めて人を想って泣いたよ。

俺には桜羽がいないとだめみたいだ。

俺にとっての全ては

桜羽だから
……

最終話・side健太・全て（前書き）

初・side健太です！！

俺は

“桜羽が幸せなら”

そんな考えできなかった。

那音は、すごいな。

…

もう桜羽に距離を置きたいと言われてから
もうけっこう経った。

そんなある日。

「…健太っ…!!」

いきなり桜羽に呼ばれた。

「え、な…なに？」

当然びつくりする俺。

「ちょっと、こっち」

桜羽に手を引かれて、廊下へと連れ出された。

な…なんだ？

意味不明のまま俺は廊下にでた。

そこには冷たい瞳をした那音。

幼なじみの俺でも見たことのない、瞳。

「…きたんだ」

冷たい声で一言。

「…は…？え？なに？」

俺は戸惑うことしかできなかつた。

「…桜羽…」

ポツリと那音が呟いた。

「…なに？」

桜羽は冷静に答えていた。

「先に言っておく。俺はもうお前の事は好きでもなんでもねーから」

那音は桜羽と視線を合わさずに、そう言った。

何言ってるんだ、コイツ。

俺は無性にイライラした。

「…知ってるよ」

桜羽は那音に笑顔を向けた。

ツキン、と心臓に一本の針が刺さった。

那音は下を向いたまま。

「…健太」

そう、俺の名前を呼んだ。

「……………なに」

俺はあきらかに不機嫌だった。

「頑張れよ」

は……………？

ふざけてんのかコイツ。
なにが、頑張れだ？

「ゲームだ」

「…え？」

ゲ…ゲーム…？

「ルールは簡単。俺と健太は、この校内を15分駆け回る。それを桜羽が捕まえる」

「…それで？」

「ただそれだけだ」

桜羽が…どちらかを選ぶってことか？

「そ…そんなの…」

「いいな？健太」

那音は俺に問いかけた。
俺はコクリと頷いた。

「ちよっ…」

桜羽は待つてとというような顔をした。

これでいい。

これで白黒がつくなら。

「ゲーム開始だ」

俺は走り出した。

廊下をひたすらに。

「……………桜羽」

桜羽は来てくれるのだろうか？

…俺の予想だと、こないな。

だって桜羽の瞳が俺に訴えてたんだ。

答えは決まってるって。

…俺なわけがない。

「………那音はいつもいいとこどりだ」

俺は走るのをやめて、地面に座り込んだ。

カツコ悪いな。俺。

…初めて人を好きになった。
初めて人を愛おしいと思った。

大好きだ…。

いや。

もう“好き”だなんて言葉じゃたりない。

「っ……情けねえ……」

涙がこみ上げてきた。
ただ俺は必死に我慢した。

桜羽は…こない。

今頃、那音と…。

「利用してもいい」

最初そう言って付き合った。

ただ、ただ桜羽が好きで。

転校してきた桜羽に、俺は一目惚れをした。

雰囲気がとても優しい。

桜羽の笑顔を見ると、心臓がドキドキした。

初めての恋だった。

そして

もしかしたら

最初で最後かもしれない。

これ以上に俺は人を好きになれる気がしない。

「……………桜羽……………」

もう一度。

もう一度抱きしめたい。好きだって
何百回でも何千回でも言っつてやりたい。

俺の全部を伝えたい。

だけど、今の桜羽にとってはそれは迷惑にすぎない。

だから俺は転校する前にだけ、気持ちを伝える決意をした。

初めて

恋をした。

初めて

大切な人を抱きしめた。

初めて

人を愛おしいと思った。

初めて

離したくないと思った。

初めて………

桜羽が全部初めてだったんだ。

そして俺は

初めて

本気で

人の幸せを願おう。

俺の全ては

桜羽だったから。

最終話・side健太・全て（後書き）

これで

君がいることの全て
は終了しました。

本当は健太が転校して、クラス替えして・・・

高校生になって、と

考えていたのですが

なんか気づいたら終わってしまいました（；|；）

しっくりこなかった方、申し訳ありません；

どうも終わりが苦手で。

最後になりましたが

今まで読んでいただき本当にありがとうございました。

感謝でいっぱいです。

感想など、入れてくれれば嬉しいです；

本当にありがとうございました（*^o^*）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9447g/>

君がいることの全て

2010年10月15日08時59分発行